Blossom

朔野 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌｏｓｓｏｍ

【Ｎコード】
Ｎ２０２３ＢＡ

【作者名】
朔野　凪

【あらすじ】
男子ヒップホップ部で大人気な彼。
優しいけれど不器用な彼は、甘すぎる恋をめいっぱいアピールしてくる。男子ヒップホップ部を舞台とした、先輩×後輩のベタベタ恋愛小説です。イケメンに逆ハーされてます。（Ｐｉｘｉｖ、小説サイト『ー　ｅｍｏｔｉｏｎａｌ　ｓｅｎｔｅｎｃｅ　ー』にて公開中）

Ｂｌｏｓｓｏｍ（前書き）

キス（軽いもの）までの表現があります。
甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

Blossom

軽やかに繰り出されるステップ。音もなく滑り、回る革靴だけでも見とれてしまいそうだった。
この学校でも有名な男子ヒップホップ部のダンスは、予想以上に魅力的だった。
新入生歓迎会、という割とラフな会の中で、場違いなほどにレベルが高い。
それに、今踊っている面々の顔の端整さ。この中の誰か一人くらいは、日本の八割の女性のストライクゾーンをついているんじゃないかと思った。
私も、一番センターにいた茶色い髪で、一際高い背の人が気になって仕方がなかった。

「基山サン」
聞き慣れない男の声にびっくりして振り向くと、予想していたよりずっと高いところに相手の顔があった。
そして、見慣れない――いや。
「――！」
彼が身にまとっている服は、先ほどの男子ヒップホップ部の衣装のそれだった。
そして、見上げた先の茶色の髪……。
「おい、サキ、何してんだ」
微妙な笑みを浮かべて、全然知り合いでもないのに私の名前を呼んで、イケメンが私と対峙している。
それだけで、ただでさえ惚れっぽくて大変なのに、私の胸の鼓動は限界を叫んでいた。
「あー……ちょっとこの子に用があるから先行ってて」
彼はさらさらの茶髪をかきながら声をかけてきた男子に告げて、

私の両肩に手を乗せた。
「な、基山サン。俺に惚れただろ」
満足そうにそんなことをさらっと言って、綺麗な唇のラインを上げる。
だから……どうして私の名前を。
冷静な心中は知らん振りで熱くなっていく頬は、彼の機嫌を良くするには十分のようだった。
「別にいいよ。……ん？　あ、なんか色々どうしてって顔してるね。名前は、上履き。あとは――」
肩に置かれた手に力が入って、少し彼の元に引き寄せられる。
ふわりと、男の人に似つかわしくないほどに、花みたいな匂いがした。
「君がそのカワイイ目で俺の動きを追ってるのが、よく見えたんだよ」
彼が低く、しかし甘くそう言い放ったとき、私は急に我に返って、周りの状況がやっとはっきり見えてきた。
なんだかものすごい視線を浴びせられてて……というかっ。
「あの……もしかしなくても、先輩、人気者ですか」
驚くほどすっきりと口をついて出た言葉が、私の頭の中で勝手に「あーあ」、と後悔を呼びかける。
別に何もしてないのに……どうしてこんなに残念な気分になってるんだろ。
「うん。去年の人気投票はナンバーワン制覇、松岡（まつおか）　咲哉（さきや）クンです。基山サンは、今日から俺のお気に入りな」
彼は羽織ったジャケットを軽く整えて、私にひとつ手を振って去っていった。
何もかもが一瞬で行われすぎて、私はただ唖然とするしかなかった。
その後、私が女子からも男子からも、学年を超えて凄まじい視線

を浴びせかけられたのは言うまでもない。

「ねえねえ、松岡先輩と何か関係あるの！？」
「先輩が基山さんに惚れちゃったとか……！？　うっそー」
「き、基山さんがあの人に惚れたというのは本当なのですか……！？」
「ねーねー、スリーサイズ教えてよ」
とりあえずどさくさに紛れて変なことまで聞いてくる輩もいて、うっとうしいばかりだったけれど、これ以上学校の人を敵に回すのも嫌だったので、適当でもひとつひとつ返答していった。
「全っ然、初対面です！　それはわからない！　惚れてません！　トップシークレットです！」
とにもかくにも、あの場にいた生徒のほとんどに顔を覚えられて、マークされてしまったことに違いはない。
これ以上誤解やら何やら――があったとしたら、増やさないようにしなければならない。
あの男……卑怯なほどにイケメンな男。松岡　咲哉が、高校生活初日にして、かっこいいとは思ったものの、少し恨みたくなった。

初めての昼休み、何だか嫌な予感と共に教室の外がざわつき始めて、自然と溜息が出た。
予想通りすぎて泣けてくる。こんなことになってしまわなければよかったのに。
「基山サン、やあやあ！」
明るくウィンクしかけた憎むべきイケメン、松岡　咲哉は、たくさんの黄色い歓声と崇拝の視線を受けながら、男子ヒップホップ部であろう、これまたイケメン何人かを従えていた。
彼らが小さく言った言葉が不思議と耳に入ってしまう。
「……チビだな」
「っはー、顔赤いよ？　かわいいねぇ」

「サキ、俺あっちの子がいー」
すらっとした体型の、真っ黒髪の、中性的な人。
明るい赤みがかった茶髪を後ろでちょんと結んでいる、軽そうな人。
松岡　咲哉と同じ色の茶髪で、人懐っこい笑みを浮かべている人。
とりあえず日本女性五十人中、四十九人が確実に誰か一人を「かっこいい」と言うであろうイケメンズ。
なんだかここまでに浮世離れした端整さだと、逆に惚れっぽい気持ちも収まってくる。
「基山サン、桃歌っていうんだね。基山（きやま）　桃歌（ももか）。名前までカワイイとか卑怯だなあ」
卑怯なのはお前の方だ、と心の中で舌打ちしつつも、彼のいちいちかっこいいしぐさに見とれてしまう。
一体どこから私の名前を聞き出してきたんだろう。彼ならその辺の人にでも聞けそうだけれど。
それにしても、この人たちは一体何を……。
「桃歌チャン。生徒に変な誤解させてるの嫌でしょ」
周りに聞こえないように耳打ちされた、甘い響きの声。
何だかその誤解を招いた本人に縋ったら、また変な方向に進んでいきそうだったけれど、私の返事やら何やらも待たずに松岡　咲哉は私の右手を優しく、しかし強引に握って歩き出した。
「ちょっと……っ、あのっ」
彼を見上げても私の方に目もくれようとしないので、周りをきょろきょろして視線で助けを求めていたら、真っ黒髪の人が鼻で笑った。
それを見て、赤茶色の髪の人が眉を下げて笑った。
「隼、かわいそーだろ。もも……基山チャン、俺、芳花（よしはな）　水瀬（みなせ）。よろしくね」
紳士的に優しく接してくれたのはよかったけれど、その表情は明らかに見下していたし、何より自己紹介というこの状況下でほとん

ど意味のないことをされて、私は少し腹が立ってきた。
「あのっ！　ホントになんなんですかっ」
少々声を荒げて言うと、松岡先輩はこちらをちらと見たけれど、それは一瞬だった。
「まあまあ、ついてきなって。――桃歌チャンにとっても別にマズイことはしないから」
もう既に結構マズイんですけれども！！
「サキー、俺腹減ったよー。いっそその子担いで走ろうぜー」
地味に恐ろしげなことをさらっと言いのけた、髪色・松岡・モドキは、私を何だと思っているのだろうか。
そんなコトをされたら、本当に色々な意味で私の立場が危うい。
「ま、つおか先輩！　あの、教室に帰してくださいっ」
初めて名前を口に出して懇願すると、松岡　咲哉は私の手を握っていた力を強めて、でも不思議そうに首を傾げた。
「なんで？　嫌？」
あまりに無邪気なその口調に、思わず言葉に詰まると、彼はにっこりと笑った。
「ダイジョーブ。俺に付いてくれれば、変な誤解はされないって。――誰も、桃歌チャンに手出せないようにしてやるから」
安心させるような口調と、その後についてきた低い呟きで、つい慄いてしまう。
そんな私を見て、私の左後ろを歩いていた、真っ黒髪の人が真面目な顔で言った。
「おいチビ。このまま離れた方がいいとか思ってるかもしれんが、その方が標的にされんだよ。俺らはそれをもうわかっててやってるんだ」
なら……、なら、最初から――
「私なんかに、声をかけないでくれれば……っ」
やけくそ半分で聞こえないかと思って言ったのに。私の右手を支配している人は、気づいてしまったらしい。

恥ずかしさやら何やらで真っ赤な顔と、涙も浮かぶ目を見られた。
「あのさぁ、わかってないかもしれないケド」
あくまで優しく、優しく頬をなぞられる。骨ばった細い指が、目尻をかすめた。
彼の綺麗な唇に、見とれてしまう。
「俺は、桃歌チャンを泣かせたい訳でも、困らせたい訳でもないからね？」
「わ、かってます」
嫌だけど、困ってるけど。
さっきの真っ黒髪の人に言われたことと、彼の優しい言葉から、なんとなく気持ちは汲み取れたから。
ただ単に彼を拒絶することは、できそうもなかった。
「サキ、何を迷ってんだよ、奪っちゃえ」
私が言葉に詰まって俯いていたら、面白そうに言う声が遠くから聞こえた。
そして、私がその言葉の意味を考え始めると同時に、
「水瀬、ふざけるのもいい加減にしてくれないか」
松岡　咲哉の恐ろしいほど低い声が響いて、鈍い物音。
少し心配になって声の主――芳花　水瀬の方を見ると、彼は松岡咲哉に蹴飛ばされていた。
「ジョーダンだっつの……サキ、きっついな」
笑いながら言ったものの、明らかにその瞳は怯えていた。
昼休みなので賑わう廊下の人ごみの向こうから、彼は腰をさすりながら小走りで帰ってくる。
「桃歌チャン、行くよ」
無情な声にびくりと体を震わせると、彼は安心させるように左手を強く握り締めた。
「松岡先輩」
「なに？」
「あの……なんで、私」

「桃歌チャンがカワイイ目で俺の動きを追ってるのがよく見えたって言っただろ？」
「だって、そんなの、皆」
「だーかーら、俺は桃歌チャンが気になったの。それだけじゃだめ？」
全て、余裕げに、まるで心を読んでいるかのように、先回りされてしまう。
「先輩の”お気に入り”はいっぱいいるんですか」
「そんな訳ないだろ」
またもや即答されてしまったけれど、私は彼の考えていることが全然わからなかった。
だって……お気に入りって何なの？
その口調は嘘ではなさそうだったし、彼が不真面目な人には、私には見えないけれど。
うんうん一人で唸っているうちに、開けたところに来ていることに気がついた。
ここは……中庭？
まだ全然校内を探索する時間もなかったから、ちらっと見かけただけの小綺麗な中庭。
ベンチと樹木という、シンプルな公園のような構成。
「はー、腹減ったー。サキ、俺先に食べるからなぁ？」
髪色・松岡・モドキがまた、私の存在を無視したように気まぐれに言い放った。
よく見たら、中庭は各クラスの教室の窓から見えるようになっていて、たくさんの人が中庭を見下ろしていた。
中庭には不思議なことに、私たち以外に誰もいなくて――。
「あぁ、いっつも、ここ俺らのスペースになってるんだ」
松岡……先輩がのんびりと言って、私の手を引く。
たくさんの視線を浴びせられるの、慣れているんだろうな。私みたいな平凡な人間は、もう恥ずかしさで色々ガチガチなんだけれど。

最初は疑問に思ってたはずなのに、なんで素直にここまで来てしまったんだろう……。
「よし、準備するか」
松岡先輩がそう言うと、真っ黒髪の人が持っていた包みを広げた。
「あの……」
見回したら髪色・松岡・モドキはもう膝の上に乗せたお弁当をついていた。
……え？
「ほら、水瀬、あれくらいでへばってんじゃねぇよ」
風呂敷の端を几帳面に引っ張ってしわを伸ばしながら、真っ黒髪の人は吐くように言った。
「あぁ……」
先ほど打った肩をさすりながら芳花先輩が歩み寄って、包みの中に入っていた……重箱？のようなものを丁寧に開けた。
「あの、何を」
「ん？　何って、飯」
……ご飯？
確かに、髪色・松岡・モドキは一人で楽しそうにランチタイムを満喫しているようだし、重箱のようなものの中には、おいしそうなおかずとおにぎりが。
私、教室にお弁当置いてきちゃったけど……って。
「ご、ご飯ですか！？」
え、え？
何だかさっきまで当たり前みたいについてきてしまったけれど。その目的は何だか嫌な予感がしたから想像もしたくなかったけれど。
ご飯を一緒に食べる……だけ？
「うん。隼の飯はうめーぞ」
何事もなかったかのように淡々と言いのける。
隼……って、さっき芳花先輩が真っ黒髪の人に言ってたけど。
「ああ、隼って、あの黒いヤツね。笹神（ささかみ）　隼（はや）。……女々しいって言

ったら殺されるから注意な」
最後の一言は、私にしか聞こえないようにこっそりと言った。
あんなに中性的な顔立ちをしているから、言われ慣れてそうなのに、嫌なんだ。
「んでー……あと紹介してないのは……。琴か」
そう言って、松岡先輩は、早くも一人ランチタイムを楽しむ髪色・松岡・モドキを引きずり寄せた。
「何だよおサキ！　今いいところだったんだよ！」
不満そうに言う顔は、幼さを残している気もするけど、でもやっぱり綺麗だった。
そんな髪色・松岡・モドキをなだめるように松岡先輩は、はいはいと言いながら肩に手を乗せた。
「ほら、お前だけ自己紹介してない」
「えー……だってこんなガキみたいな……。――お、俺は千種（ちくさ）　琴（こと）吹（ぶき）」
松岡先輩に笑顔のまま睨まれて言い直す。
……権力、強いんだなあ。
「サキ、食うぞ」
「ん？　あぁ。……桃歌チャンはここね」
そう言って彼の隣に強引に座らせられる。早くも自分の弁当を片付けた千種……何だか悔しいけど先輩も、輪に入る。
……まだ食うんかい。
そうしているうちにも、中庭を見下ろしている野次馬的な生徒は増えていっている。ウッソーみたいなものから、意味のわからない声援のようなもの、そして泣き声みたいなのも聞こえる。
この際、気にしないようにした方が、いいかな……。
何だか良心がとてつもなく痛んできたので、遠くから聞こえる声は全てシャットアウトすることに努めた。
「ほい。……んじゃ、いただきます！」
松岡先輩の気持ちいい一声で、はっと我に返って目の前の重箱に

目をやる。
四人分だとしても、物凄く多いような……。
そういえば、私のことはきっと想定していなかっただろうな、と思って、手をつけるのも億劫で、渡された割り箸を弄んでいたら、笹神先輩に恐ろしい目で睨まれた。
あは、あはは、おこ、怒りますよね……。
「……お前の分もあるから、遠慮すんな」
意外にも優しくそう言って、私から目を逸らす。
どうしてだろう。そう思っていたら、松岡先輩が笑って答えてくれた。
「ああ、隼の弁当、いっつも多めに作って、残りモノは琴のおやつだから。別になくても不満は言わないからダイジョーブ」
物凄い言われそうだけど。後で私のお弁当を献上すれば大丈夫だろうか……。
とにもかくにも、今現在この中で私に親切してくれる順番は、松岡先輩、笹神先輩、芳花先輩、千種先輩だという認識で定着した。
「それじゃあ……イタダキマス」
皆さんに人気のあるおかずを頂いては申し訳ない、となぜか白々しくもそう思ったので、誰も手をつけていない魚に箸を伸ばしたら。
「……あ」
千種先輩がぽろっと残念そうな声を上げた。
あれっ狙ってたのかな。そう思って彼の顔を見たら、ちょっと眉を寄せて唇を締めていた。
……松岡先輩のこととか、気にしてるのかな。
「あの……私、いいですよ？」
好き嫌いはないし、何でも大体大好きだもの。
「べ、別に狙ったりしてないから、別にいいよ！」
別にが二つもついておりますが。
慌ててそう言う姿が少しかわいいな、なんて思った。
「ほらほら、人の好意は素直に受け入れるもんだぜ」

すっかり先ほどの弱気は消えうせた芳花先輩が、千種先輩を小突く。
うんうん、その通りその通り。いやいや、そんなに親切したつもりじゃないけれど……。
「あ、アリガト」
ぼそっと言った千種先輩は、ちょっと赤かった。つい笑顔になったら、隣でむせる声が聞こえた。
振り返ったら、松岡先輩が思いっきりむせていた。
あれ、あれ、顔赤くないですか――？
「だ、大丈夫ですか？」
「けほっ……う、うん……。ヤバイ、桃歌チャンの笑顔、カワイイ」
なななんてことを言うんだろう。
本日三度目のイケメンからの「カワイイ」で、若干麻痺していた感覚が戻ってきたけれど、イケメンからの「カワイイ」はどうしようもなく調子に乗ってしまう。
そんな自分をどうにか静めようと奮闘していたら、松岡先輩が笑った。
「カワイイって言われるの、嬉しい？　カワイイな」
ニヤニヤしていたのがバレたんだろうか。
あ、貴方に言われると通常の人の三倍は嬉しいです……。
「桃歌チャン、ほい」
一人で恍惚の海に溺れていたら、急に声をかけられて、その箸につままれたものを見てまた心が躍った。
は、ハンバーグぅぅ！！
そしてそのまま陽気な気分で口を開けて、所謂「あーん」をしてもらってしまったのですが。
忘れていた、いや、シャットアウトしようと努めていた外界から、痛烈な叫び声が……。
あ、あはははは、やってしまった……。
口の中のハンバーグはとんでもなくおいしいけれど、色々考えな

ければいけないことがありすぎて味わえやしないっ！　そう思って眉を潜めると、松岡先輩に囁かれた。
「心配すんなって。俺らとつるんでるトコ見てて、そう簡単に手出したりさせねぇから」
……それって、どういうこと？
まさかこのイケメン集団の中で権力を握っているこの人は、学校内でもそんな権力を持っていたりするのだろうか。
それって、実は結構怖いとか――
「基山チャン、俺が蹴られるの見てただろ……？　キレたら、あれじゃ済まないからナ……」
芳花先輩が苦笑しながら教えてくれた。
あ、はは……そうなんだ。
ここまでの印象として、すごく優しそうなのに。
そう耳打ちされたのが聞こえたのか、松岡先輩は一瞬芳花先輩を睨んだけど、すぐに笑顔になった。
その切り替えが、すごく怖いです先輩……。
「――で。隼のハンバーグ美味いでしょ？」
「あ、はい！」
ホントはそんなにゆっくり味わえなかったけど、口に広がった味は確かに普通のものと違った。
ちらと横目で笹神先輩を見ると、しらんぷりしてるフリをしてるけど、ちょっとちらっとこちらを見て、また逸らしてしまった。
……案外、照れ屋さんなのかな……？　そう思ったら、何だかあのちょっと怖い顔にも慣れてきた。
「あの……先輩方って、男子ヒップホップ部の方ですよね？」
そういえば、気になっていたというか、確認のために聞いておきたかったことだった。
「何を今更。桃歌チャンも見てたでしょ。俺ら四人が二年の部員」
松岡先輩と芳花先輩はわかるけど、何だか後の二人は、ちょっと意外。

確かに、よく見ればさっき踊ってた人にも見えるけど、この雰囲気からは想像できないなぁ。
「はは、琴と隼が意外だって顔してるよ」
そういう風に、二人に聞こえるように言ったから、ちょっと私は慌てた。
も、もうしわけない……。
「よく言われるケドー。俺らもサキほど上手くないけどちゃんと一年はみっちりやってんだかんな！」
おにぎりを頬張りつつ口を尖らせて言う千種先輩。
なんだか……かわいいな。
「何なら今もっかいやるか？　食後の運動として」
そう言って笹神先輩が立ち上がってしまったから、私は余計慌てた。
ちょ、ちょっと、何だか私のこの後が心配になるようなことさせてしまっているんじゃ……。
いや、きっと大丈夫だ。中庭・野次馬ーズは男子ヒップホップ部のダンスが見られて嬉しいに違いない。
そうだそうだ。
だって、心なしか歓声が大きくなって――聞かないようにしてるんだった。
おっしゃ、なんて言って四人して肩とか足とか回し始めたから、私は堪忍して彼らから少し離れた。
「あ、曲とかないけど」
「まぁ、カウントだろうな」
そう言って急に始めてしまう。
ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイ……。
――あ……。
踊り始めないとわからなかったというのも、情けないけど。確かに、先ほど体育館で素敵なステップを踏んでた方々だった。

雰囲気が、全然違う。
松岡先輩が、第一印象みたいに、キラキラ輝いて見えた。
自然と鼓動が速まる。かっこいい。輝いてる。
どんな言葉も野暮ったいだけに感じる。
衣装じゃなくても、平凡な私服でも、何故か特別なものに見えてくる。
四人揃ってフィニッシュのポーズをとったとき、中庭・野次馬ーズの皆様が拍手と歓声を中庭に浴びせてきた。何だか私もガチガチになって拍手していたら、「基山さんやるぅー！」みたいな声も聞こえてきて、もうホントに勘弁してほしかった。
私は目立ちたくなかったのにっ。
「な、わかったか？」
何故か芳花先輩のあからさまに見下した笑みもかっこよく見えて、ちょっとだけ悔しくなった。
やっぱり、こういうことやる時って、人は変わるものなんだなぁ。
そのとき、予鈴が鳴った。
「あ、もうこんな時間か。――じゃーね、桃歌チャン。また、放課後」
「おやつの提供は早めによろしく！」
先輩達が手を振りながら去っていく。
千種先輩……抜け目ないな。
って、放課後も！？
なんだか、イケメン四人に囲まれると精神的に疲れるのだけれど……。

少々迷いながらもなんとか教室に戻ると、驚いたことに、教室にいたほとんどの生徒には、質問攻めとか好奇の視線ではなく、友好的な笑顔を向けられた。
「ねぇねぇ、えっと……基山さん、ううん、桃歌ちゃん！　あたし、羽崎（はねざき）　紗奈（さな）。あのね、昼休みみんなと話してたんだけど……桃歌ち

ゃん、かわいいから、あの先輩たちといると、何だか羨ましいとかなくて、『いいなぁ……』って感じなの！」
羽崎さんは、ふわふわの髪をツーテールにしていて、明るそうだけど綺麗な女の子で、雰囲気とか話からすると、もう既に友達がたくさんできたみたいだった。
「や、そんなこと絶対無いよ。私自身、なんだかもう気圧されちゃったもの……。あの、紗奈ちゃんって、呼んでいい？」
彼女の話し方には全然嫌味なところがなかったし、何より久々に女の子と話したので安心して、友達になっておきたいなあ、と思った。
「紗奈でいいよ！　あんなカリスマの塊みたいな先輩たちに一瞬で慣れちゃう方がすごいかも」
確かに、そうかもしれない。
私だって、多少は正気で話ができた分、まだマシなのかもしれない。
ごく普通、いや、普通より惚れっぽい私にとって、あんな状況、おいしい以外のなんでもないもの。気に入られたみたいなのが嬉しくない訳ないし、全員、かっこいい以外にも、すごく素敵な個性を持っていて、正直まだ信じられなかった。
「あ、もう本鈴鳴っちゃう。じゃあね」

「桃ちー、弁当くれ！」
五時間目が終わったとき、急に高く通る声が聞こえてきた。
あの髪色は……松岡先輩・アンド・モドキ・カラー。明るい茶色の髪が、午後の日差しを浴びて輝いていた。
変なあだ名で私を呼んだのは、千種先輩だった。
正直言わなくても、笹神先輩のあんなにおいしいお弁当を食べた後に、私のお弁当を食べてもらうのは、ちょっと恥ずかしい。
手作りと言えるほどの内容でもないけど、自分で作ったから……。
「は、はい……。あんまりおいしくなくても、文句言わないでくだ

さいね？」
おずおずと言うと、千種先輩は何も言わずに弁当をひったくって、早速卵焼きを口に入れた。
「うまいよ、うん」
昼休みの前半、私をほとんど無視していたときとは違って、にっこり笑ってそう言ってくれたから、私は安心した。千種先輩は、何でも食べるタイプにも、グルメなタイプにも見えない。
そもそも、大食漢というのが意外だった。
「明日からは、隼がもう一人分増やしてくれるから、桃ちーは弁当持ってこなくていいよ」
嬉しいことだけど、いいのかな……と思っていたら、千種先輩がにっと笑った。
「隼、あれで結構喜んでるんだよ」
そうなんだ……。
無愛想に見えて、それなりに素直な人なのかな。昼休みからの会話や反応を見ていて、そう思った。
「俺ら、カノジョとか作らないの、ちょっとしたワケがあるんだけど、さ」
立ち食いしながら、行動とは裏腹に、その表情と声色を真剣だったから、私は少し息が詰まった。
「サキは、桃ちーのこと、からかってるワケでも、ふざけて遊んでるワケでもなくて、ホントだったらカノジョにしたいくらいだって、思ってるみたいだから……」
「……え？」
「ん、つ、つまり。あの、単なる『お気に入り』だと思わなくていいってか、えーと……。これからよろしくな！」
取り繕うように言ったけれど、千種先輩の黄に近い瞳は嘘をついていなかった。
そして、手渡されたのは空のお弁当箱。
「うまかった！　アリガト」

昼休みのときみたいに、照れたように笑った千種先輩はかっこよくもあったけど、かわいかった。
「……かわいい」
「ん？」
「あ、いや、何でも」
聞こえてたかな、何て思ったら、ちょっと恥ずかしくなった。
それにしても、あの細身のドコに、軽く三人分のご飯が入るんだろう……。

「ねえ、隼クン、今度料理教えてよ。アタシ、全然料理できないの」
廊下の角を曲がったら向こうの方から聞こえてきた、媚びた女の声。
嫌な予感がする。冗談抜きで、何だか身の毛がよだった。
『隼』って、笹神先輩のことじゃあ……。
「あぁ……また今度なら」
私がこっそり角の向こうで聞き耳を立てていたら、案の定笹神先輩の声がした。
ちょっと覗いたら、気づいてるのか、ちらっと視線を配せてきて、私は慌てて向こうに隠れた。
……先輩の声、嫌そうだな。
相手は、ダンス部の三年生だろうか。
紗奈にちょっと聞いた話で、ダンス部三年が男子ヒップホップ部二年に媚び売っていて、男子ヒップホップ部三年がダンス部三年にちょっかい出してるとかで……。かなり、複雑な関係があるみたいだった。
「隼クンは、水瀬みたいに頼んだらキスしてくれるの？」
私は、そんな言葉が聞こえてきた途端に、壁の向こうで跳ね上がりそうになった。
芳花先輩が……何だって……？
全てが信じられないというか、聞き間違えじゃないかと思い込み

たくなった。
どういうことなの……？
「……スイマセン、お断りしてます」
しかし、低く冷静な響きの笹神先輩の即答に、私は安堵した。
いやいやいや、これがフツウだよ。そうに違いないもの。
「――そんなこと言わないでよ。ねぇ……たまにはいいでしょう？」
懲りずに食い下がった女に、私は少しどきっとすると共に、苛立ちを感じた。
私が笹神先輩だったら……嫌わないハズがない。きっと彼も本心では、物凄くめんどくさいとかうざったらしいとか思っているに違いない。
「ヤ、ホント、俺キスとかダメなんで……」
焦った声色の笹神先輩が心配になってまた壁から顔を出して覗くと、女が笹神先輩の……物凄く近くまで迫っていた。
見ている私が恥ずかしくなっちゃうよ！　いや、それよりも、この場、どうしよう。
私が出て行ったら確実にあの女に攻撃されるだけだし、かといってここを離れる訳にもいかない。
笹神先輩は手を出さないだろうから、このままじゃ……。
「――友里、笹神とナイショバナシか？」
新しい男の声がした。
もしかして……三年生じゃ。松岡先輩たちにつらく当たってると言うから、あまりいい印象はないけれど、今だけは感謝をしたい。
「そうね……そう。……卓、帰りましょうか」
少しの沈黙の後、諦めたような女の声が聞こえた。
足音が近づいてきたから、私は慌ててあちらの方から来たかのように見せかけるためにその場を少し離れた。
二人の男女とすれ違うとき、物凄いどきどきしたけれど、二人から浴びせられた視線は、別の意味だけ持っていたみたいだったので安心した。

角を曲がった時、笹神先輩は私を待っていたかのように口端を上げて問うた。
「……どう思う？」
「……は、はい？」
「だから、どう思うかって」
彼の質問は、具体的にどこを指していたのかわからなかったけど、私は思ったことをそのまま口にした。
「大変ですね……っていうのと、あの、キスがダメって嘘……ですか？」
言い切るのを待たずに、言葉の後半を聞いた途端に笹神先輩が噴き出した。
「ははっ、さすがに観点が違う……というかなんというか。あぁ、マジメに答えておくと、別にダメとかそういうワケはない」
あ、あれ、違ったかな。
笹神先輩の笑顔はほとんど苦笑だったけれど、やっぱり綺麗で、ちょっと見とれてしまった。
「こういう関係のことな。三角関係……というワケでもないんだが。俺は、滑稽だなぁ、と他人事みたいにそう思う」
その真っ直ぐで真っ黒な髪をいじりながら、私から目を逸らすように、彼は言った。
先輩たちは……一方的に害を受けているだけのように、私は感じるけれど。きっと、三年生からひがみばっかり受けているんだろう。
ダンス部が勝手に言い寄ってきて、それに言いがかりをつけられて。
……『イケメンすぎるのも困る』ってやつかなぁ。
「……先輩たちは悪くないですよ」
そう言うと、笹神先輩はひとつ息を吐いて言った。
「……そうでもないがな。実際、サキの権力の振りかざし方は、目に余ることが少なくない」
彼の伏せられた長い睫毛が、より深刻な雰囲気を醸し出す。

松岡先輩が……そんなことって。
「チビ、お前のことは俺たちの誰が言っても聞かないと思う。やりすぎだと思ったら言ってやってくれ。――何しろ、少し言葉を違えただけでアレだから、お前に何かあったりしたら、どうなるかわかったモンじゃない」
守られてるだけじゃダメというより、守らせすぎちゃダメ、ということだろうか。
確かに、既に、松岡先輩はあまりに敏感になりすぎている気もしていた。
桃歌の名前を呼ばせたくない、というのが一番顕著だった。私としては、桃歌が一番嬉しかったのだけれど。
「ん、ちょうど今から帰る。サキのとこ行くか」
「私、カバンとってきます」
走って行こうとしたら、笹神先輩が無言で後をついてきていたので、歩くことにした。
「あの……。どうして、先輩たちは三年生の先輩と関係が悪いんですか？」
直接聞いたことでもないのに、やっぱり気になって訊いてしまう。
笹神先輩は、少し驚いたように目を開いて、頭をかきながら言った。
「……お前はやっぱり知ってるか。俺は、サキの暴君っぷりと、水瀬のタラシが先輩の気に障ってると思ってたんだが、最近はそうでもないみたいだ。自分でも言うのは気が引けるが……モテるってことらしい」
やっぱり、そうなんだ。
少しの間だけど接していてわかった。彼らは、必要以上に着飾らないし、気にするようなこともしない。
「サキな……そういうのもあって、あんまりベタ褒めしすぎるとどんどん機嫌悪くなるから気をつけろよ。――まあ、そのとばっちりが飛ぶのは大体水瀬だが」

また、乾いた苦笑いをした笹神先輩は、思い詰めているようには見えなかったけど、苦労してるのはきっと事実だろう。
「もし……私が原因で何かあったら、遠慮なく見捨ててください。私は、先輩たちが辛い方が、嫌です」
そうだ、そうだよ。
元から、遠くで見られるだけでも奇跡みたいなもの。
俯いていたから、気がつかなかったけれど、顔を上げたら笹神先輩は怒ったような顔をしていた。でも、それは怖くなくて、優しかった。
「そういう風に思ってくれてる女の子を、男四人がどうして見捨てる？　……そういうことは、言うな。サキは、昼休みのあの一言でも大分参っていたぞ」
『私なんかに、声をかけないでくれれば……っ』
全然、考えなしに言ってしまった一言だけど。自分が気をつけるのが、一番に大切なのかな……？
彼らが、私を擁護することに、何らかの苦悩が伴わないはずがない。
「覚悟はサキ本人に訊け。俺たち三人は、サキの決意には従うって決めた」
口を開きかけたら、やっぱり笹神先輩には先取られてしまった。
せめて、彼らを傷つけない言葉を、探さなきゃ。

「や。桃歌チャン」
昇降口まで、笹神先輩と一緒に下りたら、一瞬松岡先輩は笹神先輩を睨んだ。
「サキ、桃ちーびびってるから」
軽いノリで言ってくれる千種先輩の心遣いが嬉しかった。
相変わらず芳花先輩は知らんぷりみたいな態度だけど、先ほどの笹神先輩の言葉には、彼も私の味方でいてくれるという意味も混ざっていた。

急に松岡先輩が歩み寄って私の右手を握った。
「帰るよ」
緩めた表情に乗せた笑顔が、複雑そうだったけれど、私は気にしないことにした。
だけど……この右手は。
「あのー……」
何とか拒否をしようかと思ったけれど、やっぱりできないよ。
まだまだ全然、下校する生徒のピークだから、突き刺さる視線が痛い。
意外にも皆が、私のことをそう悪くは思っていないのはわかったけれど、それでもやっぱり素直にベタベタするのは嫌だった。
「いいだろ、別に恋人つなぎでもないんだから」
芳花先輩がさりげなく耳打ちしたけれど、そういう問題じゃない……。
と思っていたら、聞こえていたのか、松岡先輩がにやりと笑って指を絡めてきた。
は、恥ずかしいっ！
どうにかしようと、でもどうにもならなくて、一人焦っていると、松岡先輩がはは、と笑った。
「ごめんごめん。からかった」
でも手は離してくれなかった。
観念して歩き出そうとしたら、今度は松岡先輩が驚いたような顔をした。
最初に手つないできたのはそっちなのにっ。
すぐに満面の笑みを向けられて、ちょっと腹が立っていた気分も一瞬で吹き飛んでしまった。
なんて無邪気なんだろう。かっこいいのに、何だかそれとは不釣合いな言葉が浮かんでくる。
不思議だなぁ。彼といると、周りの目も無視できるのは、別の意味なんだろうけれど。

「……あの、松岡先輩」
「……あのさ、サキって呼んでくれないか」
「え！？　あ、はい……。サキ、先輩」
サキって言うと、女の子みたいだなって思ってたけど、そっちの方が好きなのかな。
でも確かに、この三人も全員例に漏れずサキ、と呼んでいた。
「うん。何？」
満足そうに答えた先輩に、少し言いづらくなる。
「あの……私なんかと、関わっちゃって、大丈夫なんですか」
後ろめたさが、言葉を変えてしまう。
違う、違うってば。考えたはずなのに。どうして出てこないんだろう。
「桃歌チャン、俺は君が好きだよ」
急にそんなことを言い出すから、私はびっくりした。
でも、声はいたって真剣だから、素直に受け止めないのは失礼かなぁ……。
「だから、大丈夫かは問題じゃない。迷惑をかけてしまうのは俺の方だ。俺が、俺と皆が桃歌チャンを守るよ」
見つめられた瞳が、逸らしてしまいたくなるほどに真剣で、深かった。その茶色が、夕焼けの赤に照らされて、混ざり合って、綺麗に見えて。
「あ、りがとうございます」
きっと、こう言うのが正しいんだ。受け止めないと、また彼を傷つけてしまう。
私は、これ以上彼を傷つけてはいけない。
そういえば、彼は初めて私に話しかけてきた時、おかしなことを言っていなかっただろうか。私がサキ先輩に惚れたとかなんだとか――。
それって、どういうことだったんだろう。
いや、少しも惚れていないと言ったら嘘になるけれど、彼はそう

断言した。
その目的って、何だったんだろう。少し心当たりがなくもないけれど、何だかそれを言ったら、彼を傷つけはしないけれど、少ししまっておきたくなるようなことだった。
忘れてしまって、いいのかもしれない。
もし、いけないとしたら、彼が覚えている。そして、私にいつか伝えてくれるだろう。
だから、今は気にしなくていいのかな。
「桃歌チャン、物は相談なんだけど」
「……あ、はい！？」
こうして一人で考え事をしていた私は、サキ先輩の急な一言に必要以上に驚いてしまった。
はっと我に返って、右手には彼の大きくて温かい手があることを思い出して、少し恥ずかしくなる。
「マネージャーやらない？」
頭一個分は楽々ある身長差の中、彼は私を見下ろして笑いながらそう言った。
え、えーと……。
「それって、男子ヒップホップ部の、ですか」
「うん。まぁ、俺らの近くに置いておきたいっていうだけなんだけどさ。悪いコトでは、ないと思うよ……？」
ちょっとイタズラっぽく笑って、サキ先輩は私の返答を待った。
女の子に大人気な彼らのマネージャー志願って、たくさんいないのかな……？
それに、私はお母さんが許してくれるかどうかが。
「あのな、マネジ志願はたくさんいるんだけど、三年がほとんど全部弾いてるのよ。主に顔で」
芳花先輩が面白そうに言って、千種先輩が頷く。
じ、自由だなぁ……。
それなら、私がなれるかどうかなんて、わからないんじゃないか

な。
「あー、でもね、俺ら、三年に一人だけ味方いるし、ま、部を纏めるのは俺らだから、ダイジョーブだと思うよ。……それに、桃ちー、俺らのことなかったら無条件でオーケー範囲内だと思う」
千種先輩がまたフォローしてくれ――って、今回ばかりはマネージャーになることがいいとは私はまだ思っていないのに！
だって……確かに他に特にやりたい部活もないけれど、何かこんなに男の人に囲まれすぎるのも、精神的に疲れるというかなんというか。
「俺らの近くにいた方が、他のヤツらもお前や俺らに手出しにくいと思うぜ？」
先ほどの会話の効果もあって、笹神先輩の囁きがかなり心に来た。
……そっか。
ここは、一応頼まれごとでもあるし、引き受けておいた方がいいのかもしれない。
「でも……お母さんが許してくれるかどうか」
お母さんは、部活には入りなさいと言っていた。
元々、男関係なんて皆無だったから、そのあたりどうなのかわからないけど、男だらけのところで少数の女の子と一緒に部活をやっていくなんて、許してくれるのかな……。
「俺が頼みに行くよ？」
何事もないような顔でサキ先輩がさらっと爆弾発言をしたので、私は思わず右手を離してしまった。
「そ、そそそれはだめですよ！」
だって、それって、ウチに来るってことじゃない。余計ダメな感じが既に想像できてしまう。
サキ先輩の行動力には脱帽どころか、最初に持った恨みもやっぱり覚える。
「……だめなの？　んー、じゃあ、どうするか……」
素直に聞いてくれるところだけには、感謝するばかりであったけ

れど。
「あら？　桃歌？」
何だかサキ先輩がぶつぶつ言っていて、笹神先輩が無表情で私を見据えていて、それを面白そうに芳花先輩が見ている、というなんとも微妙な空気の中、聞き慣れた声が飛び込んできた。
え……、えぇ！？
「え、あ、お、お母さん！？」
どどど、どうしよう。
何だか波乱万丈の一日だったけれど、ここに来て本日一番の焦りを感じた。
先ほど右手を離していたことに安心して、後ろにいたお母さんの前に出てくる。
「帰りよね？　……ちょっと、このイケメンな男の子たちは誰？」
そう言うお母さんの顔はあからさまににやけていて、一番に心配したことは大丈夫……かなぁ。
「あ、うん。えと、えーと……」
な、なんて説明しよう。
高校初日でこんなビッグな先輩ができる、普通な言い訳が全然思いつかない。
「桃歌さんの高校の二年生の、松岡　咲哉です。よろしくお願いします」
「……笹神　隼です。」
「芳花　水瀬っすー」
「千種　琴吹です」
一人でわたわたしていたら、サキ先輩が自己紹介を始めてくれた。必要以上に丁寧な気もしたけれど、お母さんは満足のようだった。
「へぇー。先輩じゃないの。桃歌の母です。よろしくね。……で、初日から、部活の先輩でもないでしょう？　一体どんな関係が？」
「えーと、うん。何というか、仲良くさせてもらっているというか――」

「僕は、桃歌さんを男子ヒップホップ部のマネージャーに勧誘しようと思って。僕と彼らは男子ヒップホップ部なんです」
松岡先輩が、私に見せるものとは少しだけ違う、いわゆる「営業スマイル」的な笑顔をお母さんに向けて、丁寧に説明する。
あぁ、さすが、口も上手い……。
「あら、そうなの！　こんな綺麗な男の子たちと部活できるなんて、羨ましいわあ。私は大賛成よ！」
お母さんはすっかりテンションが上がってしまったのか、柄にもなく私の肩をばしばしと叩きながら物凄く満面の笑みを浮かべている。
あは、あはは……。
私は苦笑いすることしかできなくて、何だかもう、どうにでもなれ！　という気分でもあった。
「それじゃ、桃ちーがマネージャーになれるように手配しとくよー」
千種先輩が、お母さんを見て笑いつつそう言った。
そっか、何だか、三年の味方というのは、千種先輩のお友達か何かみたいな言い方だったものね。
とりあえず、男子ヒップホップ部のマネージャーになってしまう流れだけれど、他のマネージャーはどうなるんだろう。仲良くできそうな女の子がいいなぁ……かと言って、一人は嫌だもの。
「それじゃ、買い物の終わったお母さんは若い人たちと一緒に帰りましょうか」
そう言って、お母さんはスキップなんてしながら私たちの集団に加わった。
もう、この状況で手なんて絶対つなげない……。
「アレ、桃歌チャン、そっちなの？」
駅の中で、ホームに行こうとしたら、サキ先輩たちとは、逆方向だったみたいだった。
ここまで、一緒というのも少し意外だったのだけど。

「あ、はい。……今日は、ありがとうございました」
「ありがとうね。こんな子によくしてもらって」
お母さんも便乗して笑った。
「いえ。……じゃあね」
今日、見られるサキ先輩の最後の笑顔だろう。
何だか少し名残惜しくなってしまったけれど、これは夢じゃないんだから、明日また会える。
先輩たちと別れて、ホームに向かったら、芳花先輩だけついてきていることに気がついた。
「……あー、基山チャン、俺だけこっちなんだよねー……」
気まずそうに、めんどくさそうにそう言いながら目線を逸らした。
変な色……と言ったら失礼だけど、赤っぽい茶色の髪の毛は、本当に目立つ。
「水瀬君……も男子ヒップホップ部とやらの部員なのかしら？」
お母さんが気を遣ったのやら好奇心やらよくわからない質問を急にしたから、彼はちょっとびっくりしたみたいだった。
「え、あ、はい。さっきの俺含める四人が、男子ヒップホップ部の二年生全員です」
敬語がとことん似合わないなぁなんて思ってしまったけれど、芳花先輩は全然こちらに注目していないから、ニヤニヤしていてもバレなさそうだった。
「へぇー……。水瀬君は、ダンスはやっていたの？」
「まぁ、そうですね。本格的にはやっぱり高校から」
他愛もないのかよくわからないけど、こういう他人行儀な会話の中から、どんどん新鮮な情報が飛び出してくる。
意味のないものばかりだったけれど、お母さんの好奇心は止まらなかった……。
赤っぽい茶色の髪色は、別に校則違反じゃないこと。（何色でもＯＫ？）。芳花先輩が髪結んでいるのは、伸びちゃったからじゃなくて、そういう髪型だということ。サキ先輩と笹神先輩は、幼馴染

だということ！
小さなことばかりだけど、彼らの基本的なことをほとんど何も知らなかったから、少し嬉しかった。
「あ、俺、ここなんで。……じゃね、基山チャン」
私たちより数駅前の駅で降りて行った彼を見送って、お母さんは私に笑いかけた。
「で、誰が本命なの？」

ノリノリのお母さんの押しでお父さんの許可もあっさり頂けてしまい、半ば強制的に男子ヒップホップ部のマネージャーになることが確定してしまった訳なのですが。
今思うと、サキ先輩のとても上手いあの言い訳が、裏をかけば、マネージャーにさせるための戦略だったのかもしれないとまで思えるようになってしまった。
……彼のあまりにも強制的で完璧すぎる言動は、時たま恨めしくなるけれど、今は、最初に思ったような不満じみた感情じゃなくて、どこか嬉しさも入っているのだけど。
とにもかくにも、今の私の方針は、彼らにいかに上手く巻き込まれるかを考えなくてはいけない、といったところだった。
あぁ……私、流されてるなぁ。
最初に体育館で、こんなことになるなんて考えもしなかった。というか、あの時は何がなんだかさっぱりわからなかったし、とにかくサキ先輩の色々な迫力に圧倒されてしまっていた。
今思えば、あの時……サキ先輩も、どこか変だった気もする。
思い出したとき、急にあの花のような匂いを思い出した。忘れてたけれど……あれ、体育館以来、一度も嗅いでいないんだ。
どうしてだろう。
昨日の放課後は手を繋いでいたから割とくっついていたし、昼休みだって隣にいた。

そういう意味でもサキ先輩は……まだ、掴みどころが、ないかな。

「オハヨ。基山チャン」

学校の最寄り駅のホームから階段を下りた時、少々高めの男の声に呼ばれて、私は心底びっくりしてしまった。

階段の脇を見ると、明るい赤っぽい茶色の髪と、へらっとした笑みの彼。芳花　水瀬サンが堂々とそこにおわした。

「え、あ、おはようございます……？」

どうして朝から、というか、一人で。

頭の周りにハテナマークを浮かべていたのがさすがにわかったのか、彼は笑いを押し殺して言った。

「なんかね、朝、基山チャンについてけってさ。サキ様命令。……何で俺なんかねぇ」

私が訊きたいですってば。

四人と一緒より、一人と一緒の方が数十倍ドキドキしてしまうのは、不可抗力だと思う。

いや、そう思いたい……。

あの芳花先輩とはいえ、イケメン集団の一人である。

すらっとしたシルエットと、垂れ気味の目と対照的な眉毛。物凄くマジメな顔をしていれば、物凄くかっこいいのだけれど……。

「ほら。オヒメサマはこちらへどーぞ」

そう言ったからさり気なくも何ともなくなってしまうけれど、車道側を自ら歩く辺りは物凄く紳士だった。貼り付けたような笑顔は何を考えているのかわからないけど、思っていたよりは……マジメな人、なのかな。

「あの、芳花先輩」

何だか、何ともなく無言でずっと歩いていて、気まずくなった訳でもなかったけれど、訊きたいことを思い出したのだった。

彼は何も言わずに目で返事をして、その何気ない仕草に少しどきっとしてしまった。

「昨日、サキ先輩と笹神先輩が幼馴染って言ってましたよね。……私、先輩たちの話が聞きたいんです」
不良グループみたいな集まりだったら、何となくどうして固まっているのかはわかるのだけれど。
彼らは、マジメとは言えないとしても、不良ではなかったから。でも、ただの部活の友達と言うには、仲良し、いや信頼し合っているように見える。
「んー……。他のヤツらの話はさ、あんま他人が突っ込むことでもないと思うから、俺の話でも聞くか？」
ちょっと真顔っぽい横顔越しの問いに、私はすぐさま頷く。
そう……芳花先輩のことも、結構気になる。
「俺なぁ、最初、フツーに男子ヒップホップ部入るって決めてて、入ったんだけど。最初、サキのことが嫌いで嫌いで。あんな顔だけヤローみたいなの、どうせ、とか思ってたんだけどさ」
何気ない口調で話し始めたことは、彼の過去の話だった。
そっか、ちょうど、一年前。
「アイツのダンス見て、そんな考え捨てた。基山チャンも、何となく思ってるかもしんないけど、アイツさ、踊ってる時、全然雰囲気違うだろ？　俺、初めて見た時に、アレに圧倒されちまった。コイツには勝てねぇと思ったわさ」
あの――輝かんばかりのオーラのことだろうか。
確かに、サキ先輩は、ダンスの時は不思議と、一際輝いて見える。
「で、マジメにダンス教えてもらった。最初の頃はまだ敵対感も残ってたケド、今は全然かな。……サキがさ、俺ばっかり蹴ってくるのはさ、まぁ他にも色々理由はあるだろうけど、まあ小学生の友達付き合いみたいなモンだと俺は思ってるんだよ」
まるで、私が訊いたからしぶしぶ喋った、という訳ではなくて、話したいから話しているかのように、芳花先輩は続けた。
そうなんだ……一番、仲が悪いからとか、そういう訳には見えなかったけれど。

「あ、消去法ってのもあるかな。多分隼には昔から世話になってるし、琴はサキよりケッコーちっちゃいし、へにゃ男だから……」
へにゃ男……？　聞き慣れない単語が物凄く気になったけれど、先輩たち四人の間には、友情とか信頼以外にも色々あるんだなぁ、と思った。
「基山チャンは、中学の時とかどーだったんだ？」
ふと、話し続けていた芳花先輩が、私に尋ねてきた。
私の……中学の話、か。
「どーもありませんでした。地元の中学校で、元小の友達と変わらずワイワイやって、ちょっとだけ友達も増えて、割とマジメに勉強して。……恋も、しなかった、し」
どうしてか、気にしてないハズの、最後の一言が自分の中で反芻される。
別に、別にどうってことは。
周りが誰も恋愛の話をしなかったから。私に、誰も恋愛の話をしてくれなかったから。
好きな人がいても、誰にも言えないから、それは好きにならなかっただけだもの。
「――じゃあ、キスしたコト、ないんだ」
ぽつり、と彼は吐き出した。
彼が何を考えていたのか、私がそれを聞いて何を思ったのか、何故か全然わからなくて。ただ、急に重くなった声が、耳に残って離れなくて、どうしても気になって仕方なくて。
意味もワケもなく、二人沈黙に戻って、私は今度は気まずさを感じた。
最後の一言、余計だったかな。そんな私の杞憂のような心配をかき消すように、学校が近づいてきた。
サキ先輩たちは、先に来ているのかな。それとも、後から来るのかな。
当然のように浮かび上がってくる何てことはない疑問に、何だか

白々しさを感じてしまって。
上履きに履き替えた後、私を待ってくれていた芳花先輩に、こう言ってしまった。
「キス、したコト、ありません」
自分でも、わからなかった。
どうしてさっきの言葉に答えなくちゃいけない気がしたのか、それが今だったのか。
一瞬のうちに、誰にもわからないように、行われたそれが、どれほどの意味を持っていたのか。
真っ赤になった私の頬を軽く撫でて、彼は笑った。先ほどからの不思議な感触を一掃するように、イタズラっぽく笑った。
「もーらい」
私のファーストキスは、赤っぽい茶色の髪の人の、レモンの匂いの唇でした。

お母さんに、笹神先輩がお昼作ってくれるから、と言ったら、何だかもう、笹神先輩大感激というか、もはや崇拝みたいな感じのことを言っていた。
やっぱり、お母さん的には嬉しいのね……私がどうせ毎日作るワケないもの。
「桃歌ちゃん、やっぱり今日も先輩たちとお昼ご飯食べちゃう？」
昼休みになって、四時間目の片付けをしていたら、紗奈が話しかけてくれた。
「うん、多分……。いつか、一緒に食べようね」
「あ、ううん。——桃歌ちゃんと一緒に食べるのはいいけど、先輩たちの中には私はさすがにいられないよ？」
参ったように紗奈は笑ったけど、私は本当に申し訳ないなぁ、と思った。
それでも、彼女にはたくさん友達がいるみたいだから、心の中で「後は頼む！」と言い残して、中庭へと向かった。

学校の構造がまだよくわからなくて、ちょっと遠回りしてしまったけれど、何とか中庭に辿り着くことができた。
しかし、そこにはお弁当を食べる千種先輩の姿しかなかった。
「千種先輩、こんにちは。……他の先輩たちは？」
「あ、あれ、桃ちー。サキと水瀬は、桃ちー呼びに行ったんだけど……隼は、わかんないや」
入れ違ってしまった。
とにもかくにも、こういう時はなるべく動かないのが一番かもしれない。きっと、教室に行けば、もう私が中庭に行ったって、紗奈とかが伝えてくれるだろう。
「ねぇ……水瀬が、何か変だったんだケド、朝何かあった？」
いつの間にやら弁当箱を空にして、水筒を口にしながら千種先輩が小さな声で訊いた。
う、バレてる……っ！
千種先輩にバレて、笹神先輩にお見通しじゃない訳がない。笹神先輩の方は、ある程度考えていることがあるみたいだから、そうそう口を滑らせたりはしないだろうけれど……。
「えと、あー……。ヒミツ、です」
こ、これじゃあだめかなぁ！？
できる限りお願いするような心持でトップシークレットを主張してみたのだけれど……。
「……」
千種先輩は、それを見るなり、ちょっとびっくりしたような顔になって、顔を背けてしまった。
え……、私、何かしたかな。
逆にこれ以上言及されない方が怖い。水瀬先輩とサキ先輩が帰ってこないのも、余計怖い……。
「琴吹、お前何変な顔してんだ」
低く響く、だけど透き通ったあの声。笹神先輩だ。

右手にペットボトルを持って、左手にあの包み。
「へ！？　あーいやいやいやいや……まぁ、チョットネ」
何故か千種先輩の方が挙動不審になっていて、私は首を傾げた。
まあ、そのお陰で隠し事をしている事が笹神先輩にもバレなかったようだけれど……。
「つか、サキと水瀬は帰ってないのか。チビは先に来ちまったみたいだしな」
そう溜息混じりに言って、中庭のベンチに包みとペットボトルを置いた。
「何、してるんでしょうね……」
先ほどの不安がやっぱりぶり返してきてしまって、ついつい訊いてしまった。
「……お前、」
だから、笹神先輩にも感づかれてしまったかもしれない。
別に、後ろめたいことではないかもしれないけれど。私は、芳花先輩の、敵にはなりたくないから。
「へい！　あーやっぱり基山チャンもう来てたよ」
という、私の心配をヨソに、芳花先輩が何事もなく中庭に現れた。
そして、その後ろから、いつもどおりの笑顔のサキ先輩。
「桃歌チャン。はい」
サキ先輩が近づいてきて、私に渡したのは。
「あれ？　これ私のケータイですよね」
「うん」
ポケット、入れてたはずなんだけどな。確かに入れてたはずのポケットは空だった。
「サキが拾ったんだけど、何かな、フォルダの」
「水瀬」
へ、な、なんか見られたかなぁ。
そんな、何にも入ってないはずだけれど。
サキ先輩の、芳花先輩を制する声は、ちょっと怒ってるような感

じでもあったけれど、でも、その表情を見て安心した。
先輩、照れてる……？
「写真フォルダの、男の子とのツーショットに妬いちゃったんだヨ」
芳花先輩がさっと私の横に来て耳打ちしてくれた。
あ……あれで。
サキ先輩は、平静を装ってあちらを向いて鼻歌なんて歌っている。
……十分変ですって。
「あの……あれ、幼馴染だった子なんですけど……」
そう。今はもう、近所には住んでいない。
高校進学と共に引っ越すと言うから、ノリもあったし、頼まれたので一緒に写真を撮った。
私にとっては、ただそれだけの思い出だったのだけれど。
「あ！？　うん。うん……」
せ、先輩、変ですってば。
どうしようかな……。
「基山チャン、ケータイ貸ーして」
芳花先輩に半分ひったくられる形でケータイを取り上げられて、急に彼にサキ先輩の方に体を押された。
「は！？　おい、水瀬！」
サキ先輩に受け止められた、という感触の次に、シャッター音。
「うん。……咲哉殿下、これで満足だろ」
私には確実に見えないように私の頭の上で、芳花先輩は私のケータイをサキ先輩に見せた。
「へ？　あ、あの！」
サキ先輩に後ろから抱きとめられる体勢になっていたから、サキ先輩の顔が見えなかったのだけれど。
必死の努力の結果、視界に入った彼は、何だか素晴らしい、いや逆に怖くなるほどの笑顔を浮かべていた……。
と思ったら。一度体を離されて、正面から抱きしめられた。
――あ、あの匂い。お花の匂い。綺麗なお姉さんみたいな、可憐

な匂い。
サキ先輩が、何か言ったみたいだったけれど。
私の頭は、思いっきり彼の胸に押し付けられていたから、全然聞こえなかった。
「はいはい。サキ、ほどほどにしとかないと、コイツ、機能停止しちまうぞ」
力強い腕によって、サキ先輩の体から引き剥がされる。
あ、あはは、何だか、確かにすごくクラクラする。
「酸欠だよ」
笹神先輩の冷静なツッコミが面白く感じられる程に私も何だかおかしくなってしまったようだった。
「ほい。俺らのアドレスとか、登録しといた」
そう言って芳花先輩から返された、私のケータイ。
開いたら――
「ちょ、あのっ！」
天国にいるようなフワフワとした気分だったのに、急に現実に戻されたようで、泣きたくなった。

その後、サキ先輩は何か……言葉にできないほどに不思議な言動ばかりしていた。
「サキ、あんまり機嫌良くなるとああいう感じになっちまうんだよ……」
お、王様って、色々な意味で難しいのね。
何だか、意外と単純な彼を見ていると、芳花先輩とキスしてしまった事が、本当に後ろめたくなってきた。
でも、代わりにしてあげられる程の勇気なんて私にある訳ない……。せめて、オブラートに包んで事実を告げることができるのやら。
「あの、さっきサキ先輩、何て言ってたんですか？」
本人に聞こえないように小声で笹神先輩に尋ねたけれど、「……聞かなかったことにした方がいいようなコト」としか言われなかっ

た。
一体何だったんだろう。
今日は昨日ほど窓からの野次馬はいなかったし、多分野次馬の人が聞こえるほど大声で言っていたら、私も聞こえるだろう。
それにしても、何だかサキ先輩の暴走で、私の立場がもっと危うくなってきたけれど、大丈夫なんだろうか……。
「はー……サキってこーゆートコ子供だよなぁ……」
芳花先輩が面白そうに呟く。
先ほどから何かのリズムに乗せて体を揺らして完全に自分の世界に浸っている。目が合うと、どきっとするほどに熱い視線を向けてきたと思ったら、子供みたいにこっと笑ったり。
無事に元の待ち受け画面――結構気に入っているウサギの写真、に戻ったケータイを開いて、先輩たちのアドレスを見る。人のアドレス見るのって、結構楽しい。
アドレスって、作ったときのノリですごく意味わからない内容になっていたりするから、自分で見直すと面白いものだけれど……。
やっぱりよくはわからない！！
「ん？　アドレス見てんのか？　俺のは、『六月の王子』ってことな！」
「このｊｕｉｎ……が六月ですか？」
「ジュアンね。フランス語。フランス語なんてサッパリだけど、ｊｕｎｅって書いてもかっこよくないからな」
異国語をアドレスに混ぜている人は多いなぁ。わかりにくいけれど、確かにかっこいいとは思う。
「あ、なぁ、サキってさ、花の匂いするだろ」
「え、そ、そうですね……？」
「アレな、サキの家の匂い。……つーか、サキのねーちゃんたちの匂い……うーん、家全体あんな感じなんだけど」
ねーちゃん……お姉さんがいたんだ！
家全体がああいう匂いって、どういうことだろう。

「そう、花屋」
芳花先輩には珍しく私の先取りをして、にや、と笑った。
お花屋さん。
咲哉、という少し綺麗な感じの名前が、合っているなぁと思った。
「サキのねーちゃん、香水作ってるらしいから、それの匂いだと踏んでるんだケド……香水とは、ちょっと違うんだよなあ。あれが体臭だったらどうするよ」
す、素敵だとは思うけれど……。あの匂いは、キンモクセイの匂いにも似ているけれど、もっと華やかな感じもするし、もっと清楚な感じもする。
と言っても、二度しか嗅いだことはないのだけど……。
「でもさ、気づいてるかもしれないけど、匂う時と匂わない時があるんだよな」
「やっぱりそうなんですか。私……体育館での時と、さっきしか嗅いでないんですけど」
そう言うと、芳花先輩は、うーんと唸った。
「機嫌なのかなー。新歓の発表の後は確実に浮かれてたし、今は、言わずもがな」
機嫌で香る人間というのも、よく考えてみたら不思議なものだった。
サキ先輩って、不思議なことが多いなぁ。実は、本人とまだそんなに話せていないから、謎のままなのかもしれないけれど。
「チビ、もういいか？　そろそろ片付ける」
「あ、はい、あとちょっとだけ！」
笹神先輩のハンバーグは、やっぱり物凄くおいしかった。
「桃歌ちゃん、桃歌ちゃん！！　松岡、先輩！」
終学活が終わって、今日はどうしたものかと考えていたら、紗奈が私の腕を掴んで廊下まで引きずり出した。
正常に戻ったように見えるサキ先輩が、壁にもたれかかっていた。

「ありがと。――桃歌チャン、帰るぞ」
よかった。確実に正常に戻ってる。
それにしても、写真を撮っただけなのに、どうして、あんなことになってしまったんだろう。
「先輩、昼休みの時……」
「あ、それ謝ろうと思ってたんだけど……。ゴメン、ちょっと俺、調子乗りすぎた。いきなりああいうの、普通困るよな……」
実際物凄く嬉しかったものの、困ったけれど、がっくりとうなだれて自己嫌悪に陥る先輩に止めを刺すことなんて無理だった。
「その、写真に妬いたのは、ホントなんだけど……。何か、水瀬の撮った写真見たら、急に嬉しくなって」
そんな風に言う先輩が、ちょっとかわいらしくて、私は笑ってしまった。
「大丈夫です。……ちょっとは、慣れました」
ホントは、全然慣れてないつもりだけど。でも、慣れた方だとは思う。
あそこで卒倒しなかっただけ、私はよくやったもの。
芳花先輩とやらかしてしまった事実は、多分私から告げるのが一番だろうけれど、このタイミングは明らかに空気違いだから、言える訳なかった。
二人きりであの話はしたいんだけどな。後で、メールすればいいかなぁ。
「入部届出せるまでまだまだだけど、三年の先輩と、今日は帰るから」
昨日と同じように、余裕な態度になったサキ先輩を見て、なんだか安心した。
味方と言っていたあの人だろうか。
一体どういう繋がりがあるのか気になるところではあった。多分、いい人なのではあろうけれど。

「そりゃ見てたから顔はちらっと見たよ。でも、お前が、カワイイとか思っちゃうような仕草をするような子には見えなかったけどなー」
「その話はもういいよ……。ともかく、サキの太鼓判付きだかんな」
あら？
あの声は、千種先輩。
そして、あそこにいるのは、千種先輩と、誰だろう。
「ん、あれが先輩」
染めてない、自然なこげ茶色が、なんだか目に新鮮だった。
その頭が、こちら側を向いたとき、何だか物凄い既視感を覚えた。
あれ、アレ……？
ふ、と隣の千種先輩に視線を移して、気がついた。
に、似てる！？
「んあ、ウワサの桃歌チャンだ。おいっす、俺、コイツの兄貴。朝斗っつーんで、ヨロシク」
そう言って、千種先輩を小突く。
兄弟なんていたんだ……。
そりゃあ、別の人間だから、それなりの違いはあれど、並んでいれば「似てる！」と言えるほどに似通った顔立ちをしていた。
となると、勿論、かっこいい訳で。
「ウチの兄貴、似てるでしょ。よく言われる」
苦笑いしながら、千種……朝斗先輩に小突き返した琴先輩が、急に子供っぽく見えて、ちょっと面白くなった。
朝斗先輩が、琴先輩の攻撃を回避して、私の元へと歩み寄ってくる。私の隣に立っている、サキ先輩が、少し身構えたのがわかった。
「うん、確かにカワイイ。ソックリ兄弟見たくらいで、こんなどんぐり眼なる女の子、そうそういねぇな」
数十センチ低いところにある私の顔を覗き込んで、笑いながらそう言った。
「えと、えーと……ありがとうございます？」

とりあえず感謝しておくと、また笑った。
声は違う風に聞こえるのに、笑い方は、似てるんだなぁ。
「朝斗先輩、あんまりからかってやらないでください」
ちょっと低いトーンでサキ先輩が言うから、はいはい、と朝斗先輩は身を引いた。
「んでまあ、顔は余裕でパスだな。……あとは？」
彼が笑顔のまま尋ねたが、私はどうすればいいのかわからない。
何だかちょっと気まずい空気が流れる。
「おい、チビ、特技とかないのか」
押し殺したような笹神先輩の声に、私は焦った。
……ない！
「桃ちーの弁当、うまかったけど、隼がいるからナ……」
うーん、と琴先輩が腕を組む。
「じゃーさ、桃歌チャン」
朝斗先輩が、にやりと笑った。そして、私に耳打ちした。
何を企んでいるんだ、この人は。
「ちょっとさ、俺にだけ聞こえるように、ここにいるヤツらの長所言っていってよ」
長所……？
私を試しているかのようなその表情に、ごくりと唾を飲み込んだ。
「じゃ、まず松岡」
さ、最初に王様来てしまいますか。
「え、えっと。まず、私にすごく優しくしてくれて……話もちゃんと聞いてくれて、お母さんにもすごく丁寧に挨拶してくれて、変なことしても後で謝ってくれて」
ちょっとしたパニックになって、とにかく昨日と今日の出来事をひとつずつ思い出していく。
「あの、私を巻き込んでしまったことに、責任を持ってくれてます」
これが、一番大きいんじゃないかなって、そう思うんだ。
そこまで言うと、朝斗先輩はいきなり大きな声で笑い出した。

「ははは っ！　……桃歌チャン、負けたわ。――松岡、オマエ愛されてんな」
そう言って、自分より高い、サキ先輩の頭を叩いた。
サキ先輩は、少しの間きょとんとしていたけど、案の定、何だか物凄く嬉しそうに笑った。
「チビ、何言ったんだ」
「え、昨日と今日の出来事と……、私を巻き込んでしまったことに、責任を持ってくれてるって言っただけなんですけど」
サキ先輩に聞こえないように、笹神先輩に告げると、彼はあぁー、と声を漏らした。
「お前、『カッコイイ』とか一言も口にしなかっただろ。上手く言ったもんだ」
そういえば。
それって、重要なことだったのだろうか。
私としては、外見なんてものは、長所のうちに入るかと言ったら、微妙なものだと思っているのだけれど……。
「男子ヒップホップ部のマネージャーなんて希望するヤツに、顔目当てじゃねぇヤツなんてそうそういねぇよ」
不満げな私に、笹神先輩はそう言って私の頭を軽く叩いた。
そっか……そうだもんね。
私は、そりゃあ、彼らと一緒にいられることになって嬉しいけれど。今の今まで、私はほとんど自発的に動いていないもの。
こう言っては何だけれど、マネージャーは自分から希望した訳ではないし。
「大丈夫だ。お前は、俺らと敵対している三年だからと言って、態度が悪くなったりする人間じゃないだろう？　それが、後々、良い方向に向かうだろうよ」
それは、身構えてしまっても仕方がないと思うけれど、態度を悪くするのはお門違いと言うか、馬鹿らしいことだろう。なぜなら、敵対しているままよりも、懇親を深めた方が、得になるはずだから。

そう考えるのが普通だと思うのだけれど……違ったのかな？
「あの、ありがとうございます」
一応、お礼は言っておいた方がいいかなあ。
朝斗先輩の仲介がなければ、私がマネージャーになることなんてできないだろう。
彼は、言葉もなしに、手で返事をして、口角を上げた。
その様子を見ていたサキ先輩が、ふと、私の肩にそっと手を置いた。
「ちょっと、桃歌チャン、いいか」
「あ、はい」
何か、みんなの前では言えないような話だろうか。私も、彼に隠してちゃいけないことがあるもの。
中庭の隅っこまで連れられて、サキ先輩は足を止めた。
「今朝、水瀬と……何の話をした？」
「……！」
いきなり核心に迫られて、私は内心物凄く焦った。
話、ということだから、とりあえず冷静に、昨日の放課後の会話を聞いていたところから説明したのだけれど……。
「それって……本当なのか？」
「自分では、そう思って、マシタ」
『恋もしなかったし』。
でも、そんなことを言ったのは、一種の強がりでもあった。
だって、ひとつも実っていないんだもの。
「じゃあ」
デジャヴ。
同じような瞳を、今朝、芳花先輩に向けられた。
「じゃあ、水瀬とキスしたんだ」
「……っ」
無表情な声が、私の罪悪感をかき立てた。
当然かのように、彼は、自分に言い聞かせるようにしっかりと言

った。
どうして……どうして？
「水瀬……、アレはアイツなりの気遣いなのかもしれないけど。――恋してない女の子の、ファーストキス、よく奪ってんだ」
ここに来て、昨日の、三年ダンス部の先輩の言葉を思い出す。
芳花先輩は、頼めばキスしてくれるって、言っていた。
「桃歌チャンは、酷いと、思わなかっただろ？　だから、よくわからない」
小さく、自分に答えるかのように頷いて、彼の顔を思い出す。
どうしてなんだろう。
「でも、サ。俺は許さないよ」
そう言って、顔を上げた私の肩を引き寄せた。身長差がかなりあるから、そのままじゃあ、密接していても顔は近くに来ないけれど。
あの花の匂いは、全然しなかった。
「桃歌チャンが、水瀬を蹴るなって、そういう顔してたカラ」
サキ先輩は、私の肩を抱いて、頭を撫でる。
「代わり、な。俺、悔しいんだよ」
それだけ、短く急ぎ足で言って、私の頬に手を添えて唇を重ねた。
少しだけ、少しだけのひととき。
その瞬間に、あの花の匂いが戻ってきた。
甘い香りに瞳を閉じると、サキ先輩が、私の瞼をなぞった。目を開けて、と言っているように。
ゆっくりと目を開けると、彼の透き通った、綺麗な瞳がまず目に入って。少し赤い頬に、やっぱり照れたように寄せられた眉と緩んだ口端が、何故だか、嬉しくなった。
彼は今一度、私の頬に唇を落とすと、私の頭を胸に埋めさせた。昼休みみたいに、変な調子じゃなくて、優しく、ゆっくりと。
彼の左胸に当たる耳が、その鼓動を拾い集めた。まるで、自分のものかのように、強く聞こえる。それは、私のそれとほとんど同じ速さで動いていたから。

「俺、」
私に聞こえるように、耳元に落とされた声が、
「桃歌チャンのこと、大好きだからな」
くすぐったくて、甘くて、嘘みたいで、夢みたいで。
夢だったら覚めないでいい。それでも、夢じゃない。温かい胸に包まれていることが、それを教えてくれている。

「何でこのタイミングだったんだろうね」
「……さ、さァ……？　（あー怖ぇ。基山チャンパワーでとばっちりなくならないかな……）
「サキは、今は落ち着いてるから、大丈夫……と信じたいな」
「あそこの二人、ラブラブなんね～」

「あー、ホント、サキの蹴り食らわなくて済んだのは奇跡だなー」
「ホントですね。私もビックリですよ」
翌朝も、芳花先輩は階段の脇で待っていて、学校までの道のりを一緒に歩いている。
結局、昨日の放課後はサキ先輩が、朝斗先輩含む四人を放置して、私を連れて帰ってしまったのだけど、芳花先輩は蹴らないと約束してくれた。
暴力的なのはいけないよ。暴力を振るうサキ先輩も、それを受ける芳花先輩も見たくない。
三倍くらい心が痛むんだもの。
「もっもちー！　はよー！！」
商店街の辺りで、後ろから軽く背中を押されて、振り返ると、琴先輩が笑顔で後ろを歩いていた。
その後ろには、何だか物凄く眠そうなサキ先輩と、笹神先輩。
どうしたんだろう？　と思っていたら、琴先輩が、苦笑しながら教えてくれた。

「眠れなかったんだってー」
ど、どういうことだろう……。
私は、ある意味でぐっすり眠れてしまえたのだけれども。
「あの、私とサキ先輩が、先に帰っちゃったの、見てました？」
放置して帰ってしまうって、どういうことなんだろうなんて思いながら、あんな調子のサキ先輩に逆らう訳にもいかず、何も言わずについて行ってしまったのだけど。
「視界には入ってただろうね。でも気づかなかったや」
私は別として、サキ先輩は、あんなに背が高いから目立つのに。
落ち込んでいるのか浮かれているのかよくわからなかったけれど、あのカリスマオーラがズーンという感じのオーラに変わっていたのもあるのかもしれない。
「ん、ダイジョーブだよ。帰ってこなかったら先に帰るって約束してるから」
そんな約束があるのね……。集団行動の中では割と重要なものに感じたけれど。
「サキ、見苦しいぞ……寝不足で顔も酷いし、寝癖ついてるし」
そう言いながらサキ先輩の前髪を整えてあげる笹神先輩は、さながらお母さんのようだと思った。
心なしか隣を歩く芳花先輩がちょっとびくびくしているけれど、サキ先輩はかなり眠そうで覇気がないので、蹴ることはしないだろう……。
「サキ先輩、元気ですか？」
苦笑しながら、声をかけると、少しばかり明るく笑い返してくれた。
もう……睡眠不足も、人気者の大敵でしょうに。

それからと言うものの、毎朝、芳花先輩、＋αで登校し、下校はほとんど先輩たちと五人だった。

サキ先輩は物凄く優しくしてくれて、笹神先輩は相談相手だし、芳花先輩も一緒に登校するうちに、いい話相手にまでなった。
琴先輩は、人好きのする笑顔で、すごく話しやすい相手だし。
クラスの人とも、若干初期の溝が深いものの、なんとなく話せるようになってきた。だから、みんな聞きたがる先輩たちの話をしてあげている。
勿論、気にしていそうな事は言わないけれど……。

「桃歌ちゃんは、部活決めたの？」
「あ、あのね、男子ヒップホップ部のマネージャーやることに、いつの間にかなってたの」
とても短いいつの間にかだったけど、ホントのことだもんね！
もう、あの入学式の日から二週間くらい経って、そろそろ入部届が出せるようになるから、各部は勧誘に一生懸命だった。
今日は、男子ヒップホップ部の、新入生歓迎公演があるらしいから、行かなくちゃいけない。
どちらにせよ、先輩たちと帰らないと怒られるから。
「そうなんだ！！　とことん羨ましい……ううん、羨ましいというか、うーん！　言葉にできないなぁ」
そう言って笑う紗奈は、本当に私の一番の友達になってくれている。彼女のすごいところは、親友と言えそうな友達が本当にたくさんいること。
私は、彼女の友達つながりで、何人か、他のクラスの子とも仲良くなったし、クラスの子とも仲良くなった。
「あはは。……今日ね、男子ヒップホップ部の新入生歓迎公演あるんだよ」
宣伝しておいてね！　と一応言われていたから、する必要もないだろうけど、伝えておく。
「うん！　行こうかなぁ！」

あぁ、紗奈が一緒にマネージャーやってくれたら嬉しいのに。今いるマネージャーは、みんな男子、というか、三年に二人しかいないらしいのだ。
「あ、次移動だね。そろそろ行こっか」
私は頷いて、教科書を取りに机に戻った。

えっと……公演は三時五十分からだっけ。
こんな日に限って、終学活が早く終わってしまって、三十分も暇になってしまった。先輩たちは、準備だから、誰も相手がいないし……。
私は、何となく、気の向くまま、使い慣れている中庭のベンチに座ってぼーっと空を眺めていた。
ここにいても、先輩の誰も、「よ」って言ってくれないと思うと、少し寂しかった。早くも、私は彼らに依存しつつあるんだけど……。
「基山　桃歌チャンだよね？」
「わあ！」
意識が半分飛びかけていたので、私はびっくりして大きな声を上げてしまった。
振り返ると、男の子が立っていた。
えっと……一年生、かなあ。
「……近くで見ると、やっぱりカワイイね」
彼は、ベンチに座る私にどんどん近寄ってきて、顔を近づけてきた。
思わずベンチから腰を上げて後ずさったけれど、彼は追い詰めてくる。
「えっと、あの……何か、用……？」
とりあえずそう聞くと、彼は高く笑った。
「あんな男共と意味もなく戯れあってる君が、よくそんなコト言えるよね」
私は、その言葉に完全にスイッチが切り替わって、彼をきっと見

据えた。
先輩たちを……貶すことは、許さない。
「……何？　怒ってるの？　君もバカだよな、ちょっとカワイイから、アイツらの手の平で踊らされてるだけなのにさ」
バカにしたように、男の子は笑った。
手は、出しちゃいけないし、私みたいな非力なヤツが敵うはずがないけど……っ。
「僕が、君をどうにかしたら、アイツらはどうするかな……？　大事なお人形を、取り返しにくるのかな？」
この人……きっと知ってる。
あと五分で新入生歓迎公演が始まって、先輩たちが来られないこと。そして、ほとんどの生徒が帰路についているか、その公演に行っていて、この辺りに人気が残っていないこと。
私に近づいてくるだけだった彼が、私の左手首を強く掴んだ。
振り払おうとしたけれど、案の定、力負けしてしまう。
「や、やめて！」
ダメだ、ダメだよ。先輩たちに迷惑かけちゃいけない。
このケース、悪いのは私だもの。
どうにかしなくちゃいけないけれど。
彼は、私の左手首を掴んだまま、右手首もまとめて片手に掴んでしまった。
ど、どうしよう……。使えるのは、がくがく震える足だけ……。
……足？
相手が、優位に立っているつもりになっているうちに、早く……っ！
私は、どうにか、恐怖で震える足を真っ直ぐ伸ばして、右足を、すぐ目の前の彼の股間目指して振り上げた。
彼は、やっぱり予測していなかったみたいで、倒れこんだから、私は早くもない足を頑張って振って走った。
今は……四十八分！　体育館の人ごみに紛れれば、きっと……！

上履きが脱げそうになって、転びかけてるうちに、目的地がわかっていたみたいだから、男の子が追いかけてくる。
体育館を目の前にして、上履きを決死の思いで脱ぎ捨てて、片手に片足ずつ持って中に走りこんだ。
やっぱり、人で溢れていた。前の方に行ったら、睨まれそうだけど、我慢するしかない。
あんまり高くない身長を生かして、生徒の間をすり抜けて、なんとか人の多いところに隠れることができた。
人がいる中なら……大丈夫、きっと。
ばくばくしている鼓動を、息を押し殺しながら静めて、開演を待つ。
舞台袖の方から、何人か顔を出していて、その中に芳花先輩もいたような気がした。
音楽が始まって、上がる幕。自然と、湧き上がる歓声。
やっぱり、最初は、二年生と三年生全員、大体二十人くらいだろうか、で踊っていた。
目が、サキ先輩たちを探してしまうけど、サキ先輩はすぐに見つかった。三年生と合わせても、多分一番高いであろう身長と、あの輝く雰囲気。
入学式の時は、衣装はジャケットだったけれど、今回はカジュアルな感じだった。
ジャケットの時でも、あの四人は、すごくキャラクター性の出るアレンジがしてある衣装だったけれど、今回もなかなか絶妙な感じであった。
ほとんど黒一色だけれど、手っ取り早い「おしゃれ」ではない、本格的な何かを感じる、笹神先輩。
さすが、と言えるラフさの芳花先輩と、四人の中では一番幼い雰囲気の琴先輩は、パーカーで少しかわいらしい感じだった。
続いて、三年生のみの演目だったけれど、三年生の踊りも、さすがに上手かったし、私は彼らを批判することはできなかった。

二年生の四人に舞台が渡されたとき、体育館全体が、入学式のときの、あの驚きのような感嘆のようなものとは少し違う、でも待ち侘びた、という空気になった。
やっぱり、センターはサキ先輩。
今回は、革靴ではなくてスニーカーだったから、あの時よりはステップを踏みやすいだろうけど、それでも外見重視の衣装である。
華麗にキレのある動きを繰り返す。
四人の息は、さすがにぴったりだったし、お互いをフォローし合っているように見えた。彼らを知ってこそ、本当に楽しめる舞台だなあ、と思った。

公演が終わって、公演中忘れかけていたあの男の子のことを思い出して、辺りを警戒しながら体育館の中を移動していたら、出口で出際に振り返ったところで目が合ってしまった。
かなりすごい剣幕で睨まれて、私は、少し酷いことをしたかな、と思った。
だって……あんまり股間は蹴り上げると、ホントに危ないって、聞くから……。
とにもかくにも、怖い経験をさせたんだから、その代償とくらいは思って欲しいなぁ。
彼が出るまで、私はその場から動けなかったから、実質、体育館内に取り残されてしまって、慌てて外に出た。
体育館の前で、芳花先輩が待っていて、私を見るなりウィンクなんてしてきた。
「ありがとーな。……基山チャン、来たのギリギリだろ。何かあの咲哉殿下が心配しちゃってさー……アイツ、探しに行こうとしたんだぜ。ちゃんと、開演前に見つけたけどさ」
心配させてしまっていたのか。
何だか、ここまで当たり前のように逃げて来られたけど、あの時、あんな行動をできなかったら、どうなっていたかと思うと、怖くて

怖くて仕方がない。
不安になって、芳花先輩の近くまで駆けて行ってその右手を両手で握ると、驚いた顔をして、
「おいおい、泣きそうな顔すんじゃねーよ。サキ呼んで来っから、ちょっと待ってろよ」
と言って、頭を軽く撫でてくれた。
さっきも、公演までの待ち時間にああやって……。
一人が、少し怖い。
自分の左手を右手で握り締めて、俯いて立っていると、誰かが私を抱き寄せてくれた。身をよじって顔を上げると、サキ先輩だった。
サキ先輩の顔で、舞台の上じゃなくて、すぐ側で見るその顔で、本当に不安と安心が一気に流れ込んできて、涙が溢れてきた。
「桃歌チャン……？　大丈夫だよ。ダイジョーブ。俺がここにいるから」
久しぶり……ううん、そんなことない。
つい最近、中学を卒業する時に、私はたくさん泣いたもの。
でも、ここ最近、ずっと先輩たちのおかけで笑えていたから、久しぶりのように感じる。
背中を撫でてくれる温かい手が、肩を抱いてくれる力強い腕が、私を見守ってくれる優しい瞳が、愛おしく感じられた。彼は、それから何も言わずに、三十分間もずっと私を抱き締めていてくれた。

「で、体育館に逃げてきたとね……」
帰り道、なんとか気持ちが治まった私は、先輩たちに事情を説明していた。
「ケータイは持ち歩いてるから、連絡してくれてよかったんだよー？」
「でもっ、公演が始まっちゃうからと思って……」
優しく笑いながらそう言ってくれる琴先輩に、ついつい反発してしまう。

すると、笹神先輩に、頭をこつんと小突かれた。
「ばか。お前が時間の前に来ないだけで、いてもたってもいられなくてリハどころじゃねーヤツがここにいんだよ。舞台の上から、チビを見つけられなかったら、絶対に何かしらミスするぞ」
そう言って、少し前を大股で歩くサキ先輩を指差す。
な、何か物凄くイライラしてませんか殿下……。
「……はい。――舞台の上から、背が高くない私を、見つけられるんですか？」
入学式のときも、思った。よく見えたなって。
私だって、他の人たちの頭で彼らがよく見えなかったのに。
「俺、見えたよ。ちらっとだけどね」
琴先輩が真っ先に元気よく手を挙げて答えてくれた。
「俺はわからん。舞台より下は見てない」
「サキはほぼ一瞬で見つけられるらしいよー？」
笹神先輩、芳花先輩と続いて、前の咲哉殿下も足を止めて、振り返ってこう言った。
「見えないハズねーだろ」
殿下、ちょっと機嫌悪いと言葉遣い悪くなられますよね……。
でも、そうか。
見えていなかったら、入学式、彼は私をその辺から適当に見繕って話しかけた……ナンパみたいなことをしてただけになるんだもの。
私、全然目立たないのにな。
眉を潜めてご立腹な殿下が、私を手招きしたので、隣まで行くと、私の右手を、左手で握り締めた。前につないだ時も思ったけれど、何だか、つなぎ始めが、不器用なのは……そういうことなんだろうか。
「あの……私、絶対、次から気をつけますから」
何でだか、自分が怒られてるような気分になったから、そう言ったら、サキ先輩は首を振って微笑んだ。
「桃歌チャンは悪くないってば。……その一年、見つけ出して、ボ

コらないと気が済まない」
笑顔で言わないでください……冗談じゃ、ないんですよね。
右手を握り締める、痛くないけれど強い力が、今はとても頼もしいと感じた。

「男子ヒップホップ部をよろしくねー！　初心者大歓迎！　男の子のマネージャーも大歓迎！」
あ、朝斗先輩だ。
放課後になって、今日はどうするのかな、なんて思いながら紗奈と雑談をしていたら、一年の教室の前まで、男子ヒップホップ部の先輩集団が来ていた。
「桃ちー桃ちー！　仮入期間だよぉ！」
若干遠巻きに見ていた女の子たちが、私に近寄ってくる琴先輩に、歓声を上げた。先輩はそんな子たちを見てにっこり笑って、手を振っていた。
あ、もう仮入部ができる……つまり、一年生が放課後に残れる、ということ。
どうしよう、そうなると、私は半強制的に、三年の先輩と対峙しなくちゃいけなくなる。
あぁ、心の準備ができてないよ……。
「チビ、ダイジョーブかお前。若干放心状態だぞ」
笹神先輩が、私の髪を気にしつつ適度にくしゃくしゃとしてくれた。そういうところが、ホントにお母さんらしいなぁ……。
私は、両手で握り拳を作って、笹神先輩の顔元まで突き出した。
「頑張ります！」
そう言うと、笹神先輩は笑って、「何が？」と言いつつ私の頭をぽんぽんと叩いた。
三年生の先輩が向こうへ行ってしまっても、笹神先輩たちは残ってくれていたので、私は急いでカバンをとりに戻った。

「とりあえず……いつもの桃歌チャンでいれば、大丈夫だよ。変な気は遣わない方がいいと思う」
サキ先輩にそう言われて、私はちょっと緊張してきた体をなんとか緩めようとした。
向かう先は、三年生の教室だった。
いつもは適当な場所で練習しているらしいけど、仮入部のために場所をとってあるとか。
中に入る先輩たちの後に続く。
「こんにちは」
彼らがそれぞれ、一応挨拶をしたところで、後ろから出てくると、中にいた三年生たちに物凄く視線を浴びせられた。
朝斗先輩だけ笑っていたけど、他の人の表情が怖くて泣きたくなったけれど、私は深く頭を下げて言った。
「一年C組、基山　桃歌です。よろしくお願いします！」
とりあえずは、これ、だよね……？
恐る恐る頭を上げたら、一人が笑い出した。きょとんとして彼を見つめると、彼は笑いながら言った。
「うん、まあ、知ってるけどな。……葉山（はやま）　悠輔（ゆうすけ）。よろしくぅ」
彼が自己紹介をしてくれたことで、場の空気がちょっと緩んだ。
元部長さん……とか、かな。
金髪だし着崩してるしで、チャラチャラな感じに見えるけど、悪い人では……ないのかも。
よく見たら、あの入学式の日……笹神先輩に話しかけてたダンス部の人と歩いていた人もいた。
「イジワルするほど暇じゃねーし、本人の顔見たらやる気なくなったわ。……ん、とりあえず部活動見学ってことで、いいんじゃないかい？」
集団の中の一人が、抑揚のない声でそう言った。
どうか、そういう感じで穏便にお願いします……。

ああそうだな、と葉山先輩が言うと、サキ先輩たちも荷物を置いて、彼らの方へ行ってしまった。
葉山先輩に手招きされたのでそちらに行くと、肩を抱かれてしまった。彼の脇腹の横に鎮座しているそのままの状態でいなきゃいけない流れだったけれど……。
三年生の「は？」って顔が怖いですすごく……っ！
あと、サキ先輩の視線が……ごめんなさい。
私は心の中で謝るしかなかった。だって、葉山先輩もちょっと怖かったから……。
「はーいはい、ウォームー」
手を叩いて進める。
端に立っている人はマネージャー、か。
というか、教室、狭そうだなぁ。ストレッチなんかをやっているけれど、足の長い男集団が、机を下げても教室の半分程度のスペースで、長座体前屈なんてできるはずがない。若干重なってる人とかやってない人とか前屈してる人とかになっていて、とても気になってしまう。
「狭いよね。しょーがないんだけどさ……」
その時、教室の扉が開いて、数人がぞろぞろと入ってきた。
「はい！　集めてきたよー！」
先頭の……三年生が、両手を振って元気よくそう叫んだ。
「おう。……ん、その辺座って見てていいよー」
そう葉山先輩が言うと、入ってきた先輩が一年生を座らせていたから、視線を滑らせていたら……。
あ、あああ！！　あの日の、あの人。
私を見るなり、挑戦的な目をしてきた。
な、何よ！
私もできる限り睨み返してやったら、ちょっと笑われて、余計腹が立った。
よく考えたら、私は今、葉山先輩に抱きかかえられてる訳なんだ

けども……。
それにしても、一年生は、いち、に……十人はいるかな。やっぱり、憧れるんだろうか。男の人の感覚はわからないから、なんとも言えないけれど……。
着々と基礎練習が進められていく中、私はあの男子が気になって気になって仕方なかった。あの交線の後、彼は何事もなかったかのように先輩たちを眺めていたから、私も気にしないようにしたかったのだけど……。
「桃ちー、どうした？」
休憩時間になって、琴先輩が声をかけてくれる。
あくまで自然に、不審に見えないように、彼があの日の人だと告げる。
「え、マジで……。どーしよ、今サキに言ったら部活どころじゃなくなっちゃうからなぁ」
頭をかきながらサキ先輩をちらっと見る。
せ、先輩、葉山先輩物凄く睨んでませんか……？
とりあえず、不機嫌そうな殿下をどうにかすべく近寄ると、急に腕を伸ばして抱き締められた。
「葉山先輩何かに触らせんなよ……」
「す、すいません……」
いつからそんな条約が……とは思ったけれど、もう、サキ先輩との色々な相互関係は固まりつつあるから、仕方ないかな、と思った。
やっぱり、こんな時だから、あの匂いはしない。
サキ先輩に近づく時、毎回気にしてしまう。一番、不思議で不思議で、気になるから。
「……やべ」
そう言って彼は私の体を解放した。
振り返ると、半分がにやけ顔、半分が睨みの三年と、やっちゃったな顔の二年。そして、何かすごく気まずそうな一年。
「……おい、サキ。お前、挑発乗ったな」

あ、あああ……私がいけないんだ……。
私は別にサキ先輩に手招きされた訳じゃないのに、申し訳なくなっちゃってそばに行ってしまったから。
どうしよう、どう弁解すればいいんだろう。
「桃歌チャン、そんな顔すんなって。俺は見てたからわかってんよ」
朝斗先輩がそう言ってくれるけど……。
葉山先輩はよくわからない笑みを浮かべているから、私はどうしたらいいのかさっぱりわからなかった。
「面白いねぇ。松岡がそこまで君を気に入ってるとは思わなかったよ」
そう言って声を立てて笑った。
「でも君、わかってんのか？　松岡のワガママに付き合う必要はないって……。自分の意思で行動できないマネジなんて、いらねぇんだケド」
急に真剣な顔になった葉山先輩に、少し気圧される。
大丈夫……冷静になって、私。
「ただ引きずられてるだけのお人形じゃないって、証明できる？」
咄嗟に頷く。ここで引いたら相手の思う通りだもの。
私は葉山先輩を見つめていた視線を左にずらして、あの男子を捉えた。
そして、近寄って行くと、その右頬を思いっきり殴ってやった。
痛くないとは思うけれど、それなりの覚悟は持ってやった。
だから、彼もすごく驚いた顔をしていたし、教室内の空気は騒然としていた。
「この前のので、仕返し。今ので、二倍返し」
自分では出来る限り挑戦的な顔をしてみたつもりだけど、彼は、それを見るなり噴き出した。
「お前、何のためにあんなバカなことしたかなぁ。サキにバレたら大変なのによお」

「まさか、本気だと思ってますか？　……ちょっと試しただけですよ」
「基山チャンを泣かせたから、サキはブチギレてたぞー。……体は大事にしろよ」
「……まァ、覚悟はありますよ」
何だか私もちょっと腹が立ってきた。
じゅ、純粋な乙女の心を踏みにじりやがって……！
もう二倍返ししたから、私はこれ以上手は出さないけどっ。
サキ先輩、思う存分やっちゃってください……。
「気にすんな。一発で終わる」
いつの間にか教室から出てきていたサキ先輩は、彼の肩を掴むと、強く引いた。
そして、その右拳を握り締めて、私の殴ったのと逆の頬を殴った。思わず目をつぶってしまうほど、恐ろしく感じた。
少しの沈黙の後……ゆっくりと目を開けると、彼はサキ先輩に肩を抱かれていた。
「男が見苦しいぞ。……立て」
そう言うと、彼はきちんと立って、頭を下げた。
……あれ？
「ありがとうございます。申し訳ありませんでした。……僕は、木田（だ）梢（しょう）といいます。よろしくお願いします」
「俺にじゃなくて桃歌チャンに謝れ。……俺は、何ともないから」
そっぽを向いて、そう呟いたサキ先輩は、何だか雰囲気が違った。
どうしたのかな……。
「ごめんなさい。……ただ、用心した方がいいよ、本当に」
木田君は、私にも頭を下げて、マジメな顔でそう言った。
悪い人なんかじゃ、ないのかな……。
私は頷いて、さっきもう二倍返ししたからいいよ、と言った。
「ホント、アイツの言う通りだからな。ずっと一緒にいてあげられ

る訳じゃないから……特に学校の外では、気をつけてね」
今日は、優しく、しっかりと、私の右手を握ってくれる。
手を繋ぐ感覚って、麻痺してるけれど……私は、幸せなんだなあ。
「わかってます」
言うほど、わかっちゃいないけれど。
だって、自分自身に魅力なんて、これっぽっちも感じない。私が傷つけばサキ先輩が悲しむであろう。それだけ……。
「あんまり一人でいるなよ。何かあったら、すぐ電話。オーケー？」
頷くと、サキ先輩は満足そうに笑った。
振り返ると、いつものように先輩たちは、それぞれ空を見上げていたり、ケータイをいじっていたりしていた。
とにかく、気を強く持っていないと。ナメられたら、そこで終わりだもの。
……私なんて、典型的な力のない女子なんだけど、それだけはできる。
ただ、巻き込まれてるだけじゃ、だめなんだ――。
「でも、暴力はなるべくやめてくださいね」
彼の気が済まなくても、私の気が済まなくても、これだけは頼みたかった。
だって、何の意味もないことだもの。サキ先輩が、私を大事にしてくれるのはわかってる。だから、証明してくれなくてもいいし、私は我慢できる。
私のせいで、サキ先輩達の評判が悪くなるのは、絶対に避けたいことだった。これ以上……になってしまうけれど。
「なるべく気をつけるよ」
そう言うサキ先輩も、複雑そうだったから、やっぱり私が気をつけるのが一番の解決策だ。
「一年はあんまサキの恐ろしさがわかってないし、三年はまだ見くびってるし。……二年はまァ、どうだろうな……」
芳花先輩の言葉には、色々と複雑な意味を感じた。

木田君のこともあったし、と一瞬思ったけれど、そんな野暮な考えの私が嫌になった。彼は、悪い人なんかじゃ、なかったじゃないか。利己主義になって、彼の件で得た利益を考えちゃいけない。利己主義で生きている人間なんて、そんなの、得できなくて当たり前だ……。

「今は、桃歌チャンの意思を尊重したいと思ってるから」

私の目をちゃんと見て、優しく言ってくれるサキ先輩が嬉しかった。

私が、一体どうしたいのかは……まだ、わからないケド。

「しばらくは……プラトニックに、お願いします」

わざとわからないように変な言葉で表現してみたつもりだった。

サキ先輩は不思議そうに笑ったけど、芳花先輩はその後ろで噴き出していた。

ど、どうしてこうなるの……。

「サキ。『しばらくは』つってんだ。喜べや」

にやにやしながら小突く芳花先輩に対して、「うん？」とおかしそうに笑ったサキ先輩に、私も笑ってしまった。

春の陽気が、サキ先輩の、あの甘い香りを、引き立てていた。

「咲哉クン、ねえ、また遊びに行きましょうよ」

「……愛香先輩。スイマセン、予定が詰まってるので」

「あの子のお世話……？　どうしてあんな子に構っているの？　ねえ……」

「センパイ。もう貴女とは他人なんです。……俺のやることは、俺が決めます」

「どうして？　私、わからないの……。咲哉クンは私を振ったのに、その後も遊んでくれたし、仲良くしてくれた。なのに……どうして」

「俺にとって、愛香先輩が『キレイな先輩』でしかなかったからですよ。騙しているようなものだったから、俺は関係を戻したんです」

「私はそれでもよかったのに！　どうして……っ」

「今は、あの子が俺の一番ですよ。……今度は、あの子を傷つけることになる」
「どうしてあの子なの……？　私だったら咲哉クンと同じくらい踊れるし、容姿も釣り合うって思ってるのに！　少なくとも……そうなるように努力したのに……」
「ごめんなさい。……ごめんなさい。貴女を泣かせるのだけは、心が痛みます。これだけは、本当のことです」
サキは、何をバカやっているんだ。
あの人に素直に言わないのはサキの優しさだとわかっているが、チビはだんだんと、サキに惹かれ始めてる。それこそ、本当の『好き』に――。
彼女の存在を知ったら、どうなってしまうんだ。
今でも、アイツはサキや俺らにとことん気を遣っている。
去年のあの事件とサキの本音を知ったら……。
――考えたくない。
こんなことを思うのは、チビの、あの謙虚な姿に、好感を持っているからだろうか。
彼女に無理やりにでも自信をつけさせることは、できるとは思う。
自分の魅力がわかっていない……。昔のアイツと、同じだから。
そして、それをどうにかしたのは、アイツ自身でもあるが、俺が色々と努力したのもあるだろう。
さあ……お姫様修行を、始めようか。

どうして、サキ先輩は私に構ってくれるんだろう。
それこそ、自分の身を投げうってまで。
彼は楽しそうだった。私もそうだった。
だけど……彼にとって、私とは、なんなんだろう。
琴先輩が、気にするなと言っていたコト。そこには、一体何が隠されているんだろう。
何もないはずがなかった。私にあそこまでしてくれるのに、教え

てくれないのだから。
聞いても、教えてくれないだろう。
そこに嫌な予感があることに、私は気づいているから。知りたいけれど、知りたくなかった。
しかし、真実を知らないまま、夢のような甘い時間に流されていちゃいけない。
それだけは、わかる――。

Ｔｏ：笹神　隼
件名：時間がある時に
お話したいことがあります。
時間がある時に、お電話ください。
私は、夜十一時までは大丈夫です。

笹神先輩に聞くのが、一番だと思った。
サキ先輩に秘密にしていちゃいないけど、私には考える時間が必要だと思った。

Ｆｒｏｍ：笹神　隼
件名：了解
わかった。　恐らく九時ごろになると思う。

サキたちには、隠しておいた方がいいよな？

私は、感謝と肯定を返信して、ベッドに倒れこんだ。
だめだ……こんな気分じゃ、感傷的になっていちゃ、上手く何も言えなくなっちゃう。
気分を解消しようと思って、目を閉じた。

「もしもし。笹神だ」

「……こんばんは」
「元気か？　……考えてることは、大体わかるよ」
「はい、大丈夫です……。ありがとう、ございます」
いつも通りの先輩の声が嬉しかった。
彼は、冷静であることで、みんなを安心させてくれる。
「本題なんですが……。あの、琴先輩に以前、聞いたんです。先輩たちが、彼女作らないのは、理由があるって。それって、どういうことなんですか」
「簡潔に答えるとしたら、あることが原因なんだが、お前はそのあることが聞きたいんだろう？　……約束がある。これを聞いても、考えを変えないでくれ。お前が何か考えるのはわかっている。だけど、サキは、お前を傷つけたくないから隠しているんだ。……俺も、自らそんなことは、したくない。俺たちがお前に言ったこと、サキがお前にしてきたことは、全て、本当のことだと、それを忘れないでくれ」
笹神先輩の声は、いつもより、息が詰まっているように感じた。
先輩も、本気だ。私だって……。
「わかりました。……お願いします」

サキがモテるのは昔からだった。
俺とサキが幼馴染みなのは聞いただろう？　それで知っているんだが。
だが、アイツが今みたいに余裕たっぷり振る舞うようになったのは、つい最近なんだ。
アイツは、かなり鈍感で、自分の魅力をわかっていなかった。だから、誰にでも異常に優しくしていて、色々と勘違いされることも多かったんだ。
それもあってか、かっこよくてモテるのに浮気性、みたいな噂が絶えなくて、中学の頃は、校内に彼女はいなかった。
外に作っていたかどうかは、知らなかったが……。

サキや俺が高校一年、だからちょうど去年、俺らはもちろん、男子ヒップホップ部に入った。
その時、俺とサキ以外の二人とは、互いに知り合っていなかったな。
去年の……六月くらいだったか。サキが、当時二年生だったダンス部の先輩に告白された。
サキは、初めてのことだと、言っていたな。相手はそんなこと、知らなかっただろう。
アイツはどこまでも、優しさ、自分の良心に素直だったよ。素性も知れない、ただ媚びた女と付き合って、自分を好いてくれる彼女を好こうとした。
相手は、そんなもの求めちゃいなかった。そもそも、サキを好いていたかも微妙なところだった。
そして、いつまでも変わらないサキを、『期待はずれ』だと言って振った。
サキは、「わからない」と言っていた。素直なアイツは、自分に素直になることしかできなかったんだろう。彼女を好けたはずがない。
それだけで終わっていたら、サキが、ちょっと色恋沙汰にトラウマがあるというだけの話になっちまう。……まだある。
その先輩が、男子ヒップホップ部の当時の二年に……サキに酷いことをされたと、嘘の通報をしたんだよ。
勿論無実だ。サキは何もしていない。これだけは、俺もこの目で確かめていたよ。
三年は、俺らのことは端からいけすかねぇと思っていただろうな。だから、俺が何を言っても聞いちゃいなかったよ。
こんなこと、校内であっていいはずがないが……サキが、三年に呼び出されて、ボコられた。
サキは、抵抗しなかったんだよ。何も言わなかった。主張もしなかった。

だから、アイツの無実を認めるヤツなんて誰一人いなかった。
名誉を汚されても、サキは何も言わなかったし、ましてや仕返しすることもなかった。
俺らまでサキとつるみにくくなって、アイツ一人が孤立し始めた頃、サキの元に一人の先輩が現れた。
彼女の名前は、篠田（しのだ）　愛香（あいか）。当時、ダンス部二年で、一番キレイだと噂されていた美人だ。
愛香先輩は、サキが無実だと、認めていた。
サキ自身から聞いた訳でもなく、小耳に挟んだ俺の主張と、嘘の通報をした女の行動を見て、そう判断していた。
そして、割とダンス部内、また男子ヒップホップ部内で発言権があったから、サキの無実を色々な人に主張した。
彼女の言うこととあれば、無視することはできなかったんだ。
だから、サキの無実はほぼ証明されたも同然だったんだが……。
男子ヒップホップ部の先輩に、難癖をつけられた。愛香先輩を、サキがたぶらかしたに違いないと、そういう噂が広まった。
サキは、今回ばかりは反発したよ。そうなると、愛香先輩の立場までもが危うかったからな。しかし、意味がある訳ではなかった。
愛香先輩は、何となく部内で敬遠されるようになって、孤立してしまった。
その時、サキはすごく責任を感じてしまっていたさ。
付き合った女の気持ちに応えられなかった、というのと、愛香先輩の好意を無駄にしただけでなく、無関係の彼女を、結局は貶めてしまった、と。
サキは、何度も何度も彼女に謝っていた。見られるモンじゃなかったよ。アイツはしばらく、何もかもを捨てて、愛香先輩への謝罪に明け暮れていた。
そこで、何があったのかは知らないが、孤立した者同士、付き合うことになっていた。
愛香先輩は、サキに好意を抱いているように、その時俺は初めて

感じたな。
それで……文化祭で、ペアで踊ったんだよ。
サキの実力は知っているだろう？　愛香先輩も、なかなかのものなんだ。そして、二人の『お似合い』と言わざるを得ない容姿。
二人のペアはすごく高い評価を得た。付き合い始めてから、サキもなんとなく充実していたんだろう。俺らとの方も成功して、その影響で、ダンス部二年が、また媚びを売るようになった。
そこで、サキがやらかしちまったんだよ。
愛香先輩との関係は、全く断っていなかったにも関わらず、せがまれて、キスをしたんだ。
アイツは、そこでやっと気づいたんだと。
愛香先輩が相手じゃなかったとしても、何も変わることはない、と。
ただ、孤立した者同士、傷を舐め合って、また、自分を確実に擁護してくれる彼女と付き合って。
所詮は、自己の利益のために保たれた関係以外に、特別なものは何もないだけなんだと。
だからサキは、愛香先輩を一度傷つけてしまったにも関わらず、また傷つけてしまうことになりかねないと思って、一部の本音を隠して、先輩を振った。
それを知った部長――葉山先輩に、最低なヤツ、と言われて、サキは誓った。
……「もう誰も傷つけない」と。

「破ったらやめろよ、と葉山先輩に言われたサキは、それからじっくり自分を見つめ直して、あんな感じになったって訳だ」
葉山先輩の発言はもっとも、と言わざるを得ないだろう。常識的な考えだ。むしろ、優しい方かもしれない。
サキ先輩は、ひとつも悪いことをしていないんじゃないかって、ひいき目に考えてしまうけれど。

結局のところ、一番根元にあるところでは、サキ先輩は、何もしていなかった。
「サキが彼女を作らないのは、本当に『彼女』という特別な存在であるかがわからなくて不安だというのと、まだ謝りきれない愛香先輩への気遣いと……やっぱり、誰も、傷つけたくないからだ」
私は、別に、先輩の彼女になりたい訳じゃないから。
きっと今でも気遣って関係を保っているであろう、『愛香先輩』という存在も、気になるけれど、気にするべきじゃないんだろう。
少し心が揺らいでるのは……少しの羨望と、少しの後ろめたさだろうか。
サキ先輩は、私を構う上で、私が思っていたよりも、リスクを抱えているんだ。
私が彼女になりたいだなんて思ったら、彼は頭を悩ませなくちゃいけない。
だから、伝えてしまおう。別にいいって。私は今の状況で満足だって。
それ以上は、彼自身が決めることに違いないんだ……。
「俺らは、そんなサキへの気遣いだよ。どうしても作りたいという状況になっていないのが、現状だが」
もしかして、彼らの間にある信頼関係は、これで成り立っているんじゃないだろうか。
お互いへの気遣い。それも、重苦しい感じじゃない。
尊敬を集めるサキ先輩と、彼を気遣う他の先輩。
上手く釣り合っていると、いえるんじゃないか。
「どうだ……思っていた以上に、アイツがいかに不幸なヤツかがわかったと思う。……一つ忠告なんだが」
「えっと、はい」
「葉山先輩。アイツには、気をつけた方がいいぞ。マシな人間だと思ったかもしれないが、先輩たち全体をサキをボコるような雰囲気にしたのも、愛香先輩を孤立させるように仕向けたのも、アイツだ。

――部活見学の時、あの男は最初、お前を本気で食うつもりだったぞ。ともかく、アイツはサキに対して尋常じゃない程の憎悪を覚えているから、非道なことを平気でやる。今まで、他の先輩に食い止められていたが」

『でも君、わかってんのか？　松岡のワガママに付き合う必要はないって……。自分の意思で行動できないマネジなんて、いらねぇんだケド』

今、あの言葉をよく思い返してみると、そこには、サキ先輩への苛立ちのようなものが見えた気がした。

私は、あの人に貶められないように、気をつけなきゃならない。

「今の話で、なんとなくわかったか」

「……何が、ですか？」

「サキにはちと辛い過去があるが、お前をあんなに気にかけているのは、自分自身を試しているのも、あるんだよ」

試している……？

どういうこと、だろう。

「言ったろ。本当に『彼女』という特別な存在であるかがわからなくて不安だって。それを確かめているんだよ。そして、お前にどこまで自分を捧げられるかを。アイツ自身だって、自信がないんだ」

私は、彼女なんかじゃなくて、いいんだって……そのはずなのに。

この言葉で、少しのもどかしさを感じてしまった自分が憎たらしかった。

「わかってないみたいだから言う。サキにとって、お前は実質上のオンリーワンでナンバーワンだ。それを理解しろ。サキは今、お前を傷つけないためだけに、自分自身を試している。お前が、その気かどうかも、本当は自信がないのに」

あの余裕の笑顔で、憎らしいほどずるい笑顔で……？

私は、何を伝えればいいんだろう。

彼女じゃなくていいなんて言ったら、彼は傷つくんだろうか。

でも、私は……。

「なァ、お前、自分の魅力をわかってないんだって。『どうして自分が』って、ずっと思ってるかもしれないが、お前の魅力は、目に見えないところも含めて、飛びぬけてるように俺は思うよ。サキもそう思ってるだろうよ。不安なら、聞けばいい。ただ、今、サキに伝えていいことは、お前自身の、本当の気持ちだけだよ」

私の、本当の。

それは、私が今さっき思った、「彼女じゃなくてもいい」ということが、嘘だと言っているかのような言葉だった。

言葉に詰まって、俯いてしまう。

わからないよ……本当に。

「わかるさ。……これからが、大変だろうから」

私を元気づけるように笑った笹神先輩の声が、耳を通り抜けていく。

「そう……ですか。あの、ありがとうございました」

納得できないと言うよりは、わからない。

わかったけれど、それが本当じゃないって、彼はそう思っているようで。

「桃歌、元気だせ」

最後に、名前を呼ばれたことが、一番の元気付けになっていたかもしれない。

サキ先輩は、私が特別な存在であるかどうかを見極めていると、笹神先輩は言った。

そのことが、わからなかった。

最初から、サキ先輩がどうして私に声をかけてくれたのか、わからなかった。

彼は私を、舞台の上から見ただけなんだ。それも、彼を目で追っていたと言っても、ほとんど動くこともなかった私を。

それだけで、どうしてあそこまで私を大切にしてくれて、気にか

けてくれるのか。
笹神先輩の話を聞いてから、その疑念が、より一層強まってしまった。
こんなことを思うなんて、サキ先輩を疑っているのと同じような気がするのに。

「あーれ、水瀬いないね。どこ行ってんだろ、アイツ」
中庭に下りてくるとき、たまたま琴先輩と会って、一緒に下りてきたけれど、中庭には芳花先輩の姿だけ見えなかった。
「アイツ、昼休み始まった時にふらーっとどっか行っちまったな。何してんだか」
いつも通り、笹神先輩がお昼の準備をしていて、サキ先輩は何やら本を読んでいるようだった。
あれ、珍しいな……。
何を読んでいるのか気になって、彼の近くに行くと、サキ先輩は慌てて本を閉じた。
「何読んでたんですか？」
「え、えーと……マンガ」
私から目を逸らして、ちょっと気まずそうに彼は言った。
何を隠すことがあるんだろうか。
そう思っていたら、琴先輩がこっそり教えてくれた。
「サキが読んでんの、少女漫画」
しょ、少女漫画……。
私でさえ手をつけたことのない、あんなものを……。
いや、女子高校生にもなって、今まで一度もないというのも、大分特殊ではあるかもしれないけれど。
一体全体、どうして。
「うー……。いや、さ、女の子の憧れっていうのを知るのもさ、大事かと思いマシテ」
ちょっと頬を赤く染めて言うサキ先輩は、ちょっぴりかわいく見

えた。
悪いことでは、ないかなぁ。あんな話を聞いた後では、そんな先輩が健気に見えた。
「そう、水瀬。水瀬呼びに行かなきゃな。桃歌チャン、一緒に行こうか」
話を逸らすように切り出したサキ先輩に頷いた。
まあ、そんなに気にすることでもなかったんじゃないかなぁ。
サキ先輩が、あまりにも少女漫画の男の子的行動をしすぎたら、それは犯罪とも言えるほどにずるくて素敵なのだろうけど。

「女の子とかと話してんのかな。そんなことも久々だからなぁー」
そういえば、芳花先輩は女の子好きっていうイメージがある。実際そうなのだろう。
話を聞いたのと、私が思うには、芳花先輩の方が女の子との付き合いは多いんだろうな……。
「去年はもっとアイツ、ファンの女の子とかと遊んでたし、色々軽かったけど、最近はその気ないみたいだね。良いこと……かな」
二年生の教室の前まで差し掛かったとき、廊下の突き当たりに、芳花先輩の後姿が見えた。
サキ先輩が、歩く足を止めた。
不思議に思って見上げると、彼は険しい表情をしていた。
私の手をとると、後ずさった。
え……、何？
「二度目はないから」
芳花先輩の声が廊下に響いて、確かに聞こえた。
遠くて何が起こっているのか見えなかった。
でも、見えてしまった。
彼が、女の人の頬を包んで、顔を近づけるのが。
その瞬間に、あの感覚を思い出した。
あの時の一瞬、あの時のレモンの香り。そして、少しの不安に襲

われる。
サキ先輩に顔を背けさせられる。
背けた先の彼の顔は、相変わらず険しかった。
あの時と同じ。すべてが、同じ。何故だかそう思えて、身震いをした。
やめて。私の存在を、これ以上――。
「気にするな……。いつものこと、だから」
私もわかっていたはずのことを、サキ先輩が呟いた。
でも、私は少しだけ、思ってしまっていた。
あの人にとって、私は、少しでも特別だって。
「桃歌チャン。忘れてくれ、アイツのキスなんて。君は、俺の特別だ」
わかってくれるんだろうか。サキ先輩は、私のこの気持ちを。
そう思って、思い出した。
彼は、同じような経験を、させてしまったことがあるんだって。
だから、私の気持ちもわかってくれるのかもしれない。
サキ先輩が、囁いた。
「水瀬にとって、軽いものなんだ。桃歌チャンが、思っているより、ずっと」
あなたもそうだったの？
自分らしくないほどに、疑念の言葉が浮かんでは消える。
動揺する私を、サキ先輩は優しく抱きしめてくれた。

嫌な予感がした。そして既視感。
あまりの運の悪さに、自分を呪った。
いや、知らないままでも、彼女は傷ついただろうか。
自分が、もうずっと愛すると決めた自分が、彼女の特別に成ってみせる。
自分にとって、彼女は特別だから。
――遅れてしまって、ごめんね……。

驚いてはいたけれど、俺の表情を見て、無言で立ち去るアイツ。
アイツは、悪くなんかない。誰も悪くない。
桃歌チャンがショックを受けたというなら、俺が拭ってやる。その不安を、全部。

「ごめんな。あんなところ、見せるつもりなかった」
「……」
いつもよりも優しく聞こえる彼の声も、今は聞きたくなかった。
あの日の不思議な感触と、レモンの匂い、そして芳花先輩の顔がフラッシュバックする。
どうして私はこんなに動揺しているんだろう。
だって、別に、関係ないことなのに。
自分が、サキ先輩にああいう風に接されるのが、怖いから？
……彼はあんなこと、きっとしないのに。
でも、今回ばかりはサキ先輩も何も言えないみたいだった。
いつもと違って、静かな昼食の時間が、重苦しくて仕方なかった。

放課後になってすぐ、サキ先輩が迎えに来てくれた。
私が寄って行くなり、すぐに取られた手。ぎこちなさのなくなったその手つきに、少し複雑な気分になった。
「桃歌チャン、今日は二人で帰ろう」
そう言って、真っ直ぐ昇降口へ向かう。
サキ先輩も、考えたくないのかな。今日のこと。
「なあ、俺は、本当の本当に、桃歌チャンが好きだからな」
「……はい」
信じてるのに。信じてるはずなのに、どこか疑ってしまっていた。
いつもの帰り道をゆっくり歩きながら、サキ先輩は何度も私に告げた。
だから、彼がどれだけ私を好いてくれているかわかったけれど、どうしても不安が拭えなかった。

私は、信じたくないの……？　サキ先輩が、好きなのに。
「咲哉、何してるの？」
背後から聞こえた女の声にびっくりして、サキ先輩とほぼ同時に振り返ると、そこには、長い黒髪の綺麗なお姉さんが立っていた。
あの……どういう関係なんでしょう。
そう思って先輩を見上げると、彼は慌てて笑って言った。
「実里姉さん。……俺の、真ん中の姉さん。――見ての通り、下校中」
お姉さん……？
彼女の姿を今一度眺めて、目が合うと、彼女は笑った。
わ、わあ綺麗……。
「咲哉の後輩さんかしら？　私は、実里（みのり）。そうそう、四姉弟の二つ目」
ということは、サキ先輩にはあと二人兄弟が……？
「えっと、あの、基山　桃歌です」
見つめているこちらが恥ずかしくなるようなほどに美人。
そういえば、サキ先輩の家はお花屋さんなんだっけ……？　花がよく似合いそうな美男美女の子供がいるとは……儲かりそうな。
「桃歌ちゃん、よろしくね。それで、咲哉クンを早々ゲットしたの？」
「え！？　え、ええと……」
驚くべきことを聞かれた私は、慌ててサキ先輩に助けを求めたが、彼は私の身体を引き寄せて、後ろから軽く抱きしめた。
……って、先輩っ！
「そういうコト」
そんなこと言っちゃっていいんですか、先輩……。私は、彼女でもなんでもないのに。
実里さんは、私達を見ておかしそうに笑った。
「咲哉が積極的だなんて、珍しいのね」
……そうなんだ。私は、知る由もないことだ。

「桃歌ちゃん、この後、時間あるかしら？　是非、私たちの家に来ない？」
「え、えっと」
いいのかな。私は暇だけれど……。
再度サキ先輩を見上げると、彼は軽くウィンクをした。
えっと、いいのかな？
「お邪魔でなければ」
そう答えると、実里さんは満足そうに笑った。
「よかった。今日はみんないるのよ」

ほ、ほんとにお花屋さんだ。
街中でよく見かける、あの外観。
どこか、サキ先輩のあの匂いと似た匂いを感じる。
「何かあったら、是非買いに来てね」
実里さんが優しく笑って言ってくれる。
サキ先輩は、先ほどからあきれたような、楽しそうにも聞こえる溜息を漏らしていた。
「ただいま」
「お邪魔します」
お店の奥から階段を上っていくと、ごく普通の階段があった。
家の中も花の良い香りで満ちていて、芳花先輩が、サキ先輩のお姉さんが香水を作っているという話をしてくれたことを思い出した。
前を進む実里さんに続いて、サキ先輩と並んで歩く。
「先輩のお姉さん、綺麗ですね」
「あぁ……男友達を家に呼べない程度には」
冗談交じりに言った後、隼は別だけどね、と付け足したサキ先輩は、どこか誇らしげだった。
廊下を進んで行き、広いリビングに着くと、そこにはサキ先輩のお姉さんらしき女性が二人。
片方は、ふわふわの肩までの茶髪をした、ちょっと幼く見える人

で、もう片方は、実里さんとよく似た黒髪を、ポニーテールにしていた。
「サキの彼女！？　かわいい！」
そう言う彼女の明るい笑顔は、なんだかホントに笑顔を誘う、太陽みたいで、すごくかわいかった。
いくつなんだろう……一見同い年くらいに見えるのだけども。
「こっちが凪咲姉さん。で、あっちが美咲姉さん」
苦笑しながらサキ先輩が教えてくれた。
「基山　桃歌です」
「あたし、凪咲（なぎさ）。サキの二個上で、大学で園芸勉強してます！」
「私は美咲（みさき）です。咲哉の……えーと、二十三歳で、うちの花屋手伝ってるの」
二人は親しげに笑いかけてくれた。横にいる実里さんも、サキ先輩も、皆が皆美人で、改めて見渡すと、天国のようだった。
「ねえねえねえねえ！　桃ちゃん、サキの匂いわかるよね？　あのね、サキの匂いそっくりの香水、つけてみようよ！」
凪咲さんに手をとられて、リビングから連れ出される。
ご、強引なところがどこか似ているというかなんというか……。
それにしても、サキ先輩の匂いみたいな香水とは……。
やっぱり、芳花先輩の言っていたように、体臭なんだろうか。
連れて来られた部屋は、かわいい家具がたくさんある部屋で、凪咲さんの部屋のようだった。
「サキ、良い匂いするよね。たまにだけど。あれをね、再現しようと、美咲姉さんと頑張って早１０年なんだけど、ダメなんだよ～」
そう言いながら引き出しの中の小瓶を取り出して、私を椅子に座らせてくれた。
「でも、結構いい線はいってるんだ！　桃ちゃんも、あの匂い好きでしょ？　ぎゅってした時に、幸せな気分になるよね」
「えっと、そうですね」
事実だけど、何て答えればいいのか全然わからないや。

でも、凪咲さんは話しかけてるだけで満足みたいだから、軽く相槌を打っておくだけでもいいのかな。
「ちょっとごめんね」
腕まくりをされて、肘辺りに香水を吹きかけられる。
一瞬、花の香りがした。
「お母さんとか、隼君とかにも協力してもらって作ってるんだけどねー。香水としては、もうかなり良いものだと思う」
ほぼ無意識的に腕を嗅ぐと、確かにサキ先輩のあの匂いみたいな匂いがした。
これは、確かにそっくりだ。
「すごいですね」
そう言うと、凪咲さんはでしょ、と笑った。
「さー、戻ってサキにお披露目としますかね」
そう言いながら彼女は楽しそうに鼻歌なんて歌っていた。
「サキのこと、どれだけ知ってるかわかんないケドさ、聞きたいこととか、相談したいことがあったら、連絡してね。……あの子、いろいろと難ありだから」
凪咲さんにもらったメモを握り締めて、私たちはリビングに戻った。

「はいただいま！　ほら、桃ちゃん」
凪咲さんに背中を押されて、サキ先輩に近づく。また、あの香りが鼻腔をかすめた。
顔を見上げると、彼はおかしそうに笑って、私の肩を引き寄せた。
「俺、自分の匂いわかんないケド……なんか、嗅ぎ慣れた匂い」
そう言って、私の頭をそっと撫でた。
でも、そりゃあ凪咲さん達が何年も作ってきたなら、嗅いでいるだろうなと思った。
「咲哉に懐かれてるんだね、桃歌ちゃん」
美咲さんが微笑みながらそう言った。

懐かれてるって言い方はいかがなものだろうか。
「桃歌チャンとくっついてると、やっぱ、安心する」
私も、だなんて今は言えない。だって、離れられなくなっちゃうから……。
気がつくと、彼に対する不安は消え去っていた。私は、こんなにも自然に、サキ先輩の側にいられる。

「俺らの仕事は、練習の補佐と、ステージの裏方、公演の準備などなど。今の時期はあんまりできることないだろうけど……練習の見学とか、会議の出席とかで学んで行こうか。あと、ダンスの知識ないなら、勉強しないとな」
三年のマネージャーの先輩――草野（くさの）　武善（たけよし）先輩に、マネージャーの仕事について説明を受ける。
結局、やはり三年の先輩に審査されているのか、一年のマネージャーは私だけになった。
草野先輩は、真面目そうな人で、私に色々とマメに教えてくれた。
そこで、私が全然知識がなくて、今のままじゃ、パシリくらいにしか使えないって思い知った。
頑張らなくちゃ。成り行きとはいえ、なったからには真面目にやらなきゃ。
朝斗先輩なんかは、桃歌チャンはいるだけでも癒しだからね、とか言ってくれたけど、そんなのは、私は嫌だ。
先輩たちのために、努力しよう。

「基山チャン、俺が言うのもあれだけど、あれから落ち着いた？」
なんとなくあの日のことは触れないですごしていたけれど、芳花先輩は気になっていたみたいだった。
そりゃあそうだよね……あの日の私は、あまりにおかしすぎたか

ら。
「えっと……はい。ちょっとは、冷静になれました」
普通に見たら、変なやり取りかもしれない。でも、芳花先輩は悪くなくて、私が勝手に大げさに受け取って、ショックを受けちゃっただけだから。
「うん。……あのさ、基山チャンは、サキのコト好きか？」
何気ない風に聞いてきたことだけど、私はその言葉を何度も何度も心の中で反芻して、やっとのことで言葉を見つけた。
「……好き、です」
これしかない。他の言葉があるとしたら、それは「好き」じゃない。
少しの沈黙の後、芳花先輩が鼻で笑った。
疑問に思って彼を見上げると、芳花先輩は、頭に手をやったまま、再度軽く笑った。
「俺、思うんだケド。――その『好き』は、尊敬の延長でしかない」
胸にナイフが突き刺さるようだった。
真実かは、わからない。少なくとも、今この瞬間の焦った心境では。
何も言えずに俯いていたら、少し乱暴に肩を引き寄せられた。
「なァ、基山チャンは、俺にこうされても、ドキドキするだろ……？　あの時、俺がキスしたのを見てショックを受けたってのは、そういうことだろ……？　サキについても、振り回されてるだけで、変わらないんじゃねぇの？」
確かに、ドキドキはしている。でも、思いたくない。サキ先輩に対して特別な感情がある訳じゃないって、思いたくない。
「わかってるか？　事実の上じゃ、俺とサキは、どっちもリードしてないんだよ」
キスは、一回。
抱き締められた程度のことなんて。
わからない。わからないよ。

「基山チャン。泣かないでくれよ……。ちょっと言いすぎたかもしれないが、俺はキミを泣かせたくない。サキからキミを奪いたくもない。――むしろ、基山チャンが、ちゃんとサキを好きになれるように、サポートしてやりたい」
芳花先輩には珍しく、静かな声色で、早口にそう言った。
涙ぐんだ目を見られなくなかったけど、気づいてしまったようだった。
何で私は泣いたんだ。サキ先輩の気持ちに応えられてないと気づいてしまったから？
「なあ、基山チャンからさ、何かしてみようよ。……サキに、『惚れたろ』って言えって言ったの、俺なんだ」
本気かどうかわからなかったサキ先輩に、自分から動けば自信もついてくるって。
――サキ先輩は本気なんだ。本気で、私を……。
やっとわかった気がする。尊敬の域から抜け出せないのは、私がサキ先輩に対して憂慮して、「好き」を認めたくないから。
もし彼が気移りしそうでも、私に引き寄せるほどの。それほどの、愛情を伝えてみればいいんだ。
「……ありがとうございます！」
吹っ切れた。何もかも。
密着していた芳花先輩の身体を力いっぱい押し返して、二人で歯を見せて笑いあった。

「サキ先輩。今度どこか行きませんか」
昼休み、いつも通り私の隣のサキ先輩に、わざと何でもないようにそう言うと、サキ先輩は一瞬動きを止めて、私の方を見た。
その顔には、驚きと喜びが見えた気がした。
「デートさせてくれんのか！？」
「この間のお礼と、ゆっくりお話がしたいんです」

あまりの先輩の反応に内心にやけながら頷くと、サキ先輩は私を抱き寄せた。
彼なりの照れ隠しなのだろうか。そういえば、以前にもこんなことがあったことを思い出した。
抱き締められていたら、顔が見えないから。他の先輩には丸見えなんだけど。
「あの、普通のカフェでいいですか？」
私は、そんなにお店とか知らないから。
頷きながら私の頭を撫でてくれる。
「桃歌チャン、何かあったのか？」
「え？　えっと……何にも、ないですよ」
本当に不思議そうなその表情を見て、しらばっくれてみると、サキ先輩は笑った。
別に、知らなくてもいいことだし、特別何かあったという訳ではない。
ただ、私が、彼に対して積極的になろうと決意しただけ。
私にとっても、彼にとっても、「それだけのこと」かどうかは、わからないけど。
「サキ先輩」
「ん？」
「好きです」
芳花先輩のおかげで、気が楽になって、さらっと言うことができた。
「好き」という言葉を口にした途端に、何かが変わった気がした。
それは、二人の関係という、確かな事実だろうか。
サキ先輩の照れくさそうに笑った声に、胸がきゅんとした。

私が隼先輩に聞いたコト、あの日に思っていたコト、芳花先輩に言われたことを全てサキ先輩に説明した。

彼は、いつものように優しく相槌を打ちながら聞いてくれた。
「ごめんな……。俺は、桃歌チャンを十分不安にさせてたんだな。……でも、さ」
伏せた睫毛の向こうの瞳が、優しく甘い光を含みながら、笑った。
「桃歌チャンが俺を嫌いになるまで、絶対にこの気持ちは変わらないから」
窓から差し込んだ光が、サキ先輩を、舞台の上と同じように輝かせた。
松岡　咲哉。最初は悔しいほどにかっこよくて、強引で、ずるいと思っていた。本当は、あまりに不器用で、素直で、優しい人。
私を、愛してくれる人。
「私、まだわかりませんけど。あの、サキ先輩の気持ちに、応えられるように……」
ふいに彼の大きな手に頬を包まれて、言葉を止める。
近づけられた綺麗な顔に、どきどきした。
その瞳は真剣そのもので、見詰め合ったら息が詰まりそうになった。
「好きにさせてみせる。そうしたら、俺も桃歌チャンも幸せだ」
勿論わかっている。この言葉がその通りの意味じゃないって。自分にかけた暗示みたいなものだって。不安な私たちが、同じように安心できるような。

「先輩は……私が、魅力的だと、思うんですか」
恥ずかしくて、小さな声で独り言みたいに呟いたけど、サキ先輩はちゃんと聞いてくれていた。
「当たり前だろ」
照れたように少々乱暴に言う彼が、愛しいと思った。
帰り道で、抱き締められた彼の胸の中は、花の香りで満ちていた。

「桃歌チャンの評判、俺らの間で良くなってるよ」
朝斗先輩も加えて下校していたとき、急に彼がそう言った。
それって、つまり……。
「かわいいし、松岡たちだけに媚びたりしないし、一生懸命だし。何かな、松岡への嫌悪の感情が、ちょっと違う方向へ行き始めてる気がするよ」
冗談っぽくそうまとめて、朝斗先輩はそっぽを向いてしまったけれど、きっと私を安心させるために言ってくれたんだろう。
朝斗先輩もずっと、私の味方をしてくれている。
あえて何も言わずに心の中でお礼を言って、サキ先輩を見上げたら、やったな、と言ってくれた。
きっと、このままだったら上手く行く。
これ以上の出来事は、これからのことだし、私やサキ先輩個人の問題になるだろう。
全てとは言わないけれど、複雑なもやもやは、きっと解消した。
だから、これからは、サキ先輩の気持ちに応えられるように、努力しよう。
「はあ、俺もう彼女作っていいかな」
「桃ちー以上の女の子を見つけられる気がしないな」
「……そうだな」
そんなやり取りを聞いていたサキ先輩が、ふいに私の腕を引いて、その綺麗な長い指で私の唇をなぞった。驚きで身体が震えたけれど、それは全く嫌悪なんかではなかった。
驚く暇もなく、唇を重ねられる。
二度目の、サキ先輩の感触。
そして、もう慣れてしまったあの匂い。だけど、今日は一際違う気がした。
今までで一番に、酔ってしまいそうに甘い香り。
温かな胸に顔を埋めると、より一層強く抱き締められた。
「恥ずかしいから、道端で、やめてくれ」

解放されて、そう言った隼先輩と目が合うと、ちょっと飽きれたように笑って、目を逸らされた。
隼が先輩がいなかったら……いや、どの先輩もかけがえがなかった。
私が、素直な気持ちになるまでの過程においては。
「さいた、さいた」
サキ先輩が口ずさんでいたのは、チューリップだった。
私の名前には、花の名前が入っている。サキ先輩は、私を咲かせてくれた。
それは、私の中に、恋が芽生えたということだった。
綺麗な恋を、これからまた咲かせてくれるんだ。

Ｈｏｌｌｙｈｏｃｋ（前書き）

キス（軽いもの）までの表現があります。
甘々でベタベタの恋愛小説で、女性向けです。
ご了承の上お読みください。

Hollyhock

「合宿、ですか」
「そう！　基礎みっちりと文化祭の練習。海が見えるぜ！」
ふわふわの淡い色の髪と、色素の薄い肌と瞳。この17歳とは思えないかわいらしい容姿の少年は、谷垣（たにがき）　久（ひさ）。……正真正銘の、マネの先輩だ。
『久くんでいいよ！　みんなそう呼んでるから』
「ヒサセンパイ」に噛んでしまった私にそう笑いかけた久くんは、正に天使のようで……。しかし、呼び慣れてしまってから、彼の「みんなそう呼んでるから」はあくまでファンと同級生の話であって、部内では専ら「久先輩」「谷垣先輩」と呼ばれていることに気がついたのだった。本人は全く気にしていないようなのだけど。
ヒップホップ部のお父さん、草野先輩と並ぶと、まるで親子なのだった。
「二泊三日。最終日は海で遊んで帰る」
片付けの作業を続けながら草野先輩がこぼした言葉に、心が躍った。
「海！　ですか！」
何年ぶりだろう。家族でもなかなか行かないから……。
「合宿の話かァ？」
荷物を持ってきた通りすがりに問うた水瀬先輩に頷くと、彼はニヘ、と笑った。
「基山チャンの水着が見れる……っと」
「そ、そこなんですか！？　……あ」
大していいものでもないのに、と思って、水着を持っていないことに気がついた。
プールとかも行かないから、何年も買っていない。手元にあるのは水泳の授業用のものだけだった。

「今オンナノコに飢えてるからな～」
鼻歌を歌いながら通り過ぎて行った水瀬先輩の背中を見送って、私と草野先輩は苦笑いした。
「私、水着持ってないんですよね……」

「お疲れさまーっす」
「お疲れ」
「バイバーイ」
部活が終わって、それぞれパラパラと帰って行く。
部長である葉山先輩と二人で鍵を返しに歩いていると、紗奈に遭遇した。
「あ、桃歌ちゃん！　……と、葉山先輩っ」
葉山先輩を認めたとき、彼女は真っ赤になった。
先輩本人はなんてこともないように涼しい顔をしている。この人の場合、気づいてるけど、慣れているからこんな態度をとるんだろうな。
「えっと、バイバイ！」
沈黙が漂って気まずくなったので、私は無理やり彼女に別れを告げて足早に通り過ぎた。
「先輩、慣れてますよね」
「あ？　いや、あの子の場合は俺らの誰でもあぁだろ」
冷たさとは少し違った、無気力さを振りまいて葉山先輩は答えた。
「そう、ですか？」
すごく適当そうで頼りたくないって印象だったけど、葉山先輩は非常に洞察力に優れていて、また仁義はわきまえていると、この数ヶ月で気がついた。
サキ先輩に少しキツいのも、きっと彼なりに何かあるのだろう。
「そーゆーもん。で、そういう子にサービスするのは、本人の悩みのタネになるだけなの」
さすがのイケメン集団を率いているだけあって、そういうことは

よく考えているのだろうか。
鍵を返して葉山先輩と別れた後、私は急いでサキ先輩たちのところへ行った。
「なぁなぁ基山チャン！　水着！　買いに行こうぜ！」
すっかりハイになってしまっている水瀬先輩に苦笑いしていると、サキ先輩が彼を鋭い視線で睨みつけていた。
「俺の誕生日、最近だったの！　な、いいだろ」
「それ行ったら隼もだろー」
琴先輩の突っ込みに、呆れたように見ていた隼先輩も溜息をついて頷いた。
み、水着を男の人と買いに行くのは、ちょっとな……。
「凪咲姉さんに頼んでみるから、行っておいでよ」
そんな私の本音を知ってか知らずかサキ先輩が出した助け舟に、水瀬先輩が、というワケじゃなく、本当にちょっと嫌だった私は、あっさりと乗った。
「ホントですか！？　やった！」
もはやスルーされている水瀬先輩の不満そうな表情を見ると心が痛んだけど、凪咲さんと買い物に行ってみたかったから、私は全然迷うことはなかった。
……ってあれ？　水着買う流れに乗せられてしまった……。

「見・え・て・き・たー！！」
久くん、朝斗先輩、琴先輩のカワイイトリオと、水瀬先輩、そして一年の和真君――高梨（たかなし）　和真（かずさ）君が揃ってはしゃいだ。
彼らが開けた窓からは、かすかに海風が入ってきて、生ぬるいながらも涼しげな風は、正に夏！　という感じだった。
「はしゃいでんなよー」
三年の先輩の注意もさして気にせず窓から身を乗り出している五

人は、高校生には見えないほど無邪気だった。
「着いて荷物を置いたらすぐ昼食作りだ。俺も手伝うが、少し練習してから行くから、前に伝えたとおり、二人と準備しておいてくれ」
「わかりました」
バス車内は、はしゃいでる人、音楽を聴きながら目をつぶっている人、爆酔している人が主で、ふつうに起きているのは私と隼先輩、サキ先輩とあと数人くらいだった。
やっぱり男の子ってこういうものなのかな……。女子は、絶対にこんな風にはならないもの。
改めて女子一人、という状況に少しだけ不安を感じた。
「夜な、大体みんな集まって騒いでると思うが、その中でいるのは辛いだろ？　俺か、サキか、誰か……」
「大丈夫です、私。みんなといる方が楽しいですよ」
隼先輩の真面目な横顔が、少し驚いた。
私は、守られ続けるのは嫌なんだ。ましてや、仲間はずれなんて。
「心配することでもないですから」
微笑んで言うと、彼は頷いてまた窓の外を見た。
左の手に温もりを感じて顔を上げると、眠そうな顔のサキ先輩が映った。
ひとつあくびをして、またにっこり笑ったサキ先輩に、困ったような笑顔を向けると、逆の手で頭を撫でられた。
「サキ先輩？」
時たまある、彼の変な行動。ふっと笑っては何かをしてまたやわらかく笑う。それがとんでもなくかっこよくて、きれいで甘いから、私は嫌いになんてなれないのだけれど。
引き寄せられた肩と肩――彼の場合は腕、が軽くぶつかって密着した。
「暑くないですか？」
「クーラー効きすぎててさみぃ」
いたずらっぽく言った声はいつも通りで、彼のヘヴンモードは終

了したみたいだった。
「桃歌ちゃんって料理できるんだっけ？」
「えっと、まぁ、人並みには」
お弁当を自分で作っていた頃もある……っていうか、あの一日だけだけど。
一応琴先輩にはおいしいって言われたけど、サキ先輩はそれを知らないんだっけ。
「久先輩、ケッコーヤバいから注意しといてね。たぶん大丈夫だけどさ」
冗談めかして言いながら騒いでる久くんをちらと見て、サキ先輩は苦笑いした。
久くん、すごい天然なところあるしな……。手先は確実に器用なのだけど。
「ん、そろそろ着きそうだな。みんな起こさないと」
もうすっかり夏本番の日差しは、いつもより眩しかった。

「うおおー！　ボロいっ！」
ぴょんぴょんと跳ねてはしゃいでいる和真君と、ワケもなく叫びまくっている例の四人。
和真君、私にもあのくらい普通に明るく接してくれたらいいのに。
バスから荷物を下ろして、ちゃっかり私は先輩に荷物を持ってもらっちゃって、宿舎までやってきた。
青い海は宿舎の立つ高台から向こうにあり、きらきらと眩しい光を反射している。
しっかり潮の香りのする風と熱気に、夏のにおいを確かに感じる。
さっきまで寝ていた人たちはみんな眠そうにしていたが、海を見た途端、ほとんどの人がはしゃぎだした。
「和真ってば、子供だねー。こういうときだけ無邪気になりやがって」
梢君が私を追いかけながら笑いかけた。和真君は私が話しかけて

も素っ気無いし、何か楽しい話をしようとしても、あんまりちゃんと聞いてくれない。
「ねー。もう……」
心を開いてくれない、に近い。一番最初に仲良くなったのはもちろん梢君で、一年生のあとの三人、和真君と、牧村（まきむら）　敦史（あつし）君、根岸（ねぎし）　孝篤（たかあつ）君とは、それなりに話せる仲にはなっている。
敦史君は水瀬先輩に近い系統のいわゆるチャラ男で陽気で話しやすいし、孝篤君はちょっと変だけど、すっごく優しい。
でも、和真君は梢君にさえちょっと他人行儀な感じで、部内で打ち解けているのは久君と千種兄弟くらいだった。
この合宿で私がひとつ目指していることは、和真君と仲良くなることだった。
「桃ちゃーん？」
「あ、うん！」
和真君の背中を睨みつけてウンウン考えていたら、置いて行かれてしまっていた。
和真の言ったとおりに、ボロい……と言ったら失礼だけど、小綺麗とか新しさは感じないような宿舎だった。
昔ながらの引き戸を通って中に入った瞬間に、少しかびのにおいのする古い木のにおい。
低い天井に、背の高い人の多い部員はなんだか窮屈そうにしていた。
「桃ちゃん、行くよー」
「はーい」
久くんが、長身のカベの隙間を飛び跳ねて声をかけてきたので、私は人の間をぬって集団を抜けた。
「腹減ったなー！」
満面の笑顔でお腹をおさえる久君が微笑ましくて、ちょっとだけ笑ってしまった。
すると、久君の手がそのまま私の頭の上に乗せられた。

「はぁー、桃ちゃんかわいいいな、ホント。咲哉が憎たらしい……」
「そ、ひ、久くんのかわいさには負けます！」
「あはは、でしょ？　なんちって」
すっかり混乱しちゃっている私の頭をぐしゃぐしゃと撫でるマネをしながら、髪が乱れないように優しく撫でてくれた。
「あの、久君、和真君とどうしたら仲良くなれますかね？」
「和真？　うーん……わかんないなぁ。でも、見てると、咲哉とかみたいな、なんか無差別に人に親切できる人は苦手みたい。桃ちゃん相手だと、純粋に恥ずかしくてってことかもだけど」
「そうなんですか？　でも……」
「和真はちょっと照れ屋なだけだよ。そのうち仲良くなれるって」
ちょっと強引にまとめた久くんは、それでも私を励ますように自信たっぷりの笑みを浮かべた。
いくつかの広場を持つ廊下を歩いていくと、広い厨房に着いた。
「よし！　昼飯作るぞ！」
腕まくり――実際は半袖を着ているからフリ、をして、久くんが駆け出した。
「基山ちゃん、久には火は任せるな、キケンだ」
「あはは……はい」
草野先輩がかなり真面目な面持ちで言うんだから、よっぽどなのだろう……。

「これ、そろそろいいぞ。皿出してあっちで盛り付けておいてくれ」
フライパンをきれいにさばいてテキパキと動く隼先輩は、料理をしているだけだというのに見とれてしまいそうなほどかっこよかった。
彼一人でも、三人がかりより全然効率がよかった。確かに久くんはなんでもかんでも燃やしそうになるし、大変だったのだ。
山盛りの唐揚げをどんどん揚げていく姿はまさに主婦だった。
「ん、もう大体終わるだろ。一年連れてきて運ばせてくれ」

「はい！」
若干道に迷いそうになりながら、なんとか音を頼りに広場を探して辿り着いた。
「もうご飯できるので、一年生は運ぶの手伝ってくれますか？」
「りょうかーい」
四人を引き連れて厨房に戻って、もうずらりと並んだ皿を食堂に運び出した。
「隼先輩って主夫なの？」
「え！？　……えっと、下に兄弟が三人いて、家事ほとんどやってるらしいから、事実上は、そうかなあ？」
「へー、そっか」
孝篤君が急に変なことを言うからびっくりしてしまった。しかも声のトーンが本気だった。
彼はよく、どうしてか唐突に口を開いてはちょっと的外れなことを言う。
「料理できる人って、男女関係なくいいもんだね」
全て運び終えて、梢君が先輩たちを呼びに行ってくれて、私たちはちょっと休憩していた。私は先ほどから近くにいた孝篤君と雑談をしていた。
「ホントだね。隼先輩は私よりもずーっと家庭的で羨ましいなぁ」
「ん、桃歌ちゃんはこのままでいいっしょ」
「え？」
後ろに手をついて、足を投げ出した姿勢で、孝篤君は天井を見つめていた。
「和ませ役。努力してなれるモンでもないしさ」
こちらを向いた孝篤君は、その横顔を見つめていた私と目が合った。
どこか寂しそうな柔らかい笑顔は、サキ先輩のものと少しだけ似ていた。
「そうかなぁ。……孝篤君は、何か自慢できること、ある？」

頷いて頭を掻いた彼は、一人でへにゃりと笑ってから、上体を起こして私の方は見ずに言った。
「ない訳じゃないけど、さ。ココにいる間は何の役にも立ちやしない」
でも、聞きたいよ。
そう言おうとしたとき、先輩たちが食堂に入ってきた。
孝篤君は誤魔化すようにさっと立ち上がって向こうへ行ってしまった。
「チビ、どーした」
よっぽどしかめっ面で放心していたのか、隼先輩に肩を叩かれてやっと思考を目の前のことに戻すことができた。
気づいてしまった。私は、孝篤君についても、全然知らない。話した量に比べると彼自身のことは笑っちゃうくらいに知らない。
知りたい。悩んでることとか、どうにかしてあげたい。私に何かできるというのならば。
初めて食べた出来立ての隼先輩の料理は、いつもと同じ味なのに、すごく優しくて、なんだか泣き出したくなってしまった。

午後の練習と夕食を終え、部員全員が集まってのミーティングが開かれた。内容は、文化祭について。
「文化祭公演が他と決定的に違うこと……それは、公演時間と客だ。……」
「朝くーん、タケ怒っちゃうよー」
机に突っ伏して居眠りしかけていた朝斗先輩に久くんが声をかける。
手と口を止めて朝斗先輩を見つめる草野先輩の目はちょっと怖かった……。
「うーいー……」
草野先輩は、部内の怒ったら怖い人ランキングベストスリーに入るだろう。もちろん、サキ先輩も。

朝斗先輩も朝からはしゃいでいたし疲れているだろうが、仕方がない。
説明が続けられる。
割合はあれど、客層は広がるということ。初秋といえど暑い気候の中での昼間の公演だということ。何かとアクシデントがつきものだということ。
新人マネージャーとして背中が冷えるようなこともたくさんあった。
でも、今年は、まだいい……。草野先輩も久くんもいるのだから。
三年生と二年生が徹夜で考えたという振り付けの概要の紙を配り、私はその内容の専門用語の多さにクラっときた。
ま、全く何がなんだかわかりません先輩……。
周りを見ると、孝篤君と目が合った瞬間に彼も私と同じように困ったように苦笑した。
梢君や和真君は真面目に目を離さないで読んでるし、敦史君はハナから目もくれてないし。
「まぁ、そんな感じだ。俺からは以上。悠輔、何かあるか？」
問われた葉山先輩は首を振ると、あくびをひとつして解散、と言った。
この後は、予定では入浴、ということになっているが……。
「桃歌ちゃん、最初入っておいで」
どうしようかな、とボーっとしていたら、サキ先輩が声をかけてくれた。
「いいんですか？」
「集団の男っていうのは無駄に長風呂だからな」
浴場が一つしかないのだった。一緒に入るわけにはいかない。でもその辺りのことは全く決められていなかった。
「それに、レディーファーストは基本だろっ！」
横から入ってきたのは水瀬先輩だった。
サキ先輩と彼の言葉に苦笑しながら、私は自分の部屋に着替えを

とりに行った。
男子は約五人ずつ1部屋で、私は一人部屋。
地図を片手に廊下を歩いて、焦った。
ま、迷った……！
さして広くもないのだが、地図も案内もあいまいでよくわからなかった。
とりあえずどこかの個室に誰かいないか探そう。
一番近くの部屋の扉を軽くノックして扉を開けた。
「……」
扉の向こうには、ぐちゃぐちゃの荷物。そして……。
「ごっごめん！」
慌てて扉を閉めた。仏頂面で、そして上半身裸の和真君がストレッチをしていた。
焦り故に答えも待たずに扉を開けてしまった私がばかだった。
ばくばく言ってる心臓をそのままにしてまた他を当たることもできず、私はその場に座り込んだ。
「……なんか用だった？」
すると、扉がまた開いて和真君が顔を出した。ちゃんと服を着て。
「あっ、えっと……ここは、和真君たちの部屋、でＯＫ？　迷っちゃったの」
「なる。合ってるよ」
それだけ手早く言ってまた部屋へ引っ込んでしまった。
ちょっと、いやかなりびっくりした。
間もなく部屋の前にやってきた梢君にもびっくりされたことは言うまでもなく。

もともと集団用の浴場は広くて、一人で入るにはちょっと不安になるくらいだった。
だからあんまりゆっくりする気にはなれず、ささっと体を洗って湯船に漬かったのも短時間だった。

脱衣所で着替えていると、外から、怒鳴り声が聞こえた。
それは、サキ先輩のものだったので私は内心かなり焦った。
ど、ど、どうしよ……。あぁもう、絶対くだらないことだし……。
とにかく素早く着替えて扉の前で外をうかがう。
「水瀬。これで二回目だからな？　わかってるか？」
サキ先輩、怒ってる。水瀬先輩……二回目。つまり、そういうことだろうな。
聞いてないふりを装って、私は微笑みを作って扉を勢いよく開けた。
「あがりまし……わっ」
一歩踏み出した瞬間にサキ先輩の胸に引き込まれた。
も、もしかしたらこれはちょっと面倒なことになるかもしれない。
聞いてないふりなんてしないほうがよかったかな……。
「この五日間……俺か、隼か、草野先輩。絶対誰かと一緒にいてくれ。頼むから……」
「サキ、冗談だって……」
「水瀬は黙ってろ」
私には弱々しい囁き。水瀬先輩には覇気のある声。
というか、私は、またサキ先輩を心配させてしまったのだろうか……。
「わかりました、から、水瀬先輩には、もう何も言わないでください」
「……。俺、入るから、隼といてくれよ？」
しっかり目を見て頷くと、サキ先輩は解放してくれた。横目見た水瀬先輩は少し焦燥した表情でウインクを配せた。

「琴。俺なんかだめなこと言ったかな……」
あのままサキと一緒に風呂に入るワケにも行かず、部屋にいた琴に助けを求めた。

「またサキ怒らせたの？」
「基山チャンさびしいかもしれないから一緒に入れば？　って言っただけなんだけど」
寝転がって扇風機の風を受けていた琴だったが、俺の言葉を聞いて、体を起こした。
「そりゃどーなんだろーね。お前の考えてること伝わってたらフツー怒んないっしょー」
「そう思うよなぁ……」
咲哉サマはつくづく基山チャンのことになるとアホだ。というかなんというか。
「前のアレは自分でも言い過ぎたと思うけど、今回は別に俺に怒ったって何もないのにな。基山チャン聞いてなかったフリしてたけど明らかに聞いてたし」
「サキは桃ちーの言うことと、キレてるときの隼の説教くらいしかちゃんと聞いて反映してくれねーしな～」
……困ったものだ。基山チャンも男慣れしてないからなんとも思わないのだろうけど、サキの女慣れのしていない度合いは異常だ。つーかあんなに余裕なかったら普通嫌われる。
「あ〝ー！　イケメンってほんと得だなー！！」
「あはは……それは思う」

「あ！　……さっきはごめんね、勝手に入っちゃって」
「別に。むしろ俺の方がごめん」
ミーティングをやっていた広場でわいわいやってると聞いてやってくると、和真君が真っ先に目が入ったので、私は彼に一応謝っておいた。そしたら、逆に彼にも謝られた。
いつものように素っ気無かったけど、でもちょっとだけ気を遣ってくれたのが嬉しかった。
「あの、さ、和真君」

「何？」
いい機会だと思った。仲良くしたいって、言おう。

「私のこと嫌い……？」
かわいらしい顔をこの上もなく苦しそうに歪めて、彼女はそう言った。
な、んで……。
胸が痛かった。そんなつもりはなかったから。
言葉を探しながら、今の自分も酷い顔をしているだろうな、と思って少し恥ずかしくなる。
「っ全然、嫌いじゃ、ない……よ」
素直じゃない。かわいくない。損してる。
ずっと言われ続けてきたし、わかってるけど。
自分がどれだけそれで人を傷つけてきたかは、計り知ることができなかった。
顔を伏せていたせいで、彼女があのかわいらしい笑顔を取り戻したことにも気づかなかった。

いつもと変わらない、仏頂面……じゃなかった。
和真君は、確かにその中で驚いたような顔を見せていた。
声は震えていたし、彼が会話中に目をそらすことは珍しかった。
「よかった……」
自然と笑みがこぼれてそう呟くと、和真君ははっとしたように顔を上げた。
そして、私に、笑いかけてくれた。
「和真君、全然私と喋ってくれないから、嫌われてたらどうしようって思ったの」
「俺、なんかそう思われるようなことした？」

彼の本当の自然な笑顔じゃなかったけれど、いつもの仏頂面よりはほぐれた表情を浮かべていた。
「ううん。……私はね、和真君と仲良くなりたかったんだけど、和真君はあんまりそう思ってくれてなさそうだったから」
「それは……」
答えようとした和真君の口が、止まった。ちょっとぱくぱくと空振りをして、でも何も言わなくて。
あっちへいったりこっちへいったりしてる視線と、赤い頬。
しまいにはふいっとそっぽを向いてしまった。
この仕草……何度か、見たことある。
『純粋に恥ずかしくてってことかもだけど』
久くんの言葉が思い出される。そういえば、和真君は私が何か言うと、よくこうしてそっぽを向いてしまっていたような。
「かず、さく」
「ごめ、ごめん、ちょっとタンマ」
額に手を当てて息をする和真君。発した言葉はちょっと狼狽しているように聞こえた。
そんな和真君を前に、私はもう何も言えなかった。
「う〜〜」
唸っている和真君の様子がちょっとおかしくて、私はこっそり笑ってしまった。
しばらくそうした後、彼はゆっくりと口を開いた。
「く、くだらないことなんだけど、さ。俺、調子乗ると遠慮できないほうでさ。その、基山みたいな女子と、あんまり接したことないし、色々言い過ぎると、いつの間にか傷つけちゃうかと思ったら、申し訳なくて」
早口で、それだけ勢いで言って、和真君は苦笑した。
つまり……気を遣ってくれて、いた。
案外に真面目な彼らしいことだった。
唖然としてしまった私を心配そうに覗き込んだ彼に、私は一つ頷

いて笑いかけた。
簡単なこと、だったんだ。
「全っ然気にしなくていいのに！　同い年でしょ？　それにね、傷つけるのを怖がってたら、何もできないよ」
私は、こんなだけど、梢君に噛み付いた経験がある。それは、私のためにやったことだった。
サキ先輩にだって口出しするし、葉山先輩も怖いけど、態度だけは怖じたくなかった。
「驚いた。……基山、強いな。俺、男なのに弱っちいや」
膝を抱えた格好で座っている和真君は、自嘲の笑みを浮かべた。
それでもしっかり目を見てくれる。私はそんな真面目さが和真君のいいところだと思った。
「和真君。腕相撲しよ」
「え、あ、うん？」
突然の提案に彼も驚いていた。なんてことはない、ただの思いつき。
腕の長さも負けているから、勝ち目なんてない。
でも本気でやった。少しだけ耐えて、でも和真君に負けた。
「あははっ。ね、ほら、和真君は男の子だよ。私じゃ勝てないもん」
自然に笑えた。無邪気に熱くなっている和真君がいて、私の言葉に彼は笑った。
「基山がモテる理由、わかったよ」
「えっ！？　私がいつ誰にモテたのっ？」
「部員全員、かな～。あー、葉山先輩とかはちょっと違うけど」
じゃ、風呂入ってるから、と私を残して、彼は去ってしまった。
ぶ、部員全員って……。それこそ校内のファンに殺されかねない。
「あっそうだ」
隼先輩か草野先輩と一緒にいろと言われたのだった。わいわい騒いでいる集団の中に隼先輩を見つけたので、私はそこに近づいていった。

「っきゃっ！」
この香水のにおい……敦史君だ。突然手が引かれたと思ったら私はその香りの中に抱かれていた。
って、何を私は冷静に。
「敦史君っ！」
怒りをこめて咎めてやった。でも、彼は全くひるまなかった。
「五日間も桃歌ちゃんとしか会えないとか寂しくない？　ちょっと女の子チャージさせてよ」
「……牧村。俺は構わないが、サキだけでなくソイツ自身も怒らせるとヤバイぞ」
隼先輩は梢君のあの件を言っているのだろうか……。
「や、ヤバくないですよ！」
反論すると、いいのか？　という視線を配せられて私は黙り込んだ。
なんとか身をよじって敦史君の腕を掴む。
「女なら誰でもいいキミがわざわざ桃歌ちゃんに触れる必要なんてある？」
声がしたと思ったら、敦史君の腕から解放された。
その綺麗な顔を嫌そー……に歪めて敦史君をにらみつけていたのは孝篤君だった。
「泥沼展開か？」
「そうじゃないと信じます……」
怖すぎる。サキ先輩が孝篤君に何をしでかすかわからない。
「んま。ねーけど。女のケツを追うのは性に合わねェや。あー早く帰りてェな」
敦史君は全く物怖じせずにさらっと言いのけてあくびをしながら立ち上がってどこかへ行った。
「孝篤君、ありがと」
「お礼を言われるほどのことでも。あのバカには冗談も本気もないし人の話聞かないからさ、気をつけなよ」

敦史君とクラスが同じである孝篤君は、いつも彼をたしなめる役だ。
……って言ったって、今のは孝篤君、確実にフツーに怒ってたけどね。
「根岸、間違ってもサキを敵には回すなよ」
「まさか。俺は二人の仲を応援したいですよ」
柔らかく笑った孝篤君に隼先輩は一瞥をくれると立ち上がった。
「サキが来たからそろそろ俺は行くぞ」
「あっはい」
と、返事をしてから気がついた。
私、隼先輩に何も言ってないのに……！
……やっぱり彼はエスパーみたいです。

「あ、サキ先輩。ちーっす」
「よ、よくわかったな」
メガネをかけていないから見えないと思ったのだろうか？
「はは。僕、裸眼そんな悪くないんですよ」
それに、体型ですぐわかる。
っていうか、様子が変だ。こりゃ……。
「桃ちゃんと何かありました？」
「……あぁ、ちょっと、な」
そのちょっとは、本当にちょっとなんだろうなぁ。困った顔の桃ちゃんが想像できる。
松岡先輩の隣に座って、湯を出す。
「桃ちゃん、それぐらいじゃ気にしないと思いますけど、あんまりひどいと嫌われちゃいますよ」
「わかってるよ」
彼女はすごく気楽で寛容だ。だからこそ松岡先輩がここまで執着するのだろうが。

一度は彼女に惚れたことがあるから、少しわかる。こんな環境下で他にたなびかないようにするなら、このくらいやらなくてはいけないだろう。

優しくて、親身だし、女としての隙が多い。それでも心に隙を作らないのは、松岡先輩がいるからこそ。

沈黙のまま体を洗う。

「なぁ……梢、俺ってカッコ悪いか……？　男として」

湯船に先に浸かった松岡先輩が、ぼんやりと呟いた。

「どういう男がかっこいいかによりますよ。一途に好けるのはかっこいいけど、夢中で余裕がないのはかっこよくないかもしれない。――先輩は、桃ちゃんに、どうしてほしいか、もう聞いてるんじゃないですか？」

そうでなければ、隼先輩はきっとこの状況を放っておかないだろう。松岡先輩が全く的外れな言動をしているわけではない。だが、桃ちゃんが困っているのは事実だった。

「そう、だな。……でも、心配なんだ」

「僕は骨身にしみてわかってます。桃ちゃんは先輩だけじゃなくてたくさんの人に守られているし、ある程度は自分の覚悟を持っている。そして、守られ続けるのは嫌だと言っていました。……つまり、松岡先輩が彼女を守れなくても、構わないってことです」

自分は、それを試した。ちやほやされるだけの女なんて面倒なだけ。しかし、彼女は違う。自分のケジメはなるべく自分でつけようとした。自分を守るために暴走しかけた松岡先輩を自ら抑止した。

葉山先輩や朝斗先輩を言い負かしながらも、たくさんの部員に信頼され、愛される。彼女は、特別な女の子だと思う。

「過保護、かぁ」

細身であれどあんな大きい体でちまっこく悩む松岡先輩はちょっと笑えた。

「みんな桃ちゃんのこと好きなんですから、黙ってるととられちゃいますよ」

冗談めかして言ったのに、彼はより一層ちまっこくなっただけだった。

「おーい和真ァ、聞いてんのか？」
「聞いてるけど、ちょっと黙っとけ」
……敦史はうるさい。機嫌が悪いときは特に、いらないことをべらべらとしゃべる。
「つめてーヤツ」
コイツの武勇伝に興味はない。色恋にそんな執着してない俺にとって、カワイイ子がどうだとか遊びがどうだとか、面白くもなんともない。
「あーもう、何でお前そんなにウザいんだよ！」
「まずどの理由から聞いちゃう？」
イライラしてる自分がバカらしくなるほど、敦史はいつも冷静。つーかなーんも考えてない。
「不純な理由でヒップホップ部に入ったんだ、女にモテたい理由を吐きやがれ」
「あぁ、それ」
急に落ちた声のトーンに、俺は少しだけ聞いたことを後悔した。人の暗い事情を聞くのは、いつだって辛いし、損なことだ……。
「俺さ、小中と男子にめっちゃいじめられててさ、それで女子の友達もほとんどいなかったわけ。ああ、当時は別にそんなに辛いと思ってなかった」
「なんでそれが女遊びに走る理由になるんだよ」
気を遣ってか、気楽に酷かった過去を語る敦史の心中がわからなかった。深くまで読まなきゃいけないほど、複雑にできてると思いたくなかった。今まで自分が彼に接してきた態度を、省みないといけなくなるから。
「……幼馴染にな、言われたんだ。せめて女たらしにでもならない

とやってけないって。この部活薦めたのも、そいつ」
淡々と抑揚の少ない喋り方は、いつもと同じ。しかし、良いことではない、そんなことをさらりと言ってのける彼が、急に健気に思えた。
「だから、理由になってねぇ。そんなことしなくてもやってけるってコトくらい、お前にだってわかるだろ」
別の意味でイライラしてきた。どうして、こんなにバカなんだ、コイツは。
「俺に訴える幼馴染があまりにも必死だったから、きっとそうだって思い込んだ。あいつにカッコも整えてもらった。これで安心だと笑顔を見せたから、これで安心だと思った」
包み隠さず話した敦史が隠していることは、ただ一つだろう。幼馴染との関係。その裏に隠し持っている、彼自身の気持ち。
「……」
言うべきか。敦史が自覚しているのならば、言う必要はない。しかし、そうでないなら、きっと気づかせなければ、彼は間違った方向に進みかねない。
「その幼馴染って、女だろ。……お前は、そいつのこと、好きだろ」
「そうかもな」
湯船に浸かって、天井なんて見上げて、敦史はぼんやりと返した。もう、見ていられない。本人がどうであれ、もう俺が満足ならない。
「かも、じゃなくて。……認めないと、手遅れになる。お前が」
「……かってるよ！　もう言うな」
声を荒げた敦史は、顔色一つ変えずに、また天井を見上げていた。わかっているなら、どうして。
小中といじめに遭い、幼馴染以外に心の許せる同年代がいただろうか。そんなはずはない。
そして、その幼馴染に言われたことに忠実に従っている。その、彼女は、もう世話ができないから、不安になったのだろう。

「あいつは……俺と縁が切りたくて、こんなこと言い出したんだよ。もうこれ以上依存したら、生きられなくなる。どんな他の女の子も、好けなくなる。誰にも、好かれなくなる。だから、もうしばらく話してない。……隣の、クラスにいるのに、な」

バカだと思っていた。確かに、バカだ。でも、それは人と交流するのが苦手……その経験が、少ないからということもあるだろう。そして、こんなことを背負っていて強がる、空元気。

「お前はそれでいいのかよ。今、女と遊ぶのをやめて、そしたらお前はすぐに一人になるか？　……ならないだろ。少なくとも俺がいる。一生そいつだけって、そんなにいけないことかよ」

感情的になって、俺もバカだ。敦史がどうだって、どうでもいいじゃんかよ。

そこまで考えて、基山のバカみたいに明るい笑顔が浮かんだ。さっき……彼女は、俺を、今と同じように励ましてくれた。……悪いことじゃ、ない、か。

「和真……」

一人が寂しくないなんて、辛くないなんて、嘘に決まってる。それは当たり前だ。しかし、敦史は一人じゃなかったんだろう。幼馴染がいたから。そして彼女は敦史にとって大きな存在だった。だから、寂しくも辛くもなかったんだ。だから、孤独を隠せるくらいには強かな敦史がいる。

「もうひとつ、聞いてくれるか……？」

「この際だ、全部言えよ」

人の暗い事情を聞くのは辛いと言った。自分が何を言ってしまうかわからないから、『怖い』ということもある……けど……。

『傷つけるのを怖がってたら、何もできないよ』

あんなに辛そうな表情をした後に、彼女はそうやって笑ったじゃないか。そんな強さが、欲しかった。

「俺の幼馴染は……葛西（かさい）　秋穂（あきほ）は、水瀬先輩が好きなんだ」

どっかで、聞いたことがある名前……。

そうか、マネージャー志望だった子、だったと思う。見たことはないが、先輩から聞いたことがある。
選考で落とされたその日に、階段から転落して、脳震盪で入院した――。
「葛西　秋穂は、牧村　敦史が好きだ」
救急車を呼んだのは紛れもなく、その水瀬先輩だった、と。
突然入ってきた彼に、敦史は戸惑いを隠せない様子で、湯船の中で立ち上がった。
水瀬先輩が、そんなことを知るはずが……ない。そう言いたそうな顔で。
「黙って聞け。盗み聞きしたことは謝る。――俺は本人から聞いていたんだ。自分がいないと彼はだめだ、でももう近くに入られない。……いないほうがいい。敦史を頼む、と」

後頭部を殴られたような衝撃だった。
『うん！　敦史かっこいいよ！　……これなら、きっと大丈夫』
俺の世界に、これまでもこれからも女は秋穂一人だ。
わかっている。彼女じゃないといけないって。わかっているけど……。
『私ね、あの先輩かっこいいなぁって思って。敦史もああいう風になってよ』
言われたときにはショックだとは思わなかった。秋穂は自分に理想を求めてくれる、と。
『水瀬先輩。ああ見えてすっごい優しいの』
程なくして大きくなった彼女の憧れは、俺の希望を絶望に変えた。
マネージャーを志望したと聞いてから、三ヶ月以上会ってもいない。彼女の代わりを探すように、徒に女の子と遊んだ。
でも、それは自分自身と共に秋穂を傷付けていたのか……。
ダメになっても、もうなんでもいい。俺は秋穂以外には何も感じ

ない。
「敦史、お前、知らないだろ。あの事故から、彼女、学校休みがちだって」
「嘘、だろ……」
親同士も仲が良かったのに、秋穂に裏切られた腹いせに、反抗的になっていて全く話していなかった。
だから……知れなかった……！！
「俺は……っ」
「バカだな」
しばらく黙っていた和真が水を差した。いや、悪いことじゃない。
これまで彼がどれだけ俺の話を聞いてくれたか。それで、わかったことだろう。
俺は、バカだから。
それでも呆れて優しく笑った和真に、俺は心から感謝した。

「あ、お帰りなさい」
隼先輩と入れ替わりでサキ先輩がやって来た。私の隣に座り込む孝篤君をちらっと見て、何か言うかな、と思ったけど、小さく息を吐いて笑っただけだった。
お風呂上がりのサキ先輩の姿をさっと眺めて、ちょっとどきどきした。
やっぱり、こういうときの男の人って、素敵なんだなぁ。
濡れた髪とラフな格好。外見的にはほとんどそれだけで、でも、近くにいると、少し暖かい感じがする。それと、あの良い香り。
「微笑ましいですよ、二人とも。見とれあって」
「えっ！　えっと……ごめん」
孝篤君の半笑いの言葉にびっくりしたのと恥ずかしいのとで、つい謝ってしまった私を見て、彼はもう一度笑った。
「桃歌チャンがかわいいからさ。……おいで」

いつものことだけど、恥ずかしげもなくそう言って私の手を引いた。
サキ先輩の腕の中にすっぽりな私を見て、孝篤君は柔らかく笑った。私にとってはとんでもなく恥ずかしかったのだけど。
「あっねえねえ、孝篤君の自慢できるようなことって、何？」
サキ先輩のぽわぽわな陽気にあてられて二人だけの世界になってしまうと気まずいと思い、孝篤君に声をかけた。
「え？　……あぁ、ピアノだよ」
「孝篤ってピアノ弾けるのか！」
てっきり聞いてるだけだと思っていたサキ先輩が珍しく食いついて、私たちは三人で話を弾ませた。
そのワケは、実里さん――サキ先輩の真ん中のお姉さん、が音大でピアノをやっているから、なのだった。
孝篤君は、母親はピアノの先生、父親は音楽教師と、音楽一家に生まれたそうで、ピアノは三歳くらいからやってるという。やめていく男の子も多い中、他に取り得もなかったから、孝篤君は今まで続けているって。
「でも……どうして、この部活に入ろうと思ったの？」
「俺、お察しの通り全然運動できなくてさ。このままじゃヤバイなぁ～って思ってたんだけど、運動部入る気にもなれなかった。新歓で、ヒップホップ部の公演見て、音楽好きとして、こう、ビビっときたんだ」
音に合わせて、踊る、笑う、歌う。誰もが心惹かれて、でもそこからやりたいという意志に辿り着くのは、少なからず困難なことだと思った。
でも、彼の言うことは全然わかる。感覚的なことだけど……。
「そんなものだよね。俺は色々あって元からやってるけど、ほっとんどの部員は憧れとかで入部してる。けどきっかけって大事だしな」
……よかった。さっきあんなに怒ってたから、サキ先輩の機嫌が心配だった。

でも、良い匂いもするし、今は良い先輩モードになってる。
「そういえば、桃歌チャンは中学の時何部だったの？」
「えーと……。一応クラシックギター部でした……」
「えっ！　すごい意外」
驚かれると思って、ずっとあまり言いたくなかった。正直そんなに誇りに思っているわけでもなくて。
「友達に無理やり誘われて……音楽やったことなかったのに。それで、部員も少なかったし、ゆるくやってました」
ギターは真面目にやらないと全然できないものだから、当時は何の気もなくただ真面目にやっていた。
でも、三年生で引退してから、そんなに執着してなかったことに気がついたのだった。
「なるほどね。どおりで音楽的センスがあると思った」
「えっ！？　全然ないよ。言った通り二年間クラシックギターやってただけだから……」
孝篤君みたいな……ピアノを長年やってる人、言わば音楽の熟練者に言われるほどの能力は持ってないと思う。
「あはは。八分とか十六分とか、案外普通わかんないもんだよ？」
「そ、そうなの……？」
多分、ダンスの練習を見ているときの拍の取り方のことなんだろう。
楽譜も読んだことがなかった私は中学二年間でたいへん努力をしたものだけど……。
「今度、聞いてみたいな」
「でももうどっちの手も全然動かないですよ。そもそも楽器もなくて」
優しい笑みのサキ先輩に慌てて返すと、孝篤君があ、と漏らした。
「うちにあるよ？　父さんの仕事柄、色々楽器類は」
「そ、そうなの？」
「うん。昔俺もちょっと弾いてみたことあるし。……桃歌ちゃん、

弾いてよ。いつか、みんなに聞かせてみようよ」
孝篤君のほんわりオーラに気圧されて、でもうんとは言えなかった。
だって……そんなに上手くなかったし、ブランク一年くらいあるし。そもそも、ふだん演じる立場の人の前で一人で演奏するのは精神的に辛い。
「ん～……そんじゃさ、音楽会みたいなの、ちょっとお遊びで開いてみない？　カラオケ大会みたいなもんならみんな乗ってくれそうだし」
しばらく黙っていたサキ先輩が手を打って提案した。あ、案外ノリノリだ……。
「孝篤がピアノ弾いて、桃歌チャンがギター、あと……確か久先輩はバイオリン習ってたし、梢は元吹奏楽部だったよな。歌上手いのは水瀬と……」
ひ、久くんがバイオリン……！　なんて西洋少年！　マダムキラー！
自称というか、久くんの密かなファンな私はバイオリン久くんというだけでウキウキものだった。
「ていうか、アンサンブルしたらいいんじゃないですか？　いい感じに集まってるし」
わわわ……話が大きくなっていってる。
「わ、私一人でも弾きますから、先輩たちも、孝篤君も、ダンスのほうに集中しましょうよ……。文化祭終わったら、コンクールもあるし」
正直、申し訳ない。ピアノはともかくとして練習する場所や時間をとることは難しい。ましてや演奏する音楽系部活じゃないヒップホップ部が演奏する場所を確保するのだって。
私が決死の思いで口にしてから、二人は何も言わなかった。そして、
「ナイス孝篤」

「先輩こそ」
顔を上げるとしてやったり顔の二人。何かと似てるところの多い彼らだったが、こういうときはサキ先輩のほうが子供だ。……じゃなくて。
「え！？」
一体何をされたのかわからない……と思考しかけて、ようやく気づく。
「ま、俺は別に弾いてもいいけど。桃歌ちゃんがやる気出してくれるように、言うなれば仕向けたね」
意地悪く、しかし爽やかに笑った孝篤君を責める気にはならなかったけど、ハマっちゃう私もバカだ……。
「……あんまり期待しないでね。第一、二年間ギターでっかい似合わないと言われ続けてたから、想像できると思うけど……」
そんなに聴きたいと思われているなら、演奏するのも悪くはない、か……。
そもそもあの部活に入ったのも、私なんかが必要とされてる！みたいな感情があったからだし、ここに来てそういうのを捨てるのはちょっとナンセンスかもしれない。
「桃歌チャンならなんでもかわいいから大丈夫。部員ならなんも言わねぇっしょ」
そういう問題じゃないのに、サキ先輩の満点スマイルが有無を言わせなかった。
「じゃあ、今度ギター持ってく。あ、気にしないでね、ずいぶん使ってないから」
他のみんなに知れるのがちょっと不安だった。この部活の中で、私が目に見える個性を発揮したことって、ほとんどないから。

ヤケに水瀬と敦史、和真が仲良くなっていた。先ほどすれ違った三人は、元々ほとんど口もきかないくらい仲がいい方ではなかった

のに。
……まあ、どうせあのことか。
つくづく自分の立場は損なんだか得なんだか、と思う。
特別アンテナを張っているわけではないのに、相談を受けたりしているうちに情報が入ってきて、また昔から人の様子がおかしいときなどに人一倍敏感だった。そんなわけで、よっぽどのことか、語られないとわからない事実でない限り、部内のほとんどの事情を掴んでしまっている。
葉山が危険だと桃歌に言ったのは、アイツが一番感情を表にしないからだった。
ポーカーフェイスが得意な上、人を欺くのが好きだ。それでいて何らかの正義を掲げる。
逆に桃歌やサキはわかりやすい。二人ともすぐ顔に出るし、お人好し思考はいつでも正常に動いてやがる。
悶々としながら脱衣所に入ると、葉山がいた。
「おう、隼」
「こんばんは」
元々……人とべたべたするのはあまり好きじゃない。葉山もそうだろう。
しかし、彼はけしかけてきた。
「お前が俺のこと嫌いなのはわかってら。それ前提で聞く。お前は基山についてどう思う」
「マネジとしてはいいんじゃないですか。勤勉で意見も言える。何より嫌われてない」
事実を答えた。葉山が聞きたいのはそういうことじゃないことくらいわかっているが、様子見だ。
「……ビジュアルだけで言ったらあのくらいかわいい子はいくらでもいる。勿論手垢のついていない範囲で。あいつの性格がちょっと変わってるのは、わかる。だが、松岡が基山に執着し、基山が松岡に執着する理由……お前なら、わかるか？」

葉山は、何を推し量ろうとしているのだろうか。そんなことを知ったところで……サキを受け入れることにしか、繋がらない。
愛香先輩を傷つけた人物ということは、彼にとって普通の何倍も憎いのは知っている。何があろうと許しがたく、そして惜しく、虚しく、悔しい。葉山の事情からすれば当然の感情だ。
「元々サキが知りもしない女の子に声をかけたのは、水瀬が彼に提案した、他人の愛情を理解するための『試み』だったんです。しかし、サキは逆に桃歌に惹かれていた。しかも、桃歌は彼に絡みついた複雑な関係を必要な範囲だけ解消するということをやってのけた。……救世主だったんですよ。他人の愛がわからないサキにとって。愛香先輩との関係をどうにもできなかったサキにとって」
静かに聞いていた葉山は、俺が話し終えた後しばらくしてから、笑い声を上げた。
あくまで冷静に彼を見据えると、にやけ顔のまま、手を振った。
「お前はとことんあいつの味方だな。まぁ、俺もとことんあいつの敵だが。――なるほどねぇ。基山は松岡の予想を上回ったという点で一枚上手なワケだ」
独り言のようにそれだけ言うと、タオル片手に浴場に入っていった。

「ストレート！」
「フルハウス」
「ううう……スリーカード」
「ストレート」
「どうしたらそんな強くなるんですかっ！」
すっかり仲も戻った水瀬先輩とサキ先輩、隼先輩、先ほどから一緒にいる孝篤君でトランプをやっていたのだけど……。
「今日初めてポーカーやったにしちゃ上手いじゃん。……っていうか、運か」

水瀬先輩がポーカーやろう！　と言うなり後の三人は遠慮します、と不参加を表明したので、二人でやっている。
しかしどこで覚えたのか彼は必ず強いペアを炸裂させてくる……。
「ポーカーフェイスも何もないから、基山チャンに勝つように引くのは簡単だよ」
笑って言う彼がちょっと憎たらしくて、皮肉のひとつでも言ってやろうとしたとき。
「ア・イ・ス！　買ってきたよー！」
久くんが千種兄弟を引き連れてスキップで広場に入ってきた。
扇風機の取り合いになっていた部員たちはこういうときだけ男臭くうおー、なんて言って久くんに駆け寄る。
なんか……！　久くんの貞操の危機に見えて仕方がないわ！
「何アホなこと考えてんだ」
……一人で妄想してたら隼先輩に頭をぺしっと叩かれました。
「俺、もらってきますよ。桃歌ちゃん、何がいい？」
先立って腰を上げた孝篤君にお願いして、私はトランプの片付けをしている水瀬先輩を手伝った。
「……ねぇ、今気づいたんだけど、基山チャンとサキってまだ付き合ってることにはなってないよね」
「は！？」
ぽわぽわ～として上機嫌だったサキ先輩が驚きの声を上げた。
……そういえば、そう、かも。
と思ってサキ先輩の方を見やると、彼は動揺した様子で目を見開いてキョロキョロしていた。
「……そうだったっけ、桃歌チャン」
「えっと、多分」
そう答えて、今までの経緯を思い出して恥ずかしくなる。
だって……あれだけ、好き好き言い合ってたのに、事実上の恋人でしかなかったと。
「……気付いてなかったのか、二人とも」

隼先輩、気付いてたんなら言ってください……。
呆れるような彼の表情に、私たちも呆れるしかなかった。
「……よし！　そんなら、桃歌チャン。明日の夜、告白するから待っててな」
そのうちにやる気を取り戻した咲哉殿下の謎の意気込みに私は頷くしかなかった。
「あれ？　どうしたんですか、なんか、気合い入れちゃって」
「基山チャンは実は正式にはサキの彼女じゃなかったことが判明したんよ。……孝篤！　チャンスだぞ！」
帰ってきてきょとんとした顔の孝篤君に水瀬先輩が冗談――と信じたい、を言うと、アイスを手渡した孝篤君は、少し考えた後、サキ先輩にこんなことを言った。
「それって俺が桃歌ちゃんを抱き締めてもいいことに」
「ならねぇな」
聞くまでもなく遮ったサキ先輩は、孝篤君の代わりに私を後ろから抱き締めた。
「た、孝篤君、冗談キツいっす……」
サキ先輩が怒ることは目に見えてるってことと、からかわないでほしいってことだったのだけど、彼は真顔で首を振った。
「俺、桃歌ちゃんのこと好きだし」
「俺の方が好きだ」
間髪入れず何故か張り合ったサキ先輩に驚きの表情を向けると、余裕のあるサキヤクンスマイルを向けてきた。
そして――。
「ひゅーう。さっすが松岡クン」
サキ先輩の香りが、ふわりと鼻腔をかすめた。
気付けば鼻先と鼻先がぶつかるほどに近くに、彼のきれいな顔。
いつでも女の子みたいに柔らかいサキ先輩の唇と、私の唇が、重なり合っていた。
「――！」

孝篤君の無言の驚きが、私の驚きを越えていたのを、肌で感じた。
いつもよりも長いそのキスで、私はサキ先輩のこと以外頭から排除されてしまったというのに。
「アイス溶けるぞ」
隼先輩の一言で解放された私は、孝篤君に申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまった。

「ホントに一人で大丈夫か！？」
「子供じゃありませんからっ！　私だって女の子ですから部屋入ったら怒りますからね」
私だって女の子ですから、に水瀬先輩が噴き出したことはスルーしよう。
就寝時間になって、自分の部屋に行こうとしたら、サキ先輩にとことん心配された。
「何かあったら俺らの部屋来い。……くれぐれも寝ぼけた水瀬と琴には気をつけて」
隼先輩の言葉に苦笑する。水瀬先輩は実は寝てなくても寝ぼけたふりとかしそうだし、琴先輩は単純に寝ぼけそう。
「あー懐かしいな～去年俺に抱きついてヤダヤダしてきたっけな～」
「ちょっ！　言うなよ！」
……サキ先輩の目がなければちょっとされてみたいかも……。想像すると琴先輩がすごくかわいく思えた。
「……最近お前、谷垣先輩とか千種兄弟相手におかしいことなってるな」
はい、スミマセン。かわいいもの好きだって気付いてしまったのです。
「添い寝だいかんげ」
「け、結構ですからっ」
サキ先輩は寝相が悪いとは思えないけど、寝起きでぽわぽわモードになられたら私が窒息死しても気が付かなさそうで怖い。……ち

ょっと言いすぎだけど。
まぁ、少しも寂しくないと言ったら嘘になる。だって部屋、結構広いんだもの……。
「それじゃ、おやすみなさい」
「おやすみ」
「モーニングキス待ってるぞ！」
水瀬先輩の冗談にサキ先輩は彼に肘鉄を食らわせた。
「でぇっ」
「あはは……」

……暑い。目が覚めて最初に思ったことはそんなこと。
そして……。
「きゃ、きゃあーー！？」

叫び声と共に部屋を飛び出てきた桃ちーはそのまま扉の真ん前にいた隼の胸にダイブ……。
想像以上のリアクションですなぁ。
隼に抱きつく格好のまま桃ちーはしばらく動かなかった。
表情が見えないって案外怖いな……。
隼は朝は強くないが早起きだから寝起き顔ではない。しかし、桃ちーの尋常でない行動にびっくりしている様子だった。
「うぅ……」
あ、鳴いた。そんな感じのかわいい声を上げて桃ちーはちょっとだけ動いた。
そして、むくっと顔を上げると部屋に戻っていった。

「サキ先輩のバカァ！！」

叩かれた。桃歌チャンに叩かれた。
男同士の喧嘩ほど痛い訳じゃないけど、心が痛い。
「ハイ、スミマセン」
必然的に正座させられて桃歌チャンのお説教を受けた。
「何考えてるんですかっ！　訴えたら犯罪ですよっ」
……かどうかは怪しいです桃歌サン。
「ハイ、反省してマス」
まさかここまで怒るとは思わなかった。
早く起きた隼につられて早起きをしてしまったので、つい出来心で桃歌チャンの布団に入り込んだ。
「こればっかりは誰がやっても変わりませんからねっ」
その言葉で締め括られた彼女のかわいらしい説教の後、俺は言わずもがな部屋を追い出された。
「俺は止めたぞ」
呆れ顔の隼に頷いて、とぼとぼと部屋に戻った。
昨晩夜更かしをしていた水瀬はまだぐっすり眠っていた。

どうしたもんか。完璧に桃歌チャンに無視されてる。
朝食の時間はわざとらしく水瀬とベタついて、俺の目の前にいるのにちらりとも見てくれなかった。
「隼……どうしよ、俺」
「自業自得だ」
こういうときだけ隼はいつも冷たい。……俺が悪いことくらいわかってるけど。
豪華な和食の朝食も何だか胸が苦しいだけだった。
桃歌チャンの笑顔が俺には向けられないことが寂しくて仕方ない。
「謝っても多分今回は桃ちーの気が済むまでだめだろーね～」
「そしてありゃ、かなり怒ってるな」
梢にビンタを食らわしたときしか、彼女が怒っているのは見たことがないが、先ほど説教されたときの桃歌チャンの表情はいつもと

は全く違った。
どうすりゃいいんだ、ホント……。

「あ、水瀬先輩おはようございます」
「ん？　あ～おはよ」
あくびをしながら隣に座った俺に挨拶をしてきた基山チャンは……いつも通りに見えて、恐ろしいくらいに笑顔だった。
ちらっとサキの方を見ると、険しい顔で肩を落としていた。
ケンカしたな……こりゃ。
まぁそんなことはどうだってよかった。どうせ仲直りするんだろうし。それよりも、今はサキをいじる絶好のチャンスなんじゃないだろうか。
「いっつもより夜更かししました？」
「ん～どーだろ。たいしてやることなかったんだけど眠れなくてなァ」
……合コン的な遊びの打ち合わせやってましたなんてこんな子には言えない。
こうゆっくり眺める機会もあまりなかったから、改めて基山チャンの人形のようなかわいらしさを実感する。
「基山チャンいつもポニーテール自分で結ってンの？」
ふとその束を触っても、彼女はぴくりとも驚かなかった。
こりゃ本格的にサキに嫌がらせするために肝が据わってンだな……。
「はい。……あんまり上手くないですよね」
恥ずかしそうに首をかしげた基山チャンは、ポニーテールを自分の手で触った。
「そうでもないっしょ。いっつもカワイイし。結うの隼が上手いぜ。アイツよく妹の髪いじってたらしいから。後で結ってもらったら？」
まぁ俺も後ろは適当にまとめてるが元々長さがないし揃ってない

から綺麗にまとまることはない。
隼は自分の髪型はセットしないくせに妙に上手い。……あと、化粧も。
「そうなんですか！　隼先輩、すごいです」
「妹も弟も俺を頼ってばっかり来るからこんなになっちまったんだよ」
……面倒見がいいのは元からなくせに。
なんだかんだ、以前はアイツ嫌いアイツバカ、アイツウザいだった隼も、基山チャンと会ってから丸くなった。
基山チャンの性格的に、あんまりそういうこと口にすると怒りそうだしな。
そういえば、サキは何で基山チャンとケンカしたんだ。
基山チャンは妙なくらいの笑顔で完璧にサキを無視ってるし、サキは寂しそーな目でずっと基山チャンを見てる。
珍しくサキが基山チャン怒らせたんだろうな。いや、怒らせそうなことはいつも大量にやってるが。
サキはむっつりでぶっ飛んでるけど俺じゃあるまいし過度のセクハラはしないだろう……。
多分そんなにたいしたことじゃないことだったのだろうけど、タイミングが悪かったんだろうな。
昨日だけでも部員同士色々あったし、彼女も何か考えていたのかもしれない。
こういうのもラブラブストーリーの一イベントにすぎないと考えると、彼らが憎らしく思えた。
……ま、しばらくは彼女作らなくても十分糖分は足りるな。

だって、サキ先輩が改めて告白してくれるって言うから、明日一日はちょっとだけサキ先輩に素っ気なくして、彼を魅了してやまない女の子を演出してみようかと思ってたんだもの。

最初に顔を合わせたときにどんな顔をするか。ちょっとだけ元に戻ったときにどんな顔をするか。……嫉妬させたら、どんな顔をするか。

ほんのちょっとだけ意地悪してみようかな、なんて私の小さい希望だった。

サキ先輩を追い出したあと、私はすごく後悔した。

もう怒ってませんよって顔で出ていくのは無理だ……。ちょっとビックリして混乱しただけだったのに。

そこで、魔がさしたのが始まり。こうなったらいっそ、私を好いてくれる部員といちゃついてやる。

あんまり度が過ぎると桃歌さんだって怒りますよって証明してやろう。

「私、三年のほう行きますね！」

いつもは二年か一年についている学年練習で、三年についてみた。

葉山先輩が、は？　って顔をしたあとににやりと笑ったが、見なかったことにした。

大丈夫、大丈夫。いざとなったら朝斗先輩に泣きつくもん。

「桃歌チャン、なんだって今日は俺らンとこ来たの？」

休憩時間、最初すごいびっくりしていた朝斗先輩が案の定聞いてきた。

「葉山先輩には秘密にしてくださいね。……サキ先輩とケンカ中です。だから、朝斗先輩、よろしくお願いします」

ちゃんと念のため葉山先輩には伝わらないように言っておいた。

合宿中だけど、サキ先輩の弱みにつけこむかもしれない。

「えぇー……。俺、正直悠に強制されたら拒否できねぇからな。ちょっとくらいは我慢する覚悟ねぇと……」

心底嫌そうな朝斗先輩に、それは大丈夫です、とウインクしてみせた。

大丈夫。別に先輩たちとちょっと近づいたり普通にぎゅってされ

たりするくらいなら人並み以上の耐性はある。
今朝は水瀬先輩のスキンシップに冷静に対応できたし、やればできるもん。
「じゃ、気ィつけてな。朝斗クンも弟ほどじゃないけど非力だから助けてやれなくても泣くな」
彼らしいブラックジョークを吐いて私のもとを離れていく様子を、葉山先輩は見ていた。

一応の用心だったけど、学年練習が終わるまで葉山先輩は普通に練習に取り組んでいた。
普段あまり担当しない三年生と話すのはちょっと緊張したけど楽しかったし、彼らのダンスも見ていて面白かった。
「お疲れ様です」
午前の練習を終えて、それぞれ食堂に集まった部員に声をかけていく。
ふと梢君と目が合うと、彼は素早く私の近くに歩いてきて囁いた。
「松岡先輩となんかあった？」
「うん。ケンカ中」
さらっと答えた私に、彼は驚いていたけど、そっか、と笑って去った。
お茶を配り終えたあと、私は梢君に頼んで無理やり孝篤君の隣に座った。
「え、桃歌ちゃん」
「お隣失礼するね」
孝篤君の濃い焦げ茶の目を、しっかり見て言うと、彼は一瞬目をそらして笑った。
「いいの？」
「いーの」
ケンカ中だもん。夜まで好きなだけ他の子と仲良くしてやるって決めたし。

そんな調子で、午後は、いつものことだけど久くんといっぱい話して、夕食の時は千種兄弟とさんざんくだらない話をした。
近くにいるのに送られてきたメールには、気づいていない振りをした。

恐る恐る、ノックをした。
そこで私は、やっと目が覚めたように、気がついてしまったのだった。
……サキ先輩を無視するの、辛かった。
彼のどんな顔も愛しくてたまらないけど、自分に向けられる最高の笑顔が一番好きだった。今まではそれを毎日、一日に何度も何度も見ていたから、今日みたいに未だにゼロ、は、出会ってから初めてだった。
私は、バカだ……。
和真君にああ言われたから、大丈夫だと思って他の先輩たちに甘えてみたりした。嫌がられることはなかったけど、みんな驚いて、そしてどこかでしょうがないなって顔をした。
サキ先輩がいないと、私は私じゃないんだ……やっぱり。
そんなことを考えていたから、急に目の前に現れた本人の姿に心底驚いて飛び上がってしまった。
「待ってた」
感情の読み取れない微笑みでサキ先輩は私の手を引いた。
きっと、不安なのだろう。顔に出ていないけど、彼がずっと落ち込んでいたことくらい知ってる。
「汚くてごめん。大体琴のなんだけどさ」
洋服やらタオル、ポーチが散乱した床を、何か踏まないように足を進める。
確かに置かれたバッグの一つから流れ出てる……。
「ん、その辺座って」
さっき片付けましたっていう感じのスペースを指して、彼もまた

腰を下ろした。
「桃歌チャン、今朝はごめん。調子に乗りすぎました。でも変な気はなかったことは約束する。本当に、ごめんなさい」
さっきまであんな調子だったのに、サキ先輩は明るい声色で述べた。
そして、畳に頭をつけた。
「私――」
いつもは届くことのない頭にそっと触れて、撫でてみる。
「最初から、怒ってません」
顔を上げたサキ先輩は、安心したように笑んだ。
「本当に？　よかった……」
久々に思えるサキ先輩の笑顔に、不覚にもきゅんとした。
そして、少しの間のあと、彼が私の手をとった。
「桃歌チャン。俺は桃歌チャンが好きだ。今日、痛いほどわかった。キミが俺と目を合わせてくれないだけで、寂しいし、悔しいし、辛い。キミが他の男だけと話してるだけで、嫉妬よりも、悲しかった。俺には桃歌チャンしかいない。――付き合って、ください」
蛍光灯の明かりを受けて、透明に光る茶色の瞳。赤い頬は、彼らしくなくって。
少し震えた声と唇は、私の胸をぎゅっと締め付けた。
私はそのまっすぐな目をすぐに見ていられなくなって、下に逸らした。
答えは決まってる。のに、この張りつめた甘い空気に、ついていけていなかった。
彼が私の手を握り直したのをきっかけに、私はそれにもう片方の手を添えた。
「……はい」
目も見られないまま頷いて、そのまま顔が上げられなかった。
サキ先輩がどんな顔をしているか想像するだけで、私が泣いてしまいそうだったから。

優しい笑い声を漏らした彼は、そっと手を離して、また肩に手を回した。そして、うつむいたままの私の頭を撫でると、そのまま頭を抱いて引き寄せた。
……花の香り。サキ先輩の、香り。
胸の暖かさの中で、彼の鼓動の音を聴いた。私と同じくらいに早く鳴るその音にすごく安心した。
「ごめんなさい。意地悪して……」
「え？」
少し身体を離して見上げたサキ先輩は、きょとんとした顔をしていた。
「ぜんぶ、意地悪でした。今日のこと」
間の抜けたサキ先輩の声がちょっとおかしかったけど、私は彼に申し訳ない気持ちでいっぱいだったから、気になんてできなかった。
「……いいよ。何にもなかったんだし」
辛かったって言ったのに、それでも彼は私のことを案じてくれた。それが嬉しくて、またお詫びの気持ちもこめて、自分からサキ先輩の首に腕を回して抱きついた。
……やっと、同じ高さで、抱き合えた。

「もしもし、秋穂？」
「……敦史」
「うん。敦史だよ。……秋穂に、言いたいことがあって」
「……」
「ごめん」
「……なんで？」
「ごめん、な。俺、全然秋穂以外の女の子のこと、考えてない。考えられない」
「なんで、急にそんなこと言うの……？」
「俺、秋穂のことが好きだから」

「うそ……」
「嘘じゃないよ。だってな、どんなに自分が変わっても、他人に好かれても、秋穂とこうして話せないだけで、この数ヶ月、辛かった。……自業自得、なんだけどな」
「違う、違うよっ！　私が、悪いの……。本当に、ごめんね」
「秋穂は何にも悪くないさ。――それで、さ、あの、秋穂は俺のこと」
「大好きだよっ！　好きすぎて……怖くて。でも、いいの？」
「いいの。今までもこれからも、俺にとっては秋穂しかいない」
「あ、つし……」
「急にごめんな。今、合宿中だから。帰ったらゆっくり話そう。それじゃ、おやすみ」
「ううん、ありがとう……。おやすみ」

「一回通しでやってからチェックアウトな。うし、頑張るぞ！」
葉山先輩の無茶に、げって顔の人と、単純に楽しそうな顔の人とがいて私は思わず噴き出しそうになった。
「何、変顔してんの」
それを見ていたらしい水瀬先輩に、思いっきりバカにされたように笑われたからちょっとムッときた。
「してませんよっ！」
「ま、見てて面白いのはいつも、かな～」
反論を軽くスルーして水瀬先輩お得意のウインクをしてみせた。
ハート飛んでましたね、今。
「話してねぇで行くぞ」
「はいはい」
ムッとした顔の隼先輩に引っ張られて水瀬先輩もあっちへ行ってしまった。
一番最初は、三年全員のダンスから始まる。

ほとんどのダンスは振り付けをしたのはおとといだから、まだ全然踊れていない人もいたが、振り付けを考えたであろう葉山先輩はほぼ完璧だった。
そして、一年。
ダンスについて並々ならぬ根性を持っている和真君はさすがにすごかった。梢君はあとの二人をフォローして、なかなか彼らしい踊りをしていた。
二年の四人は、やっぱり人を魅了するカリスマ性がすごかった。
サキ先輩は信じられないくらい完璧で、さすが……としか言いようがない。
最後は、学年からの選抜メンバー。
葉山先輩、サキ先輩、和真君の三人で、このダンスは前から練習していたけど、ここ数日で磨きがかかったように思える。
……でも和真君、ちっちゃいな。
比較的背の高い二人に比べて、自称絶賛成長期な和真君はちょっと背が低かった。
でもそれをあまり気にせず生かせるように頑張っている和真君は好きだった。

「無茶言うよね……葉山先輩も」
「サキは完璧だったけどね」
本当にお前が言うか、っていうくらいサキ先輩はすごかった。
「あー！　海楽しみなのに！　悔しくなってきちまった！」
「まぁまぁ、帰ってからみっちり、ですよ」
それよりも私はこのあとが心配で仕方ないですってば……。
水着。どうしよう。凪咲さんと選んだのは、気に入ってるんだけど、十ウン人の男の前で披露するのは大分勇気がいる。
誰かが気を遣ってくれないかなー……なんて。
ふと顔を上げると隼先輩とばっちり目が合った。いつもの睨み顔……って言ったら怒られるな、で見据えられて、悪いことしてない

けどちょっとドキッとした。
「なに辛気臭ェ顔してンだ。……不安か？」
からかいをかけて、そのあとに心配してくれる。彼流の優しさだった。
おずおずと頷くと、ふっと笑いかけてくれた。
「いいんだよ、お前はそのままで。それに、いちいち色んなことに不安になってたら疲れるだろ」
そう言って頭を一回撫でてくれた。
「はい……頑張ります！」
無駄に気合いを入れた私を、彼は優しく笑って見守ってくれた。

「やっべー混んでんな～！」
「でも！　海っスよ！　海！」
宿舎から歩いて数十分。あそこからも見えていた青い海が目の前にあった。
やっぱりぴょんぴょん跳ねてる和真君は部内一子供っぽかった。
私は既に服の下に着た水着に気をとられてなんだかもう訳がわからなかった……。
「桃歌チャン、とりあえずあっち行こうよ」
ガチガチで動こうとしない私の手をとって、サキ先輩が海へと向かう。
「は、はい……」
視線を前に向けると、先ほどの二人がいつの間にか海パン一丁になっていて私は激しく驚いた。
「わっ……」
一日目に和真君の上半身を見てしまったことを思い出して赤面する。
他の運動部と違ってうちの部員はあんまりその辺で脱がないし、全然耐性がない。
「はは、二人とも早ぇな」

笑ってるサキ先輩を見ていれば、かろうじて平静を保てたが、ちょっとばかり私には刺激が強いです……。
「荷物まとめとかなきゃなんねぇから、早く脱げ」
サキ先輩に言ったのに隼先輩の言葉に私はもう沸騰からの蒸発してしまいそうになった。
そして何の気なしに脱ぎ始めていたサキ先輩を見て、私はとっさに距離をとった。
至近距離で見たら死ぬ……！
何故かそう思って隼先輩の近くまで後ずさった。
「何してんだ、お前……」
「へ、えっと、防衛準備ですか！？」
疑問形で答えた私に呆れた顔で笑い、軽く前を指差した。
「ほら」
「え？　……っ」
脱ぎ終え、服を持ってこちらに近づいてくるサキ先輩。思わず逃げようとしたら、隼先輩に肩を掴まれていた……。
「わーっ！」
とにかく目をぎゅっと閉じた私の頬に、誰かの手が触れた。
目を開けると、サキ先輩で……。
「どうしたの？」
「え、と、あの、その」
男の人の海パン一丁なんて、間近じゃ見られません！　……なんて言わせない無言の圧力という名の心配そうな眼差しを向けていたから、私はどもってしまった。
「こいつ、男に慣れてねぇから」
やっと助け船を出してくれた隼先輩の言葉を全力で肯定する。
今はサキ先輩の顔しか見えないので大丈夫です、多分……。
「……嫌？」
少し考えたあと、彼が問うたのはそんなことだった。
「嫌、と言いますか……。えっと、恥ずかしい、です」

水泳の授業とか、ちょっとした着替えとかは、遠くだったから、まだよかったのだけど、こうも近くだと意識してしまって恥ずかしい。
「そっか。……でも、俺も恥ずかしい。桃歌チャンに見られて。自慢できるほどいい身体してないから」
「そんなこと……」
あるかどうか、わからなかった。見て、いないから。
微笑んだサキ先輩から少し離れて、彼の身体を見る。……見つめる。
「そんなこと、ない、ですよ。……かっこいいです」
恥ずかしくて顔は見られなかったけど、素直に伝えた。
ムキムキじゃないけど、適度に見えている筋肉は、綺麗で、そんなところまでサキ先輩だった。
「はい。大丈夫になったところで、チビもどうぞ」
「えっ」
またもや冷静に隼先輩が突っ込んできて、私は声を上げてしまった。
サキ先輩の服を持って、両手を出して脱げと言っている。
「見たいな、桃歌チャンの水着」
「……はいぃ」
サキ先輩の１００％スマイルには勝てませんって。
振り向いた先に誰もいないことを確認して、後ろを向く。
だって……水着を着ているとはいえ、脱いでいるのを見られるのは、恥ずかしい。
指先が震えて、上手くファスナーすら下ろせない。
なんとか脱ぎ終えて、服を胸に抱えて、私はそっと振り返った。
「……」
なんだか二人ともなんとも言えない顔をしていたから、不安になって、服を握りしめた。
「変でした……？」

ビキニじゃないけど、初めてお腹の出る水着を着た。
全然セクシーさのない私に似合うかどうか、自分では全然わからなかったのだけど……。
「かわいいよ。……さすが、凪咲姉さん」
サキ先輩がものすごい笑顔になってくれたから、私も笑うことができた。
「うん、似合ってるな」
隼先輩まで褒めてくれてちょっと浮かれ始めた私は、服を隼先輩に渡して、サキ先輩に寄り添った。
「えへへ……海でイチャイチャしたら、本当に恋人って感じですよね」
サキ先輩が驚いた顔をしていたけれど、私は満面の笑みで返した。
昨日できなかったから、ここで。サキ先輩は、私のものだもん。

「うぇ、桃ちー、かわい……」
琴先輩が顔を赤らめて、でもじっくり見てくるから、私は素早く反復横跳びをして視線をまいた。
「せっかくかわいいのにその動きは何よ、面白いな」
「あ、あんまり見ないでください！」
水瀬先輩も笑いながらじろーっと見てるから、私は動きを止めることができなかった。
でも、程なくして疲れて、肩で息をしていると、久くんがやってきた。
「桃ちゃん！　海入ろうよ！」
「久くん！　はーい！」
テンションが上がってきている私は、彼に手を引かれてスキップで海に入った。
「冷たくて気持ちいいですねっ」
「うんうん！」
ついつい久くんとはしゃいで、水をかけ合って遊んでいたら、後

でサキ先輩にちょっと嫉妬された。
砂の城を作ったり、みんなで和真くんを埋めたり、砂浜で踊ってもらったり、たくさん楽しんだ。
もちろん、女の子の視線を浴びまくってるサキ先輩にくっつくことも忘れなかった。
もう、私を嫉妬させても、気がつかないんですから。
「チビの着替えは……これか。ほい」
事前にまとめておいた下着類を受け取って、シャワーを浴びに行く。泳いではいないけど、すっかり砂砂になってしまった。
「楽しかったですねぇ」
自然とスキップになってしまう私は、隣を歩く水瀬先輩に鼻で笑われた。
「サキもだけど、基山チャンもしっかり視線浴びてたぞ。サキの顔がいちいち険しくて冷や冷やしたわ」
「え～？　嘘ですよ～」
私なんかが、ねぇ。ちょっと変な行動してたから目立ってただけだろう。
「ホント。基山チャン白いし、いちいちかわいいしな」
「そんなことないですもん！」
肌が白いなんて自分で思ったこと、一度もない。黒い方じゃないとは思うけど、言うほど白くはないと思う。
「ホーンート。認めないからみんな苦労するんだぜ？」
「自分をかわいいって思ってるかわいい子なんていますかっ？」
ヤケになって反論すると、水瀬先輩は笑いながらウインクをした。
「自分をかっこいいって思ってるかっこいいやつならここにいるぜ？」
……確かにいちいちかっこよすぎるから困りものです。
「……水瀬先輩はかっこいいですね」
「でしょー」
ふざけたそのノリが好きだった。

どこまで本気かわからないけど、いつだって色々励ましてくれるから。
「でも確かに、サキ先輩みたいに自分がかっこよすぎるのわかってない人がたくさんいたら、困っちゃいます」
「だろー。だからたまには基山チャンも……っておいおい」
そっと彼の左腕に頬を寄せた。いつもからかわれてるお返し。
すっごい複雑な顔をしている水瀬先輩に笑顔を向けてやった。
サキ先輩の心配なら、大丈夫ですよ、と。

「ぐっすりだねぇ」
松岡先輩と桃ちゃんが、二人とも目を閉じて寄りかかってる。
身長差がちょうどいいくらいにあるから、いい具合につりあって、どちらも倒れずにいた。
「こう見ると、兄妹みたいですね」
どちらかというと二人とも妹、弟キャラだけど。
綺麗な寝顔を惜しみなくさらけ出している二人を、水瀬先輩はふざけて写真に撮っていた。
「まぁ、みんな疲れたんでしょうね。俺も、眠いや」
眠っている久先輩や和真、敦史を見渡してから、あくびをして腕を伸ばした。
「まだ何時間もあるし、どうせ隼が起きてるから、寝ていいぞ～」
「それじゃ、お言葉に甘えて」
閉じた瞼の裏に、桃ちゃんの笑顔が浮かんで、必死にそれを振り払った。
彼女に届くことは、もうない。

「桃歌チャンのカバン、これでいいんだよな」
「大丈夫だ」

バスが学校に到着しても起きない桃歌を、サキが背負って、駅まで向かっている。
バスから下ろすときに抱き上げたが、身長が低く小柄だといっても、軽すぎると思った。
……いつもの昼食、少し遠慮しているんじゃないかと、心配する自分がいた。
女の子なんて、そんなものだ。きっと、そう言い訳して何も感じないようにしてきた。
しかし、桃歌は……どんな出来事があっても、人間として惹かれるようになる。
彼女の存在があってまで、気になる人ができたとき……だろうな。
俺たちにその時期を教えてくれるのが、彼女なのかもしれない。
「……ん」
目を覚ました桃歌と、一番に目があった。
こんな少しと言わず、そういう意味で汚くしてきた部員に、革命をもたらした女神。
そう、彼女はそうだ。

「おはよ。こんな朝早く、よく起きれたね」
「起きれますよ！　子供じゃあるまいし」
そう、今日は待ちに待った文化祭、一日目……！
合宿後も猛練習をし、衣装を考えたり、パンフレットなんかを作ったりした。
たくさん時間をかけてきて、一年生は初めての舞台だ。
もちろん、私にとっても。
「基山チャンがあんまり力入れんなよ。俺らが緊張しちまう」
「そう……ですよね！」
ガッツポーズをなぜかしてしまう自分を心の中で殴りながら、水

瀬先輩と共に学校へ向かった。
普段なら絶対に生徒の歩いていない時間帯だが、朝練のある部活や団体、クラスも多いのだろう。生徒らしき人をちらほらと見かけた。
「つーか、基山チャン、思ってた以上にそれ、カワイイね。みんな驚くぜ」
「えへへ……ありがとうございます」
実は、今日の服装は、水瀬先輩に選んでもらったのだった。
合宿前に誘われていた買い物に、なんだかんだ色々あって連れて行かれて、『文化祭マネジスタイル』というテーマでコーディネートしてくれた。
「まー、さっすが俺ってとこかな～」
水瀬先輩は顎をくいっと上げて、表情を決めた。
こんなこと言うのって、彼くらいなものだから、正直面白い。
「ですねー」
「……棒読みが心に痛いぜ」
めったにこういう返答をしないからか、水瀬先輩は予想以上に肩を落としてへこんでいたので、ついついにやけてしまった。
「それにしても、プロフィールブック見た？　みんな写真めっちゃよく撮れてんの。基山チャンかわいいぜ～」
「ちらっとしか見てないんですけど……そ、そうなんですかぁ」
文化祭限定グッズ、カラー写真プロフィールブック。
なんと２００円で、部員総勢十八人のカラー写真と綿密プロフィールを掲載！
……という、一部の人にはおいしいであろう冊子である。
なぜかマネジである私や久くん、草野先輩も載せられた。
言い出しっぺは千種兄弟で、大体は朝斗先輩が作ったらしい。
「教室で撮ったとは思えないクオリティー。朝斗先輩ってカメラ上手いんねー」
「ですねー。なんだか意外」

いつもみたいに他愛もない話をしながらの登校。
でも、確かに空気は、行事！　って感じだった。
うきうきとドキドキの混ざりあった不思議な感じの中で、それでもなんだか心地いい。
水瀬先輩にあんまりバカにされないように、うきうきをちょっと隠して歩くけど、鼻歌がこぼれてしまう。
笑い声を漏らした水瀬先輩を見上げると、彼は普通の笑顔を浮かべていた。……貼り付けていない、自然な笑顔。
「ふふ」
「なんだ？」
最初に会ったときよりも、ずいぶん変わってしまったな。それは、もちろん、私も、彼も。
含み笑いをした私にきょとんとした顔を向けた彼に、私は再度笑いかけた。
「なーんでもないですよっ」
月日の流れは、たくさんの物事を変える。

「桃ちゃんにターッチ！」
自転車で通りすぎて行った久くんが、ちょうど私の頭をぽんと叩いて行った。
「あはは、おはようございます！」
軽やかに自転車を下りて、私たちを振り返った久くんは、満足げに笑った。
「おっはよ。ミナも」
「おはようございますー」
校門前でゲートの準備をしている女の子たちの歓声に応えながら、久くんは足早に自転車を駐輪場に停めに行った。
「きゃー！　こっちは水瀬くんと桃歌ちゃん！」
なぜか私までセットで注目を浴びてしまって、投げキッスなんてしてる水瀬先輩の横で苦笑いをするしかなかった。

小走りで駐輪場から出てきた久くんと共に、校舎に入る。
他の団体と相談して、朝練では、体育館は使えなかったが、そこそこに広い中庭を使うことになった。
「おはようございます！」
既に来てストレッチをしていた和真君や先輩に挨拶をする。
「ん、おはよー」
早く来てもボーッとしている先輩もいる中、和真君は真面目にストレッチをしている。
さすがだなぁ……と思ってその様子を見ていたら、ふと顔を上げたときに目が合ってしまって、彼はふいっと顔を背けた。
……もう、いつも通りなんだから。
「桃歌チャン、おはよう」
背後からしたのはサキ先輩の声で、私はぱっと振り返った。
「サキ先輩！　おはようございます」
ついつい笑顔になる。朝練のうちはいつもと変わらないジャージだけど、あの衣装を着た彼を思い出すと、今からわくわくした。
「わ、桃歌チャン、すごいカワイイ。それ、水瀬が？」
ちょっとだけ照れたように笑って言ってくれたサキ先輩が嬉しくて、私は笑みを漏らした。
「ありがとうございます。そうなんです」
「さすが俺だろ？」
サキ先輩は、胸を張った水瀬先輩をちらっと見て、それから私に視線を戻して数秒考えた。
「……まぁ、桃歌チャンは元からカワイイからな」
悔しいのか、少し口を尖らせて言うサキ先輩がおかしかった。
「あ、先輩たちもおはようございます」
「おはよう」
「おっはよ～」
サキ先輩について出てきた隼先輩と琴先輩。
隼先輩は今日もお弁当を作ってくれたのでさすがに大荷物で、琴

先輩が一部を持っていた。
「チビ、アレ、どうする？」
「あ、えっと、朝練の後ででいいです」
そう、私からの――私と隼先輩からのサプライズがあるのだ。と言っても、彼には手伝ってもらっちゃったっていう意味なんだけど。
「了解」
そう言って荷物を置きに行った。
見ると、既に朝練の始まる時間になろうとしていたので、私も荷物を手頃な場所に置いて、準備を始めた。

「わ、お揃いかぁ。粋なことすんねぇ」
「えへ、そうなんです」
紙袋をそれぞれ覗いて、それぞれの反応をする。
私からのサプライズ。それは、お揃いのチェックのアクセサリー。
元々、本番じゃないときの出歩いている格好を考えていて、みんなで目印となるようなものをつけたら面白いんじゃないかと思ったのが始まりだった。
サキ先輩にはネクタイ、水瀬先輩には腰布、千種兄弟にはバンダナ、といったように、それぞれ似合いそうなものをチョイスした。
「今日の服装に合わなかったらとも思ったが……大丈夫そうだな」
ジャージから着替えを済ませた部員は、さっそくつけてくれる。
にやにやしながら見ていたら、隼先輩に手招きされた。
「急いでなければ、髪セットしようか？」
「えっ、い、いいんですかっ！？」
本当にお母さん……お、お父さんのような笑顔で、彼は頷いた。
不覚にも、そのいつもとのギャップ満載な表情にドキドキしてしまったり。
「はい、じゃ座れ。一回ほどくぞ」
そのあとは、隼先輩になされるがまま。
数人の部員ににやけ顔で見られているのが恥ずかしかったけど、

私は我慢した。
彼の手つきはすごく丁寧で、すごく……そう、言葉で言うならプロみたいだった。
結んでくれたのは最初と同じポニーテールだけど、絶妙にまとめてくれて、私も心が踊った。
「はい、終わり」
最後に、部員お揃いのチェックのリボンをつけてくれた。
「わぁ、ありがとうございます！」
お礼を言うと、隼先輩は目を細めて笑った。
なんだか、今日はご機嫌だな。
「もうすぐ点呼だから行った方がいいんじゃねーの」
「うん！」
同じクラスの和真君と、クラスの集合場所へ向かった。
初めての文化祭、始まります。

朝一はクラスの受付、なんだけども……。
縁日をやっている私のクラス、まーたっく人が来ない。
朝から暇な生徒がふざけてちらほら来る程度。
「なぁんかしけてんね」
せっかく甚平を着た和真君がいるっていうのに、女の子の一人も来ないとは……。
「そうだ！　和真君、宣伝行こうよ！」
きっと連れて歩けば何人か釣れる！
「え、まぁいいけど……。ちょっ」
遠慮がちな彼の手をとって歩き出した。まずは人のいる階段付近！
「1C縁日やってます！　楽しいですよっ」
精一杯の大声をかけると、何人かが振り返って、私たちに注目する。
「すぐそこでやってますんで、来ませんか？」
積極的に女の子に話しかける和真君だったが、ことごとく振られ

まくっていた。
甚平和真君かわいいのに……っ！
「基山ぁ、やっぱ無理だって……」
「いやいや！　きっといけるって！」
早くもへばり始めた和真君をなだめて、私は切り札を一枚引いた。
「この子、男子ヒップホップ部の一年エースなんですよ！　彼のこんな格好見られるのは今だけですよっ！」
和真君が驚き半分、呆れ半分、あと照れを少しで私を見た。
しかし、これに反応した人は少しいて……。
「えっ！　ここのヒップホップ部ってかっこいい人いっぱいいるんですよね！？　わぁ、すごーい！」
そ、そんな有名なものだとは知らなかった……。けど、和真君を好奇の目で見る女の子が増えた。
今がチャンスだっ！
「和真君、ほら」
半分放心していた彼を小突いて、宣伝させる。
今まで食いつかなかった女の子たちが食いつくようになって、多分これでちょっとはお客さんも増えたはず。
「やったね！」
「あぁ、うん……」
なんだか微妙な表情で和真君は頷いた。
引き続き宣伝をして、なんとか担当時間中の暇を潰したのだった。
「和真君、甚平似合ってるのに、惜しいなぁ」
脱いでしまおうとしている彼にそう言うと、和真君は動きを止めて着直した。
「……」
あの仏頂面で数秒固まったと思うと、ふいと顔を背けて言った。
「……写真でも、撮れば」
頬を赤く染めて、ちょっと照れたような和真君に、思わず笑みがこぼれた。

「いいのっ？」
頷いて、顔をこちらに戻してくれる。でも、仏頂面じゃなぁ。
「和真君、笑って笑って」
「んなこと言われたって」
より一層眉を寄せて困った彼に、私はあることを思いついた。
「あのね、サキ先輩が和真君のダンス褒めてたよっ」
「え、マジ？」
その笑った瞬間を撮った。
嬉しそうな顔をする和真君が一番素敵だ。
「本当。……じゃ、ありがとう！」
自分で撮った写真を見てにやける。
こりゃあ、一年後にプレミアつくぞぉ……。

「ねえ君、一人で回ってんの？」
「えっ？」
時間が少し空いていたからサキ先輩に会いに行こうと、のんびり歩いていたら、知らない男の子二人に声をかけられた。
「アイスおごるから一緒に回らない？」
「えっと、あの……」
アイスは食べたい、けど今からサキ先輩と一緒に行きたいなぁ……。
二人の笑顔に気圧されて、断れなくてあたふたしていると、すっと肩を抱かれた。
「なーに桃歌、ナンパされてんの。コイツは俺の彼女だから、残念でした」
「なんだ、そうなのかー。じゃあねー」
去って行った二人の背中を見送る間、私は硬直したままだった。
だって……。
「葉山クンえらーい。目の敵の彼女助けてあげちゃった。……ま、つまんねぇ男につまんねぇことされても面白くないわなぁ」

まだ肩を抱いて、いや、さっきよりも密着してくるのは、葉山先輩だったんだもの……。
「は、葉山先輩、離してください」
と言うよりか、離れてください。
きつく拘束されているわけじゃないけど、彼独特の威圧感が私を抵抗させてくれなかった。
「お礼はないわけ？　も・も・か」
そう言って顔を近づけてきたから、私は思わず顔を背けた。
「ひっでぇ。この葉山クンが言ってンのにそんな嫌な顔するとはね。一難去ってまた一難……とか嫌でしょ？」
意味深にそんなことを言いながら腕を回してきたので、私はやっと強引に彼の身体から離れた。
「あ、ありがとうございますっ」
慌てておじぎをすると、葉山先輩はうすら笑いのまま頷いた。
「それが一番最初。礼儀のない子は好きじゃないねぇ」
「す、すみません……」
でも、葉山先輩があんなことしてきたから……なんて言えなかった。
サキ先輩と同じくらいの身長だけど、上からの圧力は彼の方が数十倍もあった。
「それより、ナンパされ慣れてないだろ」
「そ、そりゃあ、そうですよぉ」
元々ナンパされるほど魅力的じゃありませんし……。
そう思って縮こまると、葉山先輩が笑った。
「お前もそろそろ自覚しろ。世間一般の目を引く容貌をしてる。ちょっとでも着飾ったら簡単に目つけられるぞ」
「はぁ……」
でも、ナンパされたのなんてこれが初めてですもん。
そもそも、手頃だったから声をかけられたような雰囲気だったし。
「ナンパの回避方法教えてやるから」

真面目な顔で先輩が教えてくれたのは、簡単な会話だった。
「先輩、そんなのどこで……」
「付き合った女がナンパされてンの見てたら覚えるよ」
さっすが……という感嘆の溜め息を漏らすしかなかった。
しかし、葉山先輩はすぐに怪しい笑みを取り戻して、手を振って去っていった。
……あーあ、ナンパされたってサキ先輩にバレたら大変だなぁ。

余裕があったら桃歌チャンが来ると言っていたけど、なかなか来ない。
更衣室兼待機室は、今はダンス部も着替えていないし、ヒップホップ部の溜まり場になっていた。
「俺直接会いに行ってくる」
ちょっと心配になった俺は、部屋を出て彼女のクラスの教室まで向かった。
大分人も増えてきたなぁ。生徒以外の学生らしき人もたくさんいる。
みんなこちらを振り返ったりしてくるけど、あんまり気にしない。
……一応、慣れてるから。
「あ、あのっ」
そう思っていた矢先に、女の子三人組に引き留められた。
「はい？」
「あの、もしよかったら、お話しませんか……っ？」
緊張した様子の彼女に、営業スマイルを投げかける。
「ごめんなさい。彼女と待ち合わせしてるんです。……でも」
咄嗟にポケットから紙切れを取り出して渡す。桃歌チャンが作ってくれたヒップホップ部のチラシだ。
「僕も出るんです。この後なんで、よかったら来てください」
「……はいっ！」
よし！　宣伝成功♪

今は桃歌チャンに会いたいから、サービスはあんまりしてる余裕がない。
ナンパされたりしてないかなぁ……。今日の彼女、すごいカワイイし。

「あれっサキ先輩」
待機室に向かって歩いていたら、向こうからサキ先輩が歩いて来るのが見えて、声をかけたら……。
「桃歌チャン！」
全力ダッシュで向かってきたから、危うく避けそうになったが、我慢して立っていたら思い切り抱きつかれた。
そのあまりにも大きい勢いに後ろに倒れそうになると、しっかり抱きとめてくれた。
「わわっ、なんですか……っ？」
この辺りは出し物に使われていない教室ばかりで人がほとんど通らないからいいものの、人前でいきなり抱きつかれたら正直困る。
頭の後ろに手を回して、胸にくっつける格好でしばらく彼は離してくれなかった。
「ごめん、ちょっと心配で」
そう言って身体を離して、私を見下ろしへな、と笑った。
「大丈夫ですよ！　校内なんだし……」
ナンパと葉山先輩のことは黙っておこう。サキ先輩は本気だ……。
「生徒が一番怖いだろ」
真顔でそんなことを言うから怖くなっちゃいますって。
でもやっぱり心配しすぎな気が……。
「先輩っ。アイス食べに行きましょう！」
さほど動いていないけど、まだ気温の高い九月、先ほど話題に出たこともあってアイスが食べたかった。
「うん」
頷いた彼の右手をとって引いた。

思えば、私も大胆になれるようになったなぁ。
サキ先輩と話すだけでも大変だったのに、こうするのも自分からできるようになった。
進歩……なんだろうか。

「失礼しまー……わっ」
慎重に開けて何かやばかったら閉めようと思ったら、向こうから勢いよく開けられた。
「あ、桃歌チャン、ごめん」
また見てしまった……部員の、上半身。
何でもないように、とりあえず謝ったという感じの敦史君は、そのままどこかへ行ってしまった。
あの格好で歩いてて大丈夫なのかな……。
「桃ちー、なんか用かー？　みんな着替えるからできればお早めにどーぞ」
ひょこっと顔を出した琴先輩に、ぽかんとしていた私は現実に戻された。
「あ、えっと、セッティングに行くんですけど、何かあったら私に連絡するように伝えておいてください。お願いします」
「了解！」
これからヒップホップ部の第一回公演。
私たちマネージャーは受付でしか表に出ないけど、とにかく何かないか心配になる。
音響や照明はほとんど実行委員がやってくれるので、私たちは衣装チェンジの手伝いや委員の人への指示だしをする。
練習でも、誰も転んだり倒れたりみたいな危ういことはしたことはないが、やっぱり不安になる。
……でも、みんなを信じるしかないよね。
誰もいないのをいいことに一人ガッツポーズをとった私は、スキップで体育館に向かった。

「はい！　ありがとうございまーす」
……どうしよう、プロフィールブックが売れてる。
女の子はほとんど漏れなく買って行くし、男の子も何故か買ってる人がいる。
「わぁ！　久くん！　握手してー！」
握手やらせがまれる久くんはちゃーんと笑顔で握手して、サービス精神旺盛だ。
っていうか、久くんを知ってる人多くないですか。
私は実のところ部員と紗奈以外にあんまり話す同級生がいないから、そういう事情に詳しくないのだけど、生徒は学年問わず、また校外の人もたくさん久くんに話しかけていた。
「あ、さっきの」
先ほどナンパしてきた男の子が、受付を流れてきた。
「さっきの、君の彼氏なんて名前？　かっこいいなと思って」
「は、葉山　悠輔です。あの……」
彼氏じゃないんです、けど……。
礼を言って中に入っちゃったから、説明する余裕がなかった。
「桃ちゃん、なんかあったの」
「えぇ、まぁ……」
葉山先輩の彼女だと勘違いされると色々面倒なんですってば……。
これがサキ先輩に伝わっちゃったら……ううう、めんどくさい。
それにしても、なんでヒップホップ部だってわかっちゃったんだろう？
と思って、ふと久くんを見て気づいた。
バンダナ……。そっか、葉山先輩もしてたっけ。
部員もあちこちうろついてたはずだし、それなりに話題になってるかもしれない。
効果、ありかな？
「そろそろ始めるから、しばらく頼む」

「はい！」
途中入場はご自由に、という感じで、受付は通さないことになっているが、二人は開演の準備に行って、私は開演まで受付担当。
どきどきして震える手を握りしめて、気合いを入れた。
上手く行きますように！

ステージの上に人影が踊る。
先輩たちの配慮で、私はよく見える位置で、音響の手伝いをしていた。と言っても、ほとんどやることはないから、ステージに見とれている。
余裕の表情の葉山先輩。彼の荒々しくも繊細な動きは、男らしくてすごくかっこいい。朝斗先輩の部内一番の爽やかさも好きだ。
三年生の出番が終わって、一年生に変わる。　退場のときには、たくさんの歓声。名前の掛け声や、黄色い泣き声。　そして、一年生は初舞台だから、客席は沈黙。しかし――。
すぐに、ざわついた。
和真君が、動き始めた。帽子を深くかぶって、顔を見せずにステップを踏む。しばらく一人で踊った後、帽子を脱いで脇に投げた。
そして和真君が顔をあげたとき、黄色い歓声が起こった。
なかなかいい感じかも。和真君のダンスはかっこいいもの。
四人が一斉に踊り出して、お客さんが沸き上がった。
よかった、孝篤君もちょっと余裕を持ってる。
目立ったミスもなく終わった一年生に、暖かい拍手が起こった。
そして、ほとんどの人が予期している、次の舞台に、ざわめく会場。シルエットが現れただけで、歓声が沸いた。
それぞれの名前を叫ぶ声が様々なところから聞こえてくる。
ドキドキする……。人を興奮させるこの、予感。それだけの溢れ出るオーラがある四人。
やっぱり、練習ともリハーサルとも違う。照明や衣装、音響……
そして、お客さん。

それでも、四人はいつもよりもずっと素敵に見えたから、すごい。
あっという間に、最後の組。
葉山先輩、サキ先輩、和真君の三人が並び、また歓声が沸き起こる。
特に上手い三人のダンスは、それぞれの個性がすごく出ていた。
サキ先輩は完璧で抜け目がなくて、丁寧な動き。和真君は自分を魅せるのがすごく上手い。普段から想像もできないくらい表情も豊かだった。
その違いがスパイスになるくらい、三人は舞台を作るのが上手だった。
見とれているお客さんを見て、安心する。
……やっぱり、このために私はいるんだもんね。
客席の熱気は、みんなに届いたかな。

「ありがとうございました！」
先に袖に下がっていた部員の一部と共に、受付に戻って、アンケート回収。
……実は、軽い人気投票も入っていたりする。
「ありがとうございましたっ！」
「キャー！　咲哉君ー！」
急いで出てきたサキ先輩に、周りの女の子たちが沸き上がった。
困った顔で私をちらっと見た後、彼女たちに笑みを向ける。
サービススマイルくらい見分けられますから、安心してくださーい。
そんな風にちょっとだけ胸を張りながら私も私で笑顔を振り撒いていると、急に肩を叩かれた。
「……梓！」
驚いて振り返ると、そこには中学時代の友達がいた。
クラシックギター部の……ね。
「桃歌、久しぶり。ビックリしたなー、こんなイケメン揃いの中で

あんたがやっていけるのね」
文化祭について、メールで聞かれていて、来るとは言われたけど……。実はさっぱり忘れていた。
「う、うん。なんとか」
手は動かしつつ、彼女の返事をする。
「ふーん……。っていうか、彼氏って誰なの？」
「え、ええ！？」
い、いついるって言いましたっけ！？
そんな話までした覚えはなくて、私は驚いて受付を放棄して梓を向いた。
「な、なんで知ってるの……？」
「なんでって書いてあるし。隠すなんてひどいなぁ」
にやけ顔で彼女が示したのは、プロフィールブック。
……ま、まさかそんなことまで書いてあるなんて……。
信じがたかったけど、実際に見ると書いてあって、力が抜けた。
「んと……隠してるつもりはなかったんだけどね、こっちでもちょっと複雑で、あんまり公にしたくなくって」
サキ先輩のファンがちょっとだけ怖いのもある。ただのマネージャーで仲良いだけなら許してもらえてても、それより踏み込んだらどうなるか。
「へーえ。ね、後で話そ。ってか紹介してよ。あっちで座ってるからさ」
「うん、片付けとかあるから時間かかるけどいい？」
全然へーき、と手をひらひら振って彼女は向こうへ行った。
それにしても……まさかあの冊子にそんなことまで書いてあるなんて。
千種兄弟の思いつきは恐るべし。
もしかしてサキ先輩のにも書いてあったら……。
……考えるのはやめよう。なんだか怖い。
ほとんどお客さんも会場から出て行って、そろそろ受付も暇にな

ってきた。
「お疲れ様。片付け行くか」
草野先輩についていって、ちょっとだけある部の持ち物を回収する。
委員の人にお礼を言って、ＣＤやら受け取り、受付に戻った。
「さっきの子、友達ー？」
「あ、はい。中学のです」
見ていたのか、琴先輩が聞いてきた。
「なるほどー。なんか、桃ちーが女の子と話してるの見たの初めてかも」
「クラスに特別仲良い子もいないですしね……」
人見知りと、この特殊な環境のせいで友達と言える友達があまりいないのが現状だった……。
「桃ちーギャルギャルしてるのだめそーだもんね」
「あはは、そうですね」
そっか。大丈夫ならそういう友達ってすぐできるもんね。
「じゃ、着替えて解散な～」
葉山先輩の声でぱらぱらと部員が更衣室に向かった。
「あ、サキせんぱーい」
「ん？」
その中に混ざっていたサキ先輩を呼び止めると、間違いなく立ち止まって引き返してくれた。
「お疲れ様でした。……あの、中学の友達が紹介してほしいって言うんですけど……」
「え、いいよ」
あっさりオーケーしたサキ先輩を連れて、梓の元へ向かう。
「お疲れー。……ってまさか……」
携帯をいじって待ちくたびれていた彼女は、私の後ろに立つサキ先輩を見て、言葉をなくした。
「桃歌チャンの彼氏の松岡　咲哉です。よろしくね」

営業スマイルとはちょっと違った笑みを見せたサキ先輩と私を交互に見て、梓は噴き出した。
「どうも、矢島（やしま）　梓（あずさ）です。……ビックリしたぁ。部員だとは思ったけどまさか、桃歌がこんなイケメンを引っかけてるなんて」
そう言って目をぱちくりさせながら笑った。
「引っかけてるって……」
苦笑するしかない……。
「この子、面白いですよね。男の子苦手だったんですが、大丈夫なんですか？」
「うん、すごく面白い。……大丈夫だよね？」
梓は私と違って人見知りなんて全然しないし、怖いもの知らずだ。
「えっと、はい……」
あなたのせいでほとんど克服できちゃいましたよ。
「でも結構鈍感な桃歌がよく彼氏なんて」
「う、うん」
サキ先輩は、だって、いっぱい愛情表現してくるから、気がつかないということはなかった。ただ、逃げていただけで……。
「でも、マネージャーとしてもすごく頑張ってて、部員はみんな桃歌チャンが好きなんだよ」
穏やかに目を細めて笑ったサキ先輩に、少しやられた、って顔の梓。
サキヤクンスマイルは強いからね……。
「そっか。無事楽しくやってるようで安心した。彼氏なんて作るとは思ってなかったけど、全然いい人みたいだし、手放すなよぉ？」
「うん！」
勢いよく答えた私に、梓もサキ先輩も笑い出した。
サキ先輩がずーっと好きなのはきっと変わらないもん。彼も好きでいてくれるから。
「それじゃ、またね」
「うん、バイバイ」

荷物を持って去った彼女の背中を見て、色々と思い出す。
梓は強引だけどすっごく私を心配してくれる。
時々すごくかわいいのも、私は好きだった。
「良い友達がいるんだね」
「そうですね」
人と接するのが苦手な私にとって、梓の存在は大きくて、卒業のときはいっぱい泣いた。
でも、会いたい！　ってずっと言ってくれて、こうして文化祭にも来てくれた。
今は、寂しくないけれど、きっと先輩たちもいなかったら、私はすごく孤独だっただろう。
「行きましょっか」
サキ先輩と手を繋いで、歩く廊下がこんなに華々しいなんて。知ることはなかった。彼が私に声をかけてくれなければ。

「あ、桃歌ちゃん」
更衣室まで戻って、サキ先輩と別れた後、ちょっとぶらぶらしていたら、孝篤君に会った。
仕事もないのか、荷物を持って巡回モードで、パンフレットで扇いでいた。
「ねえ、これから水瀬先輩が劇出るらしいんだけど、見に行かない？」
「えっ！　行く！」
そういえば言っていた。劇に出るなんてことも……。
「やった。じゃ、行こうか」
嬉しそうに笑った彼について、教室へと向かう。
孝篤君も綺麗な顔をしているから、十分女の子の注目を受ける。
隣に歩いていると、ちょっと勘違いされちゃうかな。今はヒップホップ部お揃いだし。
「俺は嬉しいんだよ」

「え？」
急にぽつりと呟いた彼に驚いて横顔越しに見つめると、孝篤君は苦笑した。
「ニセモノだけど、桃歌ちゃんと並んで歩けて」
そこで、合宿のときの彼を思い出した。
『俺、桃歌ちゃんのこと好きだし』
孝篤君は、すごくモテそうだし、かっこよくて、優しくて……。
そんな彼にあんなことを言われたことを思い出すと、ちょっと照れる。でも。
「……ごめんね」
比べるようなことじゃないけど、私にはサキ先輩がいて、どうしようもできないくらいに好きだから。
唐突に謝った私に、孝篤君はびっくりした顔で聞き返した。
「な、なんで？」
「孝篤君のことは好きだけど、でも孝篤君の気持ちには応えられなくて」
私だって、普通の女の子だもん。素敵な男の子と一緒に歩くのが、嫌なはずがない。
「いいの。そう言ってくれるだけで嬉しいし、俺はサキ先輩のこと尊敬してるから、逆に安心してるよ」
優しく笑って、頭を撫でてくれた。
……孝篤君って、お兄ちゃんみたいだな。
いや、部員はみんなある意味お兄ちゃんみたいにしてくれるけど、その中でも特別優しい理想のお兄ちゃん。
「ありがとう！」
お返しに満面の笑みをプレゼントすると、孝篤君はちょっと照れた顔で笑った。
「そこのお二人さん、イチャイチャすんのはいいけどもっとこっそりやれよー」
ふと振りかかってきた陽気な声。

顔を上げると……。あれっ！？
「先輩……？」
声も口調も、確かに水瀬先輩だった。
今見てる顔、垂れ気味の目や上がった口元、すっと通った鼻に眉毛、全部水瀬先輩なのに。
「何、そんなにビックリする？　ビックリしすぎて、珍しく基山チャンがブサいぞ」
からかいをかけてきた彼の髪は、真っ黒だった。
それだけでかなり真面目な印象に映るから、すごいと思った。
「それ、どうしたんですか？」
彼もまたビックリしていた孝篤君が問うと、水瀬先輩は髪を撫でて言った。
「ウィッグだよウィッグ。あまりにもあの髪が合わないからさ」
冷静になって見直すと、今の彼の服装は、彼らしくもなくぴっちり着たブレザーの制服だった。
「クールなヘタレヒーロー役なんだよ。水瀬クンキャラには合わないけど面白いと思ってさ」
でも、水瀬先輩のたまに見せる真剣な顔はすごくかっこいいと思う。
……ファンが増えちゃうなぁ。
「というわけで、カップル紛いなお二人さん、どーぞ見ていってよ」
「そのつもりで来たんですよ」
にっこり笑顔で言った孝篤君に、へぇ、と意味深な笑みを返す水瀬先輩。
……だめだ、この人たち、お腹の中がたまに黒いんだった。何考えてるか想像するだけで怖すぎる。
「ま、冷房きいてるし、入って入って」
水瀬先輩に背中を押されて教室に入り、席につく。
「意外だったねえ」
「うん」

水瀬先輩の黒髪なんて初めて見た。
あ、他の染めてる先輩のも全然見たことないけど……。
ちょっとプリンになったりしても、すぐ染め直しちゃうから、全部地毛色はなかなか見ない。
……でも、水瀬先輩は地毛も茶色そうだしなぁ。
琴先輩は、多分朝斗先輩と同じような焦げ茶。サキ先輩は……。
実里さんも美咲さんも黒いんだよね。なら、黒かなぁ……。
「はは、やっぱ面白いな」
「え、何が？」
急に笑い出した孝篤君は、でも、何がとは教えてくれなくて。
程なくして始まった劇に、聞くチャンスも失ってしまった。
劇はといえば……水瀬先輩の、いつもと違う演技は面白かった。
元々大げさにリアクションしたり、抑揚が豊かな話し方をするので、こういうのは上手いと思っていたけれど。
さすがに決め顔や女の子が喜びそうな台詞はリアリティーがあった。……というか、あれは本気だなぁ。
劇全体もクラス劇としてはすごく上手くて面白かった。
「二人とも、ありがとな」
教室の外へ出たところで、水瀬先輩が他のお客さんの相手をしつつ話しかけてくれた。
「お疲れ様です。すごいよかったですよ」
暑いのか、上着を脱いで腕捲りをした水瀬先輩。
周りの女の子みんな目がハートですよ、水瀬さん……。
「どーも。そうだ、だからさ、イチャイチャするならサキに見つからないようにやれよ。今日あいつそわそわしてて何するかわかんねぇ」
「まぁ、別にそういう訳じゃありませんから。それじゃ、お疲れ様でした」
孝篤君に手を引かれて、足早に教室を後にする。
「ご飯、食べてないよね？」

「うん。でも、隼先輩のお弁当あるの」
今日もちゃんとみんなの分作ってくれたから。
「孝篤君も一緒に食べたい？」
いつも先輩と食べてるから、たまにはこういうのもいいだろう。
「いいの？」
「もちろん！」
言って、更衣室へ向かう。
あ、そういえばこの時間は……。
「ダンス部の人たち着替えてるんだっけ。……私、とってくるから待っててね」
そっと扉を開けると、一斉に視線を浴びる。
手早く閉めて、ダンス部のみなさんの顔を伺った。
「あの、お弁当取りに来たんです」
多分ほとんどの人に顔を知られてるから、嫌な顔をする人もいた。
けれど、咎めてくる人はいなかったので、私はそっとお弁当を探した。
隼先輩のおっきい風呂敷……あった。
包みを開けると、名前の書いてある付箋のついたお弁当箱が六つ。
今日は全員揃えないから、一人一人分けておいてくれたのだった。
桃歌、を取って、またこっそりと部屋を出た。
「おかえり」
「ただいま……なんか、緊張しちゃった」
何か言われたらどうしようかと思って。
孝篤君は、穏やかに笑って言った。
「大丈夫だよ。みんな桃歌ちゃんが悪い子じゃないことくらいわかってるだろうし」
「そうかな……」
そうだよ、と笑って、彼は私の頭をぽんと叩いた。
「あれ、孝篤に桃ちゃん」
廊下の向こうから歩いてくるのは、梢君だった。

「忘れ物取りに来たんだけど……入れないか。後でいいや」
「あっそうだ、梢君も一緒にご飯食べようよ！」
みんなで食べる方が楽しい。いつも大人数だから、少ないのはちょっと寂しかった。
梢君は、私を見た後孝篤君を見て、驚いたように笑った。
「孝篤がいいなら一緒に食べたいな？」
「別に構わないよ」
あ、あれ、孝篤君……？　ちょっと怒ってマス……？
いつもの穏やかな雰囲気がちょっと薄くなっている気がして、私は思わず身を引いた。
「はは、面白いな、二人とも。ま、せっかくだし一緒に食べさせてもらいますっ」
そんなわけで、三人で食べる場所を探した。
いつもの中庭は人がいっぱいだし、空いている教室もあまりない。
廊下で食べるのはちょっと嫌だし、でもちゃんとした場所があまりなかった。
「どーしよっか」
「だね……」
途方に暮れて、お腹も空いて、ぐったりな私たち。
「ん～……。あ、俺のクラス、空いてるかも」
「マジで？」
孝篤君の思いつきで彼のクラスに向かうと、映画上映の彼のクラスでは、今は教室は使っていないようだった。
孝篤君が話をつけてくれて、中に入る。
「戻しとけばいいから、椅子も適当にしちゃっていいよ」
並んでいた三つを少し向きを変えて、三人で座った。
「ふー。よかった、場所見つかって。あのままだったら暑さにやられて倒れてたね」
「あはは……」
ちょっとばかし冗談にならない梢君の冗談に、二人で苦笑する。

「僕らは大して問題ないけど、大事な大事な桃ちゃんが倒れちゃったら、大変なことになっちゃう」
少し茶目っ気のある言い方で、梢君は紳士的に心配してくれた。
「梢君と孝篤君の方が大変だよ。舞台に立てるのは二人だけだもん。私はいなくっても大丈夫だけど」
こういうことに男も女も関係ないだろう、と私はそう思う。
体の弱い人は男女問わず弱いし、強い人は男女問わず強い。
「桃歌ちゃんがいないとサキ先輩が踊れないっしょ」
「そうだよね」
……そっか、そうだった。
あの咲哉殿下の心配をいただいちゃうと、彼自身に色々と影響しちゃうんだった。
「うーん……でも、私は結構丈夫な方だから、そんなに心配してくれなくても大丈夫だよ？」
貧血体質も頭痛持ちもないし、風邪もあんまりひかない。夏バテにも全然折れないし、いつでも元気だ。
運動を特別しているわけじゃないけど、元から体は丈夫だった。
「そうなんだ。でもまぁ、みんな桃ちゃんを心配したくてしてるから、甘えちゃってもいいんだよ」
「そんな……。ありがとう」
梢君の人をなだめる技術はすごいと思う……。
自覚してるつもりだけど、頑固者な私も、彼の前には言葉をなくす。
「そうだ。ちゃんと言いそびれたけど、お疲れ様。すっごい良かったよ」
「ありがと。桃ちゃんこそ、お疲れ様」
梢君も、孝篤君も、運動はそんなにやらない方らしいけど、練習はずっとすごく頑張っていた。
「そうそ。桃歌ちゃんがいなかったら俺、ここまで頑張れなかったかも」

はにかんだ顔も綺麗な孝篤君にちょっとだけ見とれてしまって、私ははっとして頷いた。
「ありがとう。……私、この部活に入って良かったなぁ」
みんな優しくて、面白くて。やりがいもあるし、何より楽しい。
今のところは、やめたいと思うほど辛いこともなかったし、よっぽどのことがなければやめるつもりはない。
「僕も。松岡先輩に憧れて入ったけど、部の中にはすごい人はもっといっぱいいてさ。すごい燃えた」
夢を語る少年のようにおおらかな目で、梢君は語った。
そう、だな。私も、それはすごく思った。
普段はなんてことない顔をしていても、ステージの上ではこの上なく輝いて見える。
まさに魔法とも呼べるものだ。一生懸命踊る部員に、カッコ悪い人は誰一人としていない。
「俺も、いっぱい変われたし。ステージに立つのは、やっぱり楽しいな」
みんな、後悔なんてしてなくて良かった。
でも、ヒップホップ部が嫌いだなんて、嫌いな人がいるか、ダンスが嫌いかのどちらかくらいだと思う。
だって、辛いこと以上に、部員の雰囲気だけでも楽しいんだもの。

「琴、この後暇か？」
クラスの担当を終えて、サキと一緒に飯を食べた。
そいで、今はぐだぐだ中。
「暇だけどー？」
先ほど自分のクラスで買ってきた――隼が作った、焼きそばを頬張りながら答える。ううむ、いつもと違うな。さすがホットプレート。
「よし、それじゃ、桃歌チャンに会いに行こう」

桃ちーは……今の時間は確か、クラスの受付をやっているのだと思う。
「えー、俺ら邪魔じゃねぇ？」
正直お客として行くなら営業妨害もいいとこだ。サキが黙ってても女の子いっぱいくっつけて歩くから、人が無駄にたまって廊下が混む。
それに、仕事をしてる桃ちーをサキが邪魔しないとも限らない。
「手伝いだよ、手伝い。客引きとかやったらいいと思って」
「なぁるほど！　いい案だな」
そうそう、そのサキヤクンスマイルでついてこない女の子はなかなかいないぜ！
もう平らげた焼きそばのパックをゴミ袋に突っ込み、外に出たサキを追いかける。
ふー。まだ食い足りないなー。後でまたなんか食べよう。
「和真の甚平姿は見たんだけど、桃ちーはなんか着ないのかねー」
絶対かわいいのに。夏っぽいのすごい似合うから。
「多分受付係なんだろ。あの子なら、その方が向いてるし」
「なるほどねー。ま、桃ちーが目立ちすぎるとサキも大変だしな」
苦笑を返したサキは、自分がちょっといきすぎてることくらいわかってるんだろう。
しょーがないさ。桃ちーは隙だらけで危なっかしいし。
桃ちーのクラスの教室に辿り着くと、やはり彼女は受付に座っていた。
こちらを見つけて、ビックリ顔を向けてくる。
「サキ先輩に琴先輩。どうしたんですか？」
「手伝いに来たんだ。サキと客引きしてくる！」
返事も待たずにまた元来た廊下を引き返して、階段前に陣取る。
既に視線をたらふくいただいているサキが、宣伝文句を口にし始めると、いいきっかけとばかりに女の子たちが話しかけ始める。
負けてらんねぇ！　琴吹だって頑張るぜ！

「お姉さんたち、ちょっとだけ寄っていきませんか？」
「えっ、どうする？」
「行こうよっ」
俺の顔をちらっと見てすぐ逸らした。ははん、効果ありだな。
「じゃ、案内しますよ」

「……先輩たち、連れてきすぎですよっ。もう疲れました……」
突然にやってきて、たくさんのお客さんを引き連れて帰ってきた二人。
その後何度もそれを繰り返されたから、もう大変だった。
クラスの出し物で受付が追い付かないなんて……。
「ははは、大盛況でよかったじゃん」
それもそうではあるんですけど。
二人の名前を聞かれたり、お問い合わせも多くて大変だったんですから。
「もう一般公開終わりますから、客引きはいいですよ。座っててください」
受付の二つ空いた席をすすめる。
「はー。今年も楽しいなぁ！」
文化祭なんて、楽しむものだけど、確かに楽しかった。
楽しそうにしているみんなを見ているだけでも楽しいけど、私だってマネージャーとしていつもの成果を発揮できる。
「まだ明日もあるよ。気ィ抜くのは早いぞ」
こういう風に笑い合うサキ先輩と琴先輩を見るのも、限られてるから、明日一日を大切にしよう。
彼らと過ごせる文化祭は、今年が終わったらあと一回なのだから。
「あっありがとうございましたー」
最後のお客さんが出ていって、私のクラスの出し物は終わった。
二人に片付けを手伝うと言われたけど、彼らも自分のクラスがあ

るので、無理やり押し返した。
と言ったって、片付け自体そんなにやることはないし、私は残った荷物をとりに更衣室に向かった。

「お、桃ちゃん」
「みんな。どうしたの？」
更衣室前には、一年生の部員四人が集まっていた。
「たまたま、ね。一年で乾杯しないかって言っててさ、桃歌ちゃんも来ない？」
「行く行く！」
あまり乗り気じゃなさそうな敦史君と、お疲れモードな和真君と違って、梢君と孝篤君はまだ元気ハツラツな感じだった。
「基山、何飲むんだ」
「え？」
「買ってやるって言ってンの」
自動販売機の前まで来て、和真君がコーラを買い、私に声をかけた。
心なしか頬が赤い……。照れてるんだな。
「和真が珍しくポイント稼いでる」
「違ェよ！　で？」
ニコニコ顔の梢君にからかわれてむきになって、更に赤くなった和真君は、こう言うと怒られるけど、ちょっぴりかわいかった。
彼は買ってくれた私の分を手渡して、梢君の隣に座った。
「ありがとう」
お礼を言うと、照れ笑いで返してくれる。うん、やっぱりかわいい。
「それじゃ、文化祭一日目お疲れ様！」
梢君の掛け声で、みんなで乾杯する。
片付けをしている人が多いため、あまり人気がない休憩スペースは、先ほどまでの人の熱気と比べるとなんだかちょっと寂しかった。

「俺、もう行っていいか？」
グビッと一気に飲み干した敦史君は、缶をゴミ箱に捨てて、すごく行きたそうな顔をした。
「うん。秋穂ちゃんなら、教室にいるよ」
そう、女の子好きのチャラ男だと思っていた彼は、幼馴染みであるうちのクラスの秋穂ちゃんにゾッコンだったのだった。
多分、頭の中は彼女のことしかないってくらい。
「すごいよね。何があったのかわかんないけど、アイツ急に吹っ切れたように葛西さんにくっつき始めて」
梢君の話に、何故か微妙な笑みの和真君。
そういえば、和真君は私とも、梢君や孝篤君ともよく話すようになった。照れ屋でぶっきらぼうなところはあまり変わらないけど、明るく接してくれるようになった。
「みんなは、彼女とか好きな子とかいないの？」
「……別に」
「いないなぁ」
「強いて言うなら桃歌ちゃんだけど？」
……皆さん、案外そういうのないんですね。
孝篤君のは合宿のときに慣れちゃったので軽くスルーした。
「そっか。……みんな、モテそうなのに」
「そんなこと全然ないって……。ファンはできても恋愛対象にはされてない感じ」
そっか、ファンと片想いは違うんだもんね。
サキ先輩なんて、いっぱい告白されてるのになぁ。
「っていうか、必要性を感じない」
照れ屋でウブな和真君は、意外とそういうことに興味ないのかぁ。
女の子以前に好意を寄せられたら嬉しがりそうだけど。
「桃歌ちゃんがかわいすぎてみんな満足なんだよ。実際桃歌ちゃんほどかわいくて良い子そうそういないし」
「そんなこと絶対ないって！　それに、私は……」

みんなと、絶対的に平等に接することは、できない。
サキ先輩が一番私を求めて、私が一番彼を求めているから。
「そういう意味じゃなくて。好きな子はいないし、桃歌ちゃん見てれば元気チャージできるし、必要ないんだって」
うじうじしている私が、悩まないでいられるように、孝篤君は柔らかく笑った。
どうして、こんなに優しくしてくれるんだろ……。
「ま、孝篤のあま～い口説き文句は抜きにしても、桃ちゃんからエネルギーもらってるのは事実だよ」
孝篤君の言葉を陳腐だとも言うように鼻で笑い飛ばした梢君だったけれど、ばかにしているわけじゃないのは確かだった。
私が優しくされたって困るだけだって、多分わかってくれてるから……。
「ありがとう……でも」
「いらねェっつってんだろ。色々理由はあるにしろ、今はそーいうのみんなないってことで、いいじゃん」
ちょっと怒ったような口調だったから、不安になって和真君を見たけど、彼は別に怒っているような表情じゃなくて……。照れたようなはにかみを浮かべて、目を逸らした。
私は、なんだかおかしくなってしまって、声を漏らして笑った。
「なんか、ごめんね。何の気なしに振った話題で、慰められちゃった」
みんなが、すごく気を遣ってくれてるのがわかって、嬉しかった。
でも、こんなに真面目に心配してくれなくたって、私は大丈夫かなぁ。
「いっつも、俺らを励ましてくれんのは基山だろ。お返しってことで、いいんじゃねえ？」
和真君の言葉に、二人もうなずく。
そっか……。励ましに、なってたなら、よかったなあ。
溢れた笑みを、残さず拾って笑い返してくれるみんなが好きだっ

た。
こんなに素敵な人ばっかりなのに、女の子が寄ってこないなんて、きっと嘘だ。
今は、きっとヒップホップ部だけでいいって思ってくれてる、それだけのことなんだろう。

「おはようございます！」
「ふぁ、桃ちーおはよー」
あくびをして目をこすり、琴先輩はいつも以上に眠そうだった。
「先輩、眠そうですね？」
「ねっむいよ。別に夜更かししたわけじゃないんだけどな～」
全く、といった表情を浮かべて、また一つあくびをした。
一日目にも朝練をやったが、二日目でもみっちりやる。公演まで練習に集まる場所なんてない上に、ストレッチやアップをする時間もないのだった。
そうそう、ストレッチといえば……隼先輩。
ほぼ反射的に視線を彼に向けると、いつものように恐るべき柔軟さをさらけ出していた。
あんなに足が長いのに前屈が余裕なのだ……。しなやか、という言葉がよく似合う彼は、部内一の身体の柔らかさを誇っていた。
水瀬先輩に、そんなとこも女っぽい、とか言われて、すごい怒ってたな。
隼先輩、第一印象は確かに中性的だったのだけど、見慣れてしまうと外見は女の子には全然見えない。
けれど、すごく世話焼きなところとか、相談に乗ってくれる辺りが、頼りになるお母さんか何かみたいなのだった。
……私より女の子らしいところもいっぱいあったりして。料理裁縫がお手のもの、化粧もできれば絵も上手い。女心もよくわかる。

でも結局、器用でカッコイイなぁという印象に落ち着かせるオーラが彼にはあると思う。
綺麗な身体をてきぱき動かして進めるストレッチに見とれていると、ふと目があったり。
どうしていいかわからなくてとりあえず微笑むと、隼先輩は珍しく、困ったように笑った。
こんな風にも笑うんだ……。
正直、いつもクールとあって、笑顔を見せることは、他の部員よりは断然少ない。
笑っても大抵呆れ笑いか嘲笑の類だったりで、優しい笑いは稀だ。
サキ先輩のお得意な困り笑顔を隼先輩がすることは滅多になかったから、私は一人無言で驚いていた。
「あ、隼先輩っ」
「なんだ？」
朝練も終わって解散となった後も、彼の先ほどの笑顔が気になっていた。
「さっき……どうしたんですか？」
問うと、彼は少し考える仕草をしてから、こう返した。
「なんだろうな。お前について嫌な予感がしていてな。そのことを考えてたから、笑うチビの顔がいつもと違って見えた」
からかい、なんかじゃなくて……。いつもよりもすごく真剣に、彼は答えた。
嫌な、予感……？　隼先輩のカンって、絶対当たりそうだから、なんか怖いな。
「安心しろ。よっぽどの状況じゃなきゃ、部員の誰かくらいはすぐにお前のところに行ける。何かあったら連絡してくれ」
私を安心させようと、優しい微笑みと、暖かい手で頭をぽんと叩いてくれた。
「はい……」
大丈夫、昨日だって普通に過ごせたんだ。今日に限って何かが起

こるはずがない。
それに、隼先輩の言うように、みんなが、いる……。頼ってばかりじゃいけないけど。
「よし、そろそろ行け。一般公開始まるだろ？」
「はいっ」
いつも通りの頼もしい口調で背中を押してくれたから、私も気分を切り替えて、いつも通りいこうと思った。
心配したって、怖がったって、何が変わるとも言えないよ。

「こ、こんにちは」
ちょっと緊張しながら笑顔の受付の子に挨拶をした。
私を認めた瞬間、一瞬表情が固まったその子に、私は苦笑いで返して、パンフレットを半ばもぎ取るようにして受け取って中へと入った。
来ちゃった……！　ダンス部、公演。
行こうとは思っていたけど、なかなか踏み出せなくて、しかもそのせいで胸を張って誰かを誘うこともできなかったから、一人で来た。
ダンス部内でどういう扱いを受けているのかわからないけど、少なくともヒップホップ部にベタベタな人たちにはあまり良い評判ではないことくらいは、わかってる。
しかし、ダンス部の中にも普通の真面目な子はいるから、そういう子とは仲良くできたら……なぁ、なんて。
マネージャーとして……一、女の子として、興味はあるから、咎められる必要なんてないけど、ちょっとだけ居づらい空気もあった。
ほとんどの人がパンフレットを読んだりしているから他の客なんて見てないけど、私のことを知っていて気づいてる人もちらほらといる。
目立つ外見じゃないけど、目立つ行動は微妙にしているから……ね。

ある意味どきどきの公演前の時間が終わり、公演が始まる。
華やかな音楽。男女の違いはこういうところにも出るのか。
かわいらしい衣装を着て、アイドル系の音楽で踊る。かっこいい衣装を着て、洋もののダンス系ミュージックで踊る。
ヒップホップ部でもバリエーションはあるが、ダンス部の女の子たちの方が、たくさんの顔を持っているように思えた。
そして、ヒップホップ部と同じ、選抜メンバー三人の踊りが始まった瞬間。
舞台の中央に立つ彼女を見て、客席が、どよめいた。
遠くからでも眩しいほどに輝いて見える、綺麗な顔。何もかも完璧といえるほどに整った容姿の彼女は、一際大きな笑顔を浮かべてから、人々を圧巻させるほど迫力のある踊りをした。
――篠田、愛香。
周りの人々が口にするのは、彼女の名前か、すごい、の一言。
こんなこと考えたくなかったけれど、確かに、サキ先輩と踊ったらすごく映えると思った。
容姿も、踊りも、彼に釣り合う。いや、彼が彼女に釣り合う、と言ってもいいほどに、彼女は素晴らしかった。
多分、とんでもなく綺麗な人ですごく踊りが上手いんだ、とは思っていたけれど、ここまでとは思わなくて、正直圧倒された。
そして……私なんかで、よかったのかなって。
何があっても自信を持っていこうって思ったのに、こんなところでその決意は揺らいだ。
でも、自信、失くすに決まってる。篠田先輩はサキ先輩のことが今でも好きなはずで、そして彼女は彼の相手として完璧ともいえるものを持っている。それがわかっていながら、彼は、あえて私を選んだ。その理由が、理由なんてないのに、わからないから、不安になる。
ただ時間は過ぎて、終わってしまった舞台に無心で拍手を送る。
こんなところまで来て、私、何考えてるんだろ……。

しばらく立ち上がる気にもなれなくて、カバンを握り締めてぼーっとしていた。
「あんた、何しに来たの？」
前の列のパイプ椅子の背もたれをただ眺めていたら、ふと声をかけられた。
顔を上げると、ダンス部の、三年生の人。
「公演、見に来たんです」
間違いはない。本当に、それだけだもの。辛気臭い顔を無理に振り切って、笑顔を作った。
彼女は、私を無言で睨みつけている。
「あの、良かったですよ、すごく」
不安に思って口にすると、彼女は怒ったような顔をして吐き散らした。
「お世辞ならいらないけど」
「そうじゃありません」
私が、そんなこと、しない。そんなこと言うために、来たわけじゃない……。
「基山さん。せっかくあたし達がみんなに女の子が寄り付かないようにしてるのにね、あんたがいたら意味ないの。あんたがべたべたしてたらさ、あたし達がとばっちり食らうだけなの」
皮肉たっぷりの侮蔑の眼差しを向けて、彼女は言った。
女の子が、寄り付かないように……？
「そんなこと、頼んでませんよね？　誰も、頼んでませんよね」
絶対に知らない。あんなこと言ってた梢君が、このことを知っているはずがない。二年・三年の先輩たちはもしかしたら気づいてるかもしれないけど……一年生は、きっと知らない。
「でもね？　わかるでしょ、調子に乗ったやつらに付きまとわれる可能性が高いんだから、めんどくさいって」
「そんなの、頼まれてもいないのにやるのはどうかと思います」
いっぱい告白されたいとかじゃなくて……。出会いのチャンスが、

とかでもない。
本人の意思の関わらないところで、きっと彼らの名前が出されて、侮辱されて、女の子たちは泣くんだろう。
心優しい彼らが、そんなことを望むはずがない。見て見ぬふりをしていたとしても、望みはしない……！
憤りを感じてきた私に、彼女は一層声を荒げた。
「あんたがわかることじゃないわよ！　……どうせ関係ないんだもんね。あんたに手出したらあたし達の立場がなくなるだけだからね。一人放し飼いにされてるからっていい気になるんじゃないわよ！」
誰にもあなた達に飼われてなんかない。私は部員に飼われても、部員を飼ってもいない。
ただの、しがないマネージャーに、色々くっついてきちゃっただけの話。
「じゃあ、聞いてみますか？　梢君なら、あなた達を軽蔑しますよ。和真君は、怒って口もきいてくれないと思います。孝篤君はあなた達を許しても、あなた達のやったことは許さない。もしも秋穂ちゃんにも何か言ったなら、敦史君は女だろうとあなた達を殴ります」
彼らを盾にすることは、好きじゃないけど。彼らの誇りにかけて、許してはいけないこと。
人道を外れた行いに黙っていられるほどの馬鹿で気楽な人間は、うちの部活にはいない。
「バラすっていうの？　いいご身分よね、ホント」
「うんうん」
すっかり怒った彼女の後ろから顔をひょいと出したのは……。
「ひ、久くん！？」
彼女の方が驚いて身を引く。久くんはお構いなしににこにこしている。
「そろそろ片付けてくれないかなぁ。すぐに俺ら準備しなきゃで」
うろたえた表情を隠せないまま、彼女は久くんにぶんぶん頷き、私をひとつ睨んで去って行った。

久くんは、私の頭に手を乗せて笑った。
「ひっでぇよな。バカかって。なーんにも俺らのためになってないのにさぁ、労力使っちゃって」
「聞いてたんですか……？」
朗らかに笑いながら、久くんは私を慰めるかのように頭を撫でた。
「小川ちゃんの怒り声だけめっちゃ聞こえてたからね。あ、桃ちゃんのカッコイイ反撃もちょっと聞いちゃいました」
てへ、という身振りつきで、久くんはかわいらしく笑った。
私の言ってたこと……大丈夫、だったかな。
それと、本当に彼らに言うべきかどうか。
「小川ちゃんには俺から言っとくよ。一年にこのこと伝えるかどうかは、桃ちゃんに任せる。正直、やめてくれるんなら別に構わないと思うけど、みんな怒るかもだよねぇ。それが怖いっていうか」
ちょっとだけ、あの先輩がかわいそう……かなって。元を正せば彼らへの好意が変な風に向かっちゃっているというだけなのだから。
……黙っておこうかな。彼女たちが自分から謝る前に「バラし」てしまえば、みんな彼女たちに対して怒ることしかできない。許すことは難しくなってしまうから。
「隠すわけじゃありませんけど……。とりあえず、黙っておきます」
久くんは頷いて、手をどけた。
私はダンス部の公演を見に来てそのままだったことに今更気がついたので、急いで更衣室へと走った。
構わず勢い良くドアを開けると、案の定……あれ？
着替えている途中の格好の人も、いるのだけれど、何か、様子がおかしかった。
「桃歌、緊急事態だ。和真の衣装が、まるごとない」
隼先輩までもが焦った表情を浮かべていた。
和真君の衣装が……？
衣装などの公演に使う荷物は基本的にここに置いて行っているはずで、多分朝練の片付けをしてみんなで荷物を置きに行ったときに、

和真君本人が置いたはず。
「確かにこの棚に置いてたんだけど、袋ごと消えちまった」
焦りと困りを五分五分に浮かべた和真君の顔を見て、私は困り果てた。
「ここを探してなかったら、あとは……」
ここは、ダンス部も一緒に、使っているから、ダンス部の人が間違えているか。
でも、どうしよう。さっきあんなことがあったばかりで、すごくダンス部のところには行きにくい。
「ダンス部には俺が聞いてくるよ」
着替えを済ませていた葉山先輩がすっと手を挙げて言った。
さっきの出来事や私の心中を知ってか知らずか、ダンス部に行ってくれるというのか。
「俺も行きます」
そこに、今の瞬間に着替えを終わらせたサキ先輩が加わる。
これなら……安心、かな。
「私、探しますから、着替えてください」
ひたすら荷物の山を漁る部員に声をかける。
今は裸がどうこうとか言ってる場合じゃないし、どうでもいい。
棚の中の荷物をひとつひとつ丁寧に調べていく。和真君の衣装は見慣れているから、見ればすぐにわかるはず。
ない……ない。
棚の中は全て調べ終わった後で顔を上げると、机の上を調べていた隼先輩が首を振った。
「ど、しよ……っ」
最悪、私服そのままか、誰かの私服に着替えるか。
服自体は、今和真君が着ているポロシャツでも、衣装とあまり変わりはないから、彼の私服でいいだろう。
しかし、演出に大切な、帽子がない。
しかも外靴そのままでステージに上がっちゃだめだし、靴を取り

に行くには時間がかかる。
「お前が慌ててどうする。今はサキと葉山先輩を待つしかない。もしも見つからなかったときの打開策は、考えておくから」
厳しくも優しく隼先輩になだめられる。
そう……だな。私が和真君本人よりも冷静さを失ったりして、本番に影響が出たら元も子もない。一人であれこれ悩むのも褒められたものじゃない。
そのとき、扉が開いてサキ先輩が入ってきた。
「あったよ、ダンス部の子がやっぱり間違えて持ってた」
和真君に投げて、安堵の溜息を漏らす。
「あれ、葉山先輩は？」
問うと、扉の外を示して、外にいることを伝えた。
そっか、そうだ、準備しなくちゃ。
「それじゃ、準備行ってきます」
急いで更衣室を出ると、葉山先輩がダンス部の女の子と話をしていた。
私を認めると親指を立てた右手を軽く突き出してきたので、私はおずおずと頷いた。
……？　なんなんだろう。
時間もないので、体育館へと急いだ。

「まず最初に言うと、今の俺の立場はヒップホップ部の部長だから」
「は、はい……」
実際この子が企てたことじゃないことくらいわかってるが、一年生にも威圧をかけておかないとまた何かしでかすかもわからない。
「まァ、サキにバレたらもっと怖ぇだろうけど、黙っといてやる。それは俺の私情で、だな」
葉山悠輔一個人としての立ち位置はサキとの対立にある、ことになっているからな。

「基山を貶めようとご足労なさったことは、とりあえず置いておく。が、ただそういうことするよりも、うちの部に迷惑かかるようなことをやる方が、ハイリスクだってことわかってるか？」
あいつ一人に陰湿ないじめでもしてやっても俺は何もしてやらねぇが、部が関わっては違う。
部が関われば、部員全員がほぼ漏れなく黙っちゃあいねぇ。
「はい……」
「バレたらお前らの大好きなヒップホップ部全員を敵にまわすことになるぜ。しかも、もし基山を貶めようとして策は成功したとして、隼の目を誤魔化せるか？　無理だね。……そんなわけで、やるならもっと上手くやるべきだったな。ということと」
少しのお情けで残しておいた笑みを消す。彼女がおののいた。
「誰かが『わざと』ヒップホップ部に迷惑をかけたとわかったら、俺はそいつを絶対に許さないからな、覚悟しておけよ。……今回は未遂くらいのノリで済んだから許しておくが、肝に銘じておけ」
……大体、嫌いなんだよ。こそこそして、いらない罪なすりつけるような真似して。
相手に落ち度がないことを認めたやり方だ。自分の主張が弱いことを自覚している証拠だ。
意味もなく、とりあえず基山を嫌っている、くらいの生半可な気持ちであいつに関わると絶対に後悔するというのに。
部員があいつを求めているこの状況で、あいつをこの部から引き離すことは無理に等しい。ならば、選べる手段はぐっと減る。
頭の弱い女にはわからないのな。……俺は、自分が満足するまであいつらを認める気はない。
基山が卑しい行動を一回たりともしていない限り、あいつに罪をなすりつけるようなやり方では、ダンス部が望む方向には何も変わりやしない。
部員に話しかける勇気もないくせに、仲良くしてるってだけで基山を憎たらしく思うとか、バカか。あいつはそれなりに話ができる

子だから好かれているんだろうが。
……わかっていないな。何もかも。
ダンス部と関係を持つのも本当に疲れた。あそこにはつくづくバカな女ばかりだ。
――彼女を、いまだに疎外し続けているという点でも。

「た、高梨君！　握手してぇ！」
公演が終わった後、一日目と比べて、圧倒的に和真君に声をかける女の子が多くなった。彼はこういうときばっかりは照れもしないで笑顔で対応していて、ちょっと意外だった。
空気があまり巡回しないし物も人も多くて蒸し暑い体育館の、熱い照明のあたるステージで踊った後の部員はみんな汗だくだったけど、運動した後のスポーツマンの例に漏れずかっこよかった。
シューってやんないと臭いことには臭いのだけどね。ただその辺は抜かりのない人たちばっかりだから私も不快に思うほどのことはあまりない。
「桃ちゃん、どうしたの」
「んー。和真君って、なんでこういう時はあんなに素直なのかなぁって」
和真君が女の子を器用にさばいている様を眺めながら、梢君の言葉に答える。
私と話してるときも、たまーにすごく自然体な笑顔を見せてくれるけど、思い出したようにつんつんしだしたりする。
別に私のことが嫌いでそういうことしてるんじゃないって本人は言ったけど……。
「あいつ桃ちゃんのこと意識しすぎだから落差激しく見えるのかな？　普段からあんな感じってことはないけど、僕はそんなに驚かないけどな」
「気にしないでって言ったのになぁー」

あれから、素っ気なくはなくなったけど、どこか一線おかれてるような感じがする。
私だってそんな別に大人しい子ってわけでもないし、和真君みたいな男の子とわいわいするの嫌いじゃないのにな……。
お客さんがほとんどいなくなって、ふとこちらを向いた和真君と目が合った。
梢君と二人してずっと見ていたから、こちらを見た瞬間に彼はびっくりしたような顔をした。
「な、何だ？」
ちょっと恥ずかしそうな顔で首の後ろをかく仕草が型にはまりすぎてて、梢君が思わず噴き出した。
「桃ちゃんが和真ともっと仲良くしたいって！」
からかいを交えてそんな風に言ったから、私も和真君も赤くなった。
いや、間違ってることはないんだけど……。
「っま、あんまり基山チャンと仲良くしすぎるとサキに睨まれるけどなー！」
彼の頭を後ろから掴んで、がしがしと撫でた水瀬先輩に、和真君は必死に抵抗する。
こんなところ、やっぱりちょっとかわいいかも。
和真君が彼女作って一緒にいるところとか見てみたいなぁ。だって、なんだかんだ言って素直なときはすごく素直で、その純粋さが眩しすぎるくらい素敵だから。
「お、わわ」
そんな様子を笑いながら見ていたら、すっと体が後ろに傾けられた。
バランスを崩して倒れこんだ先には、暖かい――いや、熱い体温。
「そーそ。こうやって妬いちゃう」
控えめに甘く響く甘い言葉は、サキ先輩のものだった。
いつものことだけれど、彼の表情を見てしまうと、もう、暑いと

かなんて言えなくなる。
どこか得意気に、でも少し頬を赤く染めて、幸せそうに笑んだ。
いつだってこんなに素敵な笑顔ができるのは本当にすごいと思う。
「最近、基山チャンの笑顔がほとんど全部にやにやしてるように見えるぜ……」
……その通りなのですけれども。
サキ先輩や部員たちの並外れた言動に慣れてきてしまったから、とにかく彼らが嬉しそうなのを見て笑ってしまったり、そういうのばかりだ。
「……その、サキ先輩的には、基山が俺たちと話してること自体が、嫌ですか？」
おずおずと、しかし堂々とした態度で問うた。
再三、に近いものがあるだろう。分かりきっている常識に近いこと。
「そんなことないさ。ただ、その時間の何倍も俺にくれたらいいなって思う。ただそれだけ」
何か口をはさみたくなるけど、でも口を開いても出てくる言葉はなかった。
その他の何倍も同じ時間とかを共有したいって思うのは……私だって、おんなじだ。
何を思ったのか、和真君はサキ先輩の言葉を聞いて、満足そうに笑った。
「じゃあ、基山が頑張れ！　俺は遠慮すんのやめるよ」
一際明るく笑って、和真君は走って行ってしまった。
遠慮……してたんだ。最初は私自身に、次は私とサキ先輩の関係に。
和真君って案外雰囲気を察して身を引く性格なんだなって思った。
多分、苦痛とかではないだろうけど、それが楽しいはずないもん。
自然体でいい。
「桃歌チャンに欲しがられるなんて羨ましいよ。和真も隅におけね

ぇな」
――とか言って、サキ先輩がわざわざこんなことを言うときは、絶対に相手より優位にあることを意識してるときだもん。
「基山チャンはオールウェイズウォントサキだもんな！」
「そ、そんなこと！　……あり、ます、けど……」
一緒にいるのが当たり前だなんて思っちゃいけないって、いつでも承知してる。だから、サキ先輩といたい、サキ先輩と話したい、って、いつでも思ってる。
「俺も、桃歌チャンがいっつも欲しいよ。――っていうか、俺のものだから」
どうしてこんな流れになったんだろう、なんて、こんな状況で私は場違いに冷静になってしまったり、だけどそれはドキドキしすぎた時の典型だなんて最近は気づいてしまった。
私の背後から耳元で囁いたサキ先輩の甘いお言葉に、私は真っ赤になって身をよじった。
「うお！　桃ちゃんこんなとこにいた。咲哉に隠れてて全然見えなかったよ。片付け行くよー？」
サキ先輩の肩の向こうからひょこっと顔を出したのは久くんで、私は今の体勢を思い出して恥ずかしくなった。
しょうがないなぁって顔をして名残惜しそうに腕を放したサキ先輩に一つ会釈をして、久くんの後を追う。
そういえば久くんは、三年生でも初期にサキ先輩のことを悪く思っていたグループではなくて、朝斗先輩のように味方……に近かった。
でも、本当は何か思ってるんじゃないかなって不安になるくらい、私とサキ先輩の関係については何も口を出さない。
「なーに。何か言いたいことでもあるの？」
顔だけひょいとこちらを振り向いた久くんは、珍しく真面目な顔だった。
眉間にシワを寄せた私を、背中越しに見抜いていた彼は、目を合

わせたあと薄く笑った。
「言えないならいいけどね。――俺は、言えなくて隠してることはないからね」
言わないことはあるけど。
いつも満面に笑う彼が浮かべた微笑みに、私は少し身震いをした。
つまり、私とサキ先輩の関係について何か思っていても、それを私たち本人に伝えて何かしようという気はない、ということ。
「ありがとうございます……」
それは、少なからず葉山先輩の圧力を受けているはずの三年生の先輩の中では、とても賢い選択で、そして私たちを気遣ってくれていた。
腰が低くなってしまった私の頭にぽんと手を置いて、久くんは真剣な顔で囁いた。
「咲哉のことを許せないやつらは、悠の味方ってわけじゃなくて、愛ちゃん――愛香ちゃんが好きなやつばっかりだよ。愛ちゃんの事情に同情すれば自然とそういう立場になるかもしれないけど、咲哉だって辛い思いしてるのは、俺は知ってる。もちろん桃ちゃんが苦労してるのも。だから、胸張っていい。自分が乗り越えてきた苦悩の壁を、ちゃんと認めていい」
久くんの顔は、少しだけ、ほんの少しだけ、悲しみを隠しているように見えて、私は驚いて言葉が出なかった。
ひとつだけの聞きたいことも、聞けなかった。

はい、こんにちは、朝斗クンです。
二日目一回目の公演を終えて、ヒップホップ部の公演は残すところ一回となったわけだけど、ダンス部女子の企みによる粗相のせいで悠の機嫌が若干悪くて怖い。
あいつあんまり人に吐き出したりするタイプじゃないから、なかなか機嫌良くならねーんだわな。今回ばかりは桃歌チャン遊んだり

じゃ直んない系だし。
「は、はい？」
廊下をあてもなくぶらついていたら、聞き慣れたあのかわいい声が聞こえてきて、俺は視線を無意識にそちらに向けた。
桃歌チャンが、チャラそうな男四人に囲まれている。
「今暇？　アイスおごるから一緒に行こうよ」
ベタベタなナンパ文句を口にして、金髪ツンツン頭のにーちゃんが桃歌チャンの肩に手を置く。
あーありゃやべぇ。松岡とかが見たら大変な騒ぎになっぞ。っていうかその前に桃歌チャンが……。
「ごめんなさい。アイスはとっても食べたいんですけど、今忙しくて。残念です。けど、私、男子ヒップホップ部のマネージャーなんですが、この後公演やるので是非来てくださいね！」
部員にもめったに見せない、キラキラしてて、ほわほわしてて、それでいて完璧な笑顔。
目と耳を疑った。だって、あの桃歌チャンが……。
そのかわいさに驚いたのか、唖然としている男たちに、ポケットから出したチラシを押し付けた桃歌チャンは、颯爽と彼らから離れて行った。
少し歩いた後、ダッシュでその場を離れた桃歌チャンに、俺は一瞬噴き出しそうになって、後を追った。
「桃歌チャン！」
胸をおさえて苦笑いをしていた彼女は、声をかけるとビクっと肩を震わせた。
「あ、朝斗先輩……」
いつも通りのちょっとオドオドした桃歌チャンの態度に、やっぱりさっきのは夢だったんじゃないかとか思った。
「ビックリした。あんな対応できんのな？」
「み、見てたんですか。……えっと、葉山先輩に教わって、試してみたんですけど。大丈夫、でした？」

頬を赤く染めて問う桃歌チャンは、参った、ってくらいにかわいくて、俺は笑顔で頷いた。
「完璧でしょ。相手の男たちみんな圧倒されてたし」
それにしても、大変だなー。桃歌チャンが女の子としてデキるようになればなるほど、サキのヘタレっぷりが露呈されちまう。
正直外見に合わずヘタレすぎるサキはもうちょっと頑張るべきだけど。
「あの人たち、見に来てくれますかね？」
「桃歌チャン追いかけて来るかもね。そして絶望する」
――サキを見て、ね。
外見でサキに勝とうなんて思うやつなんていないだろう。普通に考えたら。
桃歌チャンが人並みはずれてとてつもなくかわいいわけじゃないけど、あんなにイケてる彼氏がいるんだ。
「ま、ともかく大したことなくて良かった。できたらああいうことやりすぎるのもよくないけど、安全が一番だよな」
素ならともかく、だ。
「はい！」
とびきりかわいく元気に答えた桃歌チャンは、ぺこりとおじぎをして去って行った。
うむ……。俺もずいぶんと久しぶりに女の子を甘やかしてるなあ。
桃歌チャンて、守ってくれなくて大丈夫です！　って主張してるけど、守りたくなるよなぁ。
あんな小さな体で太刀打ちできるような男なんていないもん。
どれだけ口が達者でも物理的に抑え込まれる可能性が高いという意味で女の子は防御力がないのだ。
サキも、しっかり見守っててやらなきゃなんねぇ。アイツ、何故かケンカは強いからアイツがいれば安心できる。
せいぜい他のやつらの心配を買わないように……なんてな。
俺や弟が部内で一番弱虫だなんて自分たちがよく知っているさ。

「え？　いいですけど……。忙しい、んですか？」
『うん、結構。受付やってくれれば嬉しいな』
サキ先輩からの電話の内容は、店番を手伝ってほしいということだった。
もしかして、昨日の朝みたいな感じで、みんなサキ先輩に釣られてるんじゃ……。
今回の状況ならたくさんの女の子が彼に近づきたくてたくさん声をかけていることだろう。
言葉にできないもだもだを抱えながら、私は人の多い廊下を小走りで抜けた。
サキ先輩がたなびかないことも、彼の拒否を聞けないような女の子がほとんどいないのもわかってる。
けど、彼を不特定多数の恋愛対象として見るのは、辛すぎる。
私だけの、なんて無理だから、私の。私の、サキ先輩。
なんだかこう言うとすごく恥ずかしくて、私は自分の頬を叩いて気分を持ち直した。
先輩のクラスに行くと、予想していたより人は少なかった。
ぐでーっとしている琴先輩と二人で、サキ先輩は受付に座っていた。
「あ、桃ちー。ゴメン、ついさっき券売り切っちゃって、全然手伝いいらなくなっちゃった」
教室から出てくる女の子たちの熱い視線を爽やかにスルーしながら、サキ先輩も苦笑いした。
「まあま、とりあえず座って」
そう言って彼が指したのは……。
「え、えっと」
イスを引いて、腕を開いて、つまり、ええと、お膝の上に座れと。
おどおどしている私の腕を引いて、彼は私を膝の上にぽんと乗せ

た。
足、つかないから落ち着かないな……。
ちびな私がサキ先輩の前に座っても、彼の視界は阻まない。あまりバランスを崩すと落ちてしまうから、振り返って表情を伺うことはできなかった。
「ありがとうございましたー」
教室から出てくる人に声をかけたサキ先輩に、みんな一度はにかんで、しかし私を認めてぎょっとした顔をした。
「せんぱ、恥ずかしいです」
そう言う私に何も言わずに、私の頭をなでなでしたサキ先輩。
あれ、もしかして。
私がさっき抱いたもだもだ、具体的に言うと、サキ先輩への嫉妬。それをわかってくれてるのかな。
私がただ隣に座ってるだけじゃ、女の子たちは話しかけてくる。それを、わかってて……。
「用事とか行きたいとことかあったりした？」
「大丈夫です、ありません」
顔を見ることができないことに少しの不安を感じながら、首を横に振った。
「じゃ、これ終わったらそのまま一緒に準備行こうか」
相変わらず道行く女の子に睨まれていたけれど、私は少しだけ気持ちが軽かった。
――えへ、サキ先輩、大好き。
「お！　隼、お疲れ！」
琴先輩がぱっと体を起こして声をかけた先には、隼先輩の姿があった。
頭にバンダナを巻いて、前髪はその中に納めている。似合いすぎておかしいくらいのエプロンは、よく使われているとは思うのによれていなかった。
「これで最後だ。――ん、はいはい」

トレイの上に積み重ねられた焼きそばのパックのひとつを、元気良く券を見せた琴先輩に渡す。
教室の中から出てきたクラスの先輩らしき人にトレイを引き渡すと、隼先輩はふう、と溜息をついた。
「それにしても、何してるんだ、お前」
バンダナを外しながら私を見下ろした隼先輩は、汗を拭いてちゃっかり綺麗にバンダナをたたんだ。
「お手伝いに来たんですが、必要なくなっちゃったみたいで」
彼は無言で私を見つめた後、呆れたようにまたひとつ溜息をついた。
「たぶん琴はバカだから気づいてないだろうが、サキは仕事がもうなくなることくらいわかってただろうな」
「え？」
囁いた彼の言葉を聞き返そうとした私の耳を、サキ先輩は塞いで頭ごと引いた。
「ま、まあいいだろ！」
焦っているようなサキ先輩の声に、私は振り返りたくなったけど、彼の大きな手が頭をがっしり挟んでいてできなかった。
隼先輩が面白そうに笑って、私の頭を撫でた。
「よかったな、桃歌」
ハテナを浮かべるしかない私に、隼先輩はにやけながらそう言った。
な、何なの……？
「桃ちゃーん！　キャワユイ！」
高い声と共に襲ってきたちょこちょことした塊は、凪咲さん……だった。
短い髪を夏らしくちょこんと結んで、相変わらずかわいくておしゃれだった。
「凪咲さん、お久しぶりです」

水着を買いに行って以来だから、一ヶ月以上も会ってない。
……と言っても、まだ会ったのは三回目だけど。
「そのカッコ、桃ちゃんらしいチョイスじゃないけど、カワイイね！」
「水瀬先輩が選んでくれたんですよ」
ハイテンションに飛び跳ねる凪咲さんをなだめながら、向こうにいる水瀬先輩をちらと見た。
「へーえー。水瀬クンオシャレだもんねぇ。あ、そうそう！　水着、サキ気に入ってくれたでしょ？」
「はい、とっても」
他の部員の反応も良かったけれど、サキ先輩は特別だった気もする。
「ふっふー。昔からこんなおねえちゃんがいるからっておマセでムッツリだけど、そんなサキの好みも私たちにかかればなんでもわかるのよ！」
お、おマセでムッツリって……。
まぁ、他の誰よりもまずお姉さん方に恋しそうなくらい美人揃いなおうちであるけれど。
「はいはい。凪咲、ちょっと邪魔だからね。桃歌ちゃん、久しぶり」
「お久しぶりです」
清楚！　と叫びたくなるくらい綺麗で素敵な実里さんがそこにいた。
「なかなか上手くやれてるって聞いてる。お疲れさま、ね」
そう言ってユリの花のような笑顔を浮かべた。
あ、そういえば。
「孝篤くーん！」
ピアノやってるつながりで紹介したら面白いんじゃないかな、なんて思って孝篤君に声をかけたら。
彼はぱっと振り返って私を見た後、隣の実里さんを見てものすごく驚いた顔をした。

そして、形相を変えて走ってきた。
「ま、ま、松岡　実里さん！」
え、あれ、知り合いだったのかな。
綺麗な笑顔を浮かべたまま、実里さんは首を傾げた。
「えっと、根岸　孝篤君だっけ。私のこと知ってるんだ」
でも、実里さんは彼のことは知らない様子で。
「はい、根岸　孝篤です。覚えてませんか？　四年前のコンクールで、同じ表彰台に上りました。僕は小学生で、実里さんは高校生で」
孝篤君の目は輝いていて、まるで別人だった。実里さんは少し考えた後、口を開いた。
「自由曲は、プロコフィエフのピアノソナタ　第６番　第４楽章……？」
「そうです。――僕、忘れられなくて。実里さんの音と、華やかな雰囲気と。本当は小学校を卒業したらピアノはやめるつもりでした。でも、あなたの音を聴きたくなって、もう一度ピアノが好きになった」
自分のことをあまり私には語ってくれない孝篤君が、酷く饒舌に実里さんに話しかける。
彼女は、少し困ったように笑った。
「私、あの時が全盛期だったわ。もう、孝篤君の思っているようなピアノは弾けないかもしれない。でもね、これからいつでも聴かせてあげられるかもしれない」
聖母のようににっこり笑った実里さんに、孝篤君は首を傾げた。
「私、咲哉の姉です。家もすぐそこだし、いつでもおいで？」
納得したように頷いて、孝篤君は嬉しそうに何度も首を振った。
ぽかんとしている私に、にやけ顔の凪咲さんが耳打ちしてくれた。
「実里姉さんはね、まだ小さい頃に自分からピアノやりたいって言い出して、小中高でコンクール入賞しまくる天才だったのよ」
ピアノをやっているということは知っていたけれど……。サキ先輩も、そういう自慢はしてくれないんだなぁ。

たわいもない昔話なんかをしている二人をよそに、そっと視線を配すと、隼先輩と美咲さんが楽しそうに話しているのが目に入った。
あれ……あの二人って、仲良かったんだ。
美咲さんの言葉に笑う隼先輩は、まるで、別人のように明るくて、私は驚きを隠せなかった。
いつも寄せられた長い眉は、優しく垂れ下がっていて、その切れ長の目は細められていた。
「あぁ。あの二人はね、色んな事情で物凄い親密だけど、本当の姉弟みたい、っていう関係だから、安心して」
姉弟、というより、主人と助手とか執事とかみたいな。二人は他人には理解できないような不思議な空間の中で、信頼し合っているように見えた。
隼先輩とサキ先輩は幼馴染だから、彼女たちとも長く知り合いでいるだろう。
でも、あれだけ仲が良いなんて。隼先輩がひたすら楽しそうなのは初めて見たもの。
「っていうか、海も雲雀も鶫も来てないんだね。あ、隼の弟と妹ね」
「海は大会。雲雀と鶫はダブルデートらしいわ」
ダ、ダブルデート！？
大きくて中学生か高一のはずの隼先輩の妹さん……？　がダブルデートって……。綺麗な顔なのは似てるのかもしれないけど、性格とかは全然違うのかしら。
「雲雀と鶫ってね、双子なんだけど、隼のお友達の双子と付き合ってるのよ」
「そ、そうなんですか」
双子が、双子と。なんだか不思議な響きだった。
「面白いよねー。なんだかんだあそこの兄妹は隼が一番普通かも」
隼先輩で一番普通って、すごい。だって、彼ほど家庭的な男性は見たことないし、漫画の中みたいにクールな性格だ。
「それ、本人が聞いたら何て顔するかな。――さて、姉さんたち。

そろそろ片付けなきゃいけないから、桃歌チャンはもらってくよ」
苦笑を含んだサキ先輩の声がして、肩に手が置かれた。
「残念。……それじゃ、桃歌ちゃん、またね」
手を振った二人にお別れを言って、私はサキ先輩のあとをついて体育館に戻った。
「実里さんって、すごかったんですね」
「え、うん。そうだね」
あっそりとそれだけ言ってその他は何も言わないから、沈黙が流れた。
「俺も小さい頃は、実里姉さんみたいに誇れるものが欲しかった。だからさ、もう自分が持ってた大切なものに気づけなかった」
背中ごしのサキ先輩の気持ちは、私にははかり知れなかったけれど。
彼はくるりと回って、ひとつ笑った。
「自分自身。今はみんなのおかげで、一番誇れる」
男性に使っていい言葉か、わからないけど、サキ先輩はまさに松岡　咲哉の誇る、とても綺麗な花で、男子ヒップホップ部の華で。
私の、ただ一つの花。
「誇れるものを持ってる自分を誇るんじゃない、自分が誇れるように努力する。……って何言ってんだろ」
照れくさそうに笑った彼は、少しだけ五ヶ月前と変わったように思えた。
完璧で唯一な憧れの先輩なんてものじゃない。
彼はただ一人の普通の人間なんだ。
「私も、そう思います」
私なんて、彼に比べたに何も取り柄のない、ただの女の子だ。
だけど、生きてきた中で手にしたもの全てから成り立っているごちゃごちゃな自分が好きだった。
そう思えるのは、周りの人間がいたからこそ。
『ただいまを持って、一般公開を終了いたします』

冷静な放送委員の声は、それでも熱気を冷ますことはできなかった。

「さあ！　始まりました、文化祭のメインイベントと言っても過言ではないこの後夜祭！　今年度の司会は、ワタクシ、野田　草摩と！」

「はい、あたし、茅原　友里です！」

体育館に入ってから、生徒のざわめきは止んでいなかった。体育館使用団体として準備を少し手伝ったが、後夜祭の実行委員はみんな熱気がすごかった。

司会として現れた男女の女子の方は、前に隼先輩に声をかけていたダンス部の先輩だった。

けど、本物のモデルみたいなプロポーションの彼女は男子生徒には人気があるようだ。

「みなさん！　今年の文化祭は楽しかったですかー！？」

「うぉー！！」

主に二年生以降の生徒の叫び声に近い声が響き渡る。

一年生はみんな顔を見合わせてにやけた。

私も、この雰囲気にどきどきが止まらなかった。

「ところでみなさん！　学年、クラスごとのこの席順、窮屈じゃないかーい？　今年の後夜祭は！　席移動オッケーだ！　ただし、一年生の席を無理やりとったりしないように！」

ざわめきが一層大きくなって、次々に席を立つ生徒。

ど、どうしようかな。行くべきかな。

とりあえず和真君を探そうと思って振り返ったけど、もう既に立ち上がっている人に阻まれて、見つけることはできなかった。

席を立ったらちゃっかり座られてしまったので、私は行き場もなくて途方に暮れた。

「桃ちゃん、こっち」

ふと右手に感じた細い指の感触と、聞こえた私を呼ぶ声は、梢君

のそれに思えた。
まだざわついている中で、梢君はそっと私の手を引いて人ごみから私をすくいだした。
「先輩のトコ。お迎え命令かかったから」
皮肉めかして笑った梢君に、私も少し安堵して笑い返した。
ずかずかと進む梢君は、振り返った人たちの視線を浴びながら少しも臆せずに二年生の席へと向かった。
さすがのサキ先輩たちで、わざわざ言わなくても空けてくれたのか、それとも頼んだのかわからないけど、彼らの周りにはきっちり部員分の席が空けられていた。
「梢、ご苦労サマ。さ、座って」
サキ先輩に促されて彼の隣に座ると、こちらを覗いていた女の子と目が合った。
憎悪や、嫉妬や、悲哀じゃない。何も浮かべていないその表情は、一言に怖い、と表現するには何もなくて。
「桃歌チャン」
「はい」
私は、女の子の無表情な視線から目が離せなくて。握り締めた手が、震えた。
「こっち向いて？」
目をぎゅっとつぶってそのまま首を回した。そうでもしないと、怖くて。
誰かの指先が前髪をすくって、それから優しく撫でた。
そっと瞼を開ければ、前に見ていた女の子の視線とは真逆の、サキ先輩の暖かな雰囲気。
「俺は、『優しい』って建前の臆病者だ。だからね、女の子のことを怒ったり殴ったりできない。でも、今もすごいイライラ……っていうか、もやもやした」
もやもや。怒りとか悲しみとか、言葉じゃ表せない感情の表現を、彼は素直に口にした。

「元を辿っていくと俺のせいだから、なんとかしてやりたい。……でもね、その。桃歌チャンは何にも心配しなくていい。……知ってる。自分のことじゃなくて俺らのことばっかり庇ってくれてるの」

『梢君なら、あなた達を軽蔑しますよ』

嫌、だったから。私は自分には胸を張ってるってつもりだったし、自分に悪口言われても先輩たちがいる限り怖くない。……と思ってる。だけど、部員が悲しんだり怒ったりするところは見たくなかった。そんなのは誰も喜ばない。

「強がらなくていいんだ。怒った女の子が怖いのは知ってる。怖いだろ？　責められたら。罵られたら。暴力ふるわれたら。俺らを盾にしていい。恥ずかしいことじゃないから。……男は、頼られないと寂しいんだ」

長い台詞を言い終えて、彼はふっと笑った。

どうして急にそんなことを言ったんだろう。そんな言葉は、サキ先輩には無用なものだと知っている。気まぐれな彼にタイミングをはかる理由なんてない。

「私、先輩のイメージが悪くなるのは嫌です」

篠田先輩との悲劇。私が大きい顔をして、もし矛先が彼に向かったら、私は耐えられない。

「好きな女の子が苦しいのを黙って見てるヤツが表面上モテたり信頼されてても意味ないだろ？」

口をつぐむしかない私に優しく笑いかけて、そっと頭を撫でてくれる。

「俺が他の女の子に全然興味ないって、みんなわかってくれないかなぁ」

呟いたその言葉に、気づいてしまった。私はすこぶるずるい女の子だ。

サキ先輩は他の女の子に惹かれたりしないで一途にいてくれるのに、私は部員にちやほやされて喜んでる。彼の一筋な想いに応えてあげられていない。

「ごめんなさい。サキ先輩、私、部員全員のことが好きで、いっぱいどきどきしたりしちゃってます。サキ先輩に――」
「それは言わない約束！　……俺も男として、それなりにそういうこと、ないって言えない。それに、しょうがないさ。部員もみんな桃歌チャンが好きだから」
　私はサキ先輩のことが好きな女の子に複雑な感情を抱えてしまっているのに、彼は私と違ってそんな理由を口にした。
「くう、甘いねェ。イイ男の口説き文句っていのはホント売り物にでもなりそうだ」
　背後からサキ先輩の頭をぐっと押して身を乗り出してきた水瀬先輩に、サキ先輩は無言の圧力を送っていた。
「そーやってムキになっちまう辺りがまだ子供なんだって。俺なら爽やかに振り払って、『当たり前だろ？』とか言うぜ」
　オーバーにカッコつけたポーズをとりながら水瀬先輩は私にウインクをした。
　あはは、いつも通り……。
「さあて！　そろそろ席は決まったかな？　じゃあ、始めるよ！　後夜祭、最初の団体は？」
「ダンスです！　女子の有志、男子の有志、そしてそして、ダンスの部のメインイベント、男女ペアダンス！」
　ペアダンスという言葉に、どきりとした。一年前のサキ先輩と篠田先輩は、ここで……。
　しかし、私に余計なことを考える暇を与えないくらいに体育館の熱気は素晴らしく、周りの歓声も大きかった。
　イヤなこと、今くらい全部忘れよう。心配かけ合いのいたちごっこは終わりそうにないのだから。
「最初の団体は……」
　女子のダンスの有志は、主にダンス部の中でグループを作ってやっているようだったが、部活とは違う、『後夜祭らしい』華やかさや楽しさが伝わってきた。

司会の先輩も途中で抜け、一曲踊ったりしていた。
「それでは！　ここからは男子の有志です！　最初の団体は……『ＥＶＥＲ』。おっと、こちらは一人でソロダンスを踊るようです。チームメッセージは、『皆さんの中で僕の姿に驚く人がいるかもしれませんが、僕はこの日のために何年も費やしてきました。楽しく踊ります！』ということで、またソロダンスは初挑戦だと！　どんな踊りを見せてくれるでしょうか？　では、『ＥＶＥＲ』です、どうぞ！」
何かが引っかかって、私は思わず首を傾げた。しかし、その理由はほんの数秒後に明らかになった。
真っ暗な舞台の照明がついて姿を現したのは、紛れもない久くんだったから。
彼と認めるなり、客席から歓声が湧き起こった。私は驚いて席を立ってしまった。
「どうして……」
あれこれ考えているうちに、ダンスが始まる。
他の誰とも違う。いつもの久くんらしくもない。だけど、真剣な彼の気持ちが伝わってくる。
大きな舞台の上で、小さな身体の彼は、それでもそういう風に見せない何かを持っていた。
彼のキレよく動く手足に、ころころ変わる表情に、釘付けになった。
数分の短いステージはすぐに終わり、ものすごい歓声に包まれて、久くんは笑った。
心から、嬉しそうに。しかしどこか悲しげに。
「谷垣　久は――！」
何かを叫んだ久くんの声は、歓声にかき消されて、私には聞こえなかった。
きっと、彼なりの何か大切なことだっただろうと何故か思ったけれど、知らなくてもいいのかなって。

細かいことは気にしなくてもいい。そう彼が言っているように思えた。
心の中に何か熱いものを残して、久くんは舞台の上から去っていった。
もはや場違いに思える司会の二人が出てきたとき、私は脱力して席に座った。
その後はあまり印象に残るようなものじゃなかった。ヒップホップ部より上手い人なんてあまりいなくて、やっぱり後夜祭のノリだと、そこまで精度も高くなくって。
そして、いつの間にか男子のダンスの部は終わっていた。
「ついにこの時がやってきてしまいました！　メインイベントとも言える男女ペアダンス！　今年のエントリー組数は五組！　なな何と、去年に引き続き、早くも期待の声が高い、ダンス部とヒップホップ部のペアもあります！」
「はい！　楽しみですね。それでは、最初のペア、どうぞ」
男女のペアダンスは見たことがないけれど、きっと篠田先輩とサキ先輩が万人を惹きつけるダンスをしたのは間違いなくって。
ペアダンスが始まって、それぞれそれなり以上の実力の男女が踊る。
時にほとんどソロで、女らしく、男らしく。
「最後は！　ダンス部のマドンナ、３－Ａ篠田　愛香と！」
「男子ヒップホップ部部長、３－Ａ葉山　悠輔！」
男子も女子も湧き上がった。
どうして……。と思った私は、ついついサキ先輩の横顔を見てしまった。
舞台のライトの反射を浴びて、憂いの表情を浮かべていた。
彼は、二人ともに負い目を感じているはず。それに、去年一緒に踊ってしまった。実際にどうだったのかは私にはわからないが、事情を知らない人の中には、どうして、と思っている人もいるだろう。
でも、私は。私には、関係がなければ責任もなくって。

微かに震えるサキ先輩のシャツの裾をつまんだ。
手を引くのがためらわれたけど、おそるおそる引いてみる。
彼の悲しい顔は見たくなかったから、精一杯笑ってごまかした。
過去のことは気にしないで、私だけを見て？　って。それで彼が楽になるならどうしてでも言いたかった。
しかし、彼は逆に私の方を向くなり背中に腕を回して抱き締めた。
「葉山先輩は、愛香先輩のことをすごく愛している。……だから、これでいいんだ」
私の耳のすぐ横で、消え入りそうな声で、サキ先輩は言った。
きっと、謝りたいのに、謝れていなくて。本当は、愛香先輩に勘違いされているのは嫌なのに、誤解も解けなくて。
彼女と、彼の幸せを考えて、彼は黙している、と。
私を抱き締めたのは、彼なりの弱っているアピールなのかもしれない。そう思わなくても、私は無意識に彼を抱き締めた。
「きっと素敵なダンスを踊りますよ。見ないと勿体ないです」
それだけ言って私から振り解いた。
その後の彼の顔は見ないで舞台に集中した。
葉山先輩は、見たこともないような穏やかな表情を浮かべていた。

音楽発表の部では、水瀬先輩が流行中のアイドルの曲を歌って踊って、拍手喝采を浴びていた。
いわゆる『ドヤ顔』で席に帰ってきた水瀬先輩は、なんだか別人みたいだった。
「皆さんお疲れ様でした！　ここで最後に緊急企画です！　題して……」
「『気になるあの人』！」
「皆さんに答えてもらったアンケートで、一番投票の多かった、『最近気になっている・知りたい人』に、登場していただいてインタビューに答えてもらいたいと思います！」
「ち・な・み・に……！　本人には伝えてありませーん！」

盛り上がる人はひたすら盛り上がっているけど、私みたいな人は苦笑いするしかなかった。
なんて無茶な……。
「それでは呼ばれた人は舞台向かって左側に来てくださいねー？」
「まず一人目は……」
「はい！　一人じゃありません！　１－Ｃ基山　桃歌さんと、２－Ｃ松岡　咲哉君！」
すっごく、嫌な予感がした。そして、それは当たってしまって。
私は頭が真っ白になって胸の奥から嫌なもやもやが湧き出して冷や汗をかいた。
サキ先輩がこちらを伺っているのがわかるのに、目を合わせる勇気が出なかった。
誰かがそんな私の頭をがっしり掴んでサキ先輩の方に向けた。
「ほら、早く行ってこい」
耳元に囁く隼先輩の低い声に、私は大分安心してしまって、サキ先輩を目を合わせて、頷いた。
手をつないで引いてくれる彼を頼って、立ち上がる。
少しおぼつかない足元だったけれど、サキ先輩がしっかり手を引いてくれるから、怖くはない。
周りの音は聞こえない。周りの人は見えない。
そういう風に考えて、我慢した。こういうのは、あんまり得意じゃないから。
逆にサキ先輩は慣れているわけではないだろうけれど、けろっとした顔をしていて。
実行委員の人に連れられて舞台の上に上がったときにも、私はつないだ手を放すことができなくって。
自分の心臓のどきどきしか聞こえなかった。
「はい！　聞きたいことはたくさんありますが、まずお名前からどうぞ！」
「松岡　咲哉です」

「き、基山　桃歌です」
サキ先輩がいつも通りでいてくれるのが、唯一の救いだった。
司会の男子の先輩はノリノリすぎて怖いし、女子の先輩はダンス部ということもあって視線が怖い。
「それでは皆さんから寄せられた質問の中からいくつか！　えーと、まず、お二人は付き合っているんですか？」
びくっとしてしまった。単刀直入すぎて驚いた。
……けど、冷静に考えたら、まだ私の右手は彼の左手としっかり結ばれている。
ふと横を見上げるとサキ先輩は普通に微笑んでいて。
「はい」
なんて自信たっぷりに答えた。
客席から聞こえる色々織り交ざった歓声は、あんまり聞かないようにして。
「おぉ……！　それはアツいですねぇ！　次の質問です。基山さんへの質問ですね。えーと、ヒップホップ部で松岡君の次に好きなのは誰ですか？」
――思わず噴き出しそうになった。
ど、どうしよう。サキ先輩に目配せすると、ちょっと知らないフリしてる顔をしていた。
だ、だだだってみんなのこと好きだから……。
「え、え、と……」
「ううむ！　気を遣っているのかな？　それじゃあ、学年ごとにいこうか？　三年生！」
う、うぅ……。それじゃあ三人言わなくっちゃいけないの？
あんまり黙っていても身の危険が迫ると思って、私は吹っ切れた。
「ひ、久くんです」
「おおお！　久くんは先ほど素敵なダンスを見せてくれましたねぇ……！　松岡君とは正反対なタイプに思えますが……。それでは二年生！」

一番悩む、というか……。
全員に恩があるから誰を選んでも後々もやもやするし。
――でも。
「隼、先輩」
水瀬先輩はそのことで長い間いじってきたりしそうだし、琴先輩は普通に照れちゃうからかわいそうだし、一番妥当かなぁ～……なんて。
うう、先輩たちのいる辺りが見られません。
「お母さんという異名を持つ笹神君とは！　またシブいですね～。それでは、一年生は？」
……敦史君はとりあえず外そう。
梢君は実際良い人だけど春のアレを考えるとちょっとまだ心は開けない。
そしたらやっぱり……かなぁ。
「孝篤君です」
ふっと横目で見たサキ先輩は怖いくらい微笑を崩していなかった。後で、ちょっと謝ろうかな……。
「根岸君、だったかな？　彼は松岡君と近いものがあるねぇ！　ありがとう！　……さぁ、女子諸君、松岡君の方も聞きたくないかい？」
「聞きたーい！！」
女の子たちの甲高いレスポンスに、司会の彼は満足そうに頷いた。
「それでは、松岡君。誰か気になっている女の子は？」
司会者が振り返ってサキ先輩に問うたとき。
私の右手を握った左手を、ぐっと胸に引き寄せて、右腕で私を覆う。
状況を理解したとき、私は物凄く穴があったらこのまま入りたい……というか蒸発して塩になってしまいたくなった。
痛々しい叫び声が客席から聞こえる。
びっくりしつつマイクはしっかり向けた司会者のそれに、彼は顔

だけ近づけた。
「俺は桃歌チャン以外に興味ありません」
そう言って、私の方を向いた。
――や、ヤバイ！
そっぽを向きたくなって。彼の腕に顔をうずめたくなって。とにかく逃げたくなって。
でもここで逃げたら、多分彼の今の言葉は意味をなくしてしまう。
サキ先輩が満足そうに笑って私に顔を近づけたとき、舞台の照明が消えた。
真っ暗闇になったけど、私は既に目をつぶっていたからあまり怖くはなかった。
そして唇に暖かい感触。
顔を離したサキ先輩は、私をよりしっかり抱き締めると、そのまま抱き上げて走った。
「ちょ、せ、先輩っ」
「しー。このまま戻るよ」
階段があるであろうところを飛び降りて、彼は暗い中でなんとか席まで戻った。
程なくして照明が戻り、マイクが入らなかったらしい司会者も話し始めた。
一体、何が……。
「ちょっとしたトラブルがありましたが、お二人はロマンティックに退散していったようなので、よしとしましょう！　さて、次は……」
客席がまだどよめいている中、司会者は進行させる。
あまりにも突然だったので私はしっかりとサキ先輩に抱きついていて、それに気づいて恥ずかしくなって離れた。
私が座っていた席の右隣、隼先輩の席には誰も座っていなかった。
首を傾げていると、私たちを見ていた水瀬先輩が笑った。
「隼がヤバそうだって言って、草野先輩連れてちょっと細工しに行

ったのさ。そのうち帰ってくるだろ」
……隼先輩にはすっかり脱帽です。
「それにしたって、咲哉クンにはビックリですなぁ」
にやけながら見上げた彼に、サキ先輩は笑って言った。
「迷いはなかった」
それを聞いた呆れ顔の水瀬先輩と顔を見合わせる。……サキ先輩、ちょっと頭のネジ緩んでませんか……。
でも鼻歌なんて歌ってる、長身のちょっぴり子供っぽい彼は、私の好きな人なんです。
舞台の上は別の話題で盛り上がっている中、私たちは私たちだけで違う雰囲気を作り上げていた。
――けれど、次の瞬間、それが止まった。
「サキ、あまり調子に乗るなよ」
帰ってきた隼先輩が、怖い顔をして、サキ先輩の胸倉を掴んだ。
１０センチ以上も身長差はあれど、かなりの力で握りこんで首元を引き込んでいた。
少しきょとんとした顔で、サキ先輩は彼を見下ろす。
「教師も見てる中でキスはまずい。後で何言われてもわからん。部活動停止になったりしたらどうする」
眉を潜めたサキ先輩は、少し苦しそうな顔をして頷いた。
……そっか。私も気がつかなかったけど、そういうことも、もちろんある、よね……。
「それに、桃歌の気持ちも少しは考えろ」
吐き捨てるように言ってサキ先輩を解放した隼先輩は、ちょっと不機嫌そうだった。
私があの場じゃ嫌だって、わかってたんだ……。
複雑な顔をしたサキ先輩を見ていられなくて、私は俯いた。
私が口出しできるような問題じゃ、ないかも。
「まーま。センセー達だって実際生徒がキス以上のことも色々やってることくらいわかってるだろーし、見えないとこでやりゃ問題ね

ェって」
説得力ありすぎです、水瀬先輩。
でも……隼先輩は、一番にサキ先輩――みんなのことを考えて、サキ先輩に怒ったんだ。
彼が原因で問題が起きれば、彼の居場所がまた狭くなってしまう。
そんなのは、辛いもんね。
「先輩、ありがとうございます」
腕組みをしたまま足を組んで座り、俯いている隼先輩にそう声をかけた。
彼は顔も上げず頷いた。
「……嬉しかった」
「……え？」
気のせいかな、って思うくらい小さな声で、彼は確かにそう言った。
「俺はお前のこともサキのことも好きだから、いつまででも守らせてくれ」
顔を上げた隼先輩は、慈愛に満ちた、とでも言うべきか、穏やかな笑顔を浮かべていた。
「今朝言った嫌な予感、な。気づいたよ。去年のペアダンスのこと、サキが思い出さないはずなくて……。それでお前らがギクシャクしたら、嫌だなって、自然に思ってた」
隼先輩は、正真正銘の大人なんかじゃない。れっきとした高校生だし、悩んだり余裕を失ったりする。
わかっていたら、こんなにも抱え込ませることなんてしないのに。
「私、嘘はついてませんからね。隼先輩のことも好きです。すごく、頼りにしてます」
「ばーか。わかってるよ」
サキ先輩ばっかりじゃなくたっていい。私と彼を応援してくれる隼先輩みたいな人はたくさんいて。そんな人と仲良くすることが悪いことだなんて思わなかった。

珍しく少しだけ恥ずかしそうに笑った隼先輩が、やっぱり純粋に好きだから。

「桃歌チャン、眠い？」

「ふぁ……。はい、結構に」

後夜祭が終わって、いつもの先輩たちとの帰り道。

もう日もすっかり落ちて真っ暗なせいか、サキ先輩はしっかりと私の手を握っている。

「水瀬～マック行こうぜー。腹減った……」

「お、いいねぇ。みんなは？」

「私は眠いので帰ります……」

「早く帰って夕飯作らねぇと」

残ったサキ先輩を、みんなで見る。

「あ、俺、桃歌チャン送ってく」

思い立ったように言って子供っぽく笑った。

私とつないだ手をぶんぶん振ってルンルンしている彼は、本当に初めて見たときのあの人だとは、今はなかなか思えなかったりして。

でも、そんなところも大好きで。

「文化祭終わったし、デート行こうな。どこがいい？」

「私……。どこでも、いいですよ」

睡魔に襲われて思考停止しかけててろくに考えられないなんて口に出せないけど、彼はきっと素敵なことを考えてくれるから、任せたって平気。

誰が何と言おうと、私は私の気持ちを捨てない。彼が彼自身の気持ちを大切にしているのと同じように。

そこに差異があってしまっては、きっと成り立たない関係だから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2023ba/

Blossom

2012年1月5日01時48分発行